
彼を愛したポーンの思惑

木枯 雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼を愛したポーンの思惑

【Nコード】

N4380H

【作者名】

木枯 雪

【あらすじ】

将国のアルタイルの二次小説（夢小説）です。ないなら作ってしまえ！という勢いで作ったので気まぐれ更新になります。異世界トリップ&原作沿い&原作知識なし&マフムートの従者。単行本の最新刊までのネタばれ注意。原作1年ぐらい前からスタート。最初は奴隷として原作キャラに接触せず不当な扱いを受けます。読む時はご注意ください。

随時更新 : 説明書(前書き)

本編に合わせて随時更新します。
読む際はご注意ください！

随時更新 : 説明書

説明書:

この連載は講談社シリウスKCで連載中の「将国のアルタイル」の二次小説（夢小説）です。

単行本から情報を得ているので、最新刊までネタバレが出ます。時間軸は原作1年ぐらい前からスタート。

さすがにバルトライン帝国のお国事情まで分からないので、トルキエ将国側で進みます。

サロスにトリップした主人公が、マフムートの従者をして、日本に帰る方法を探します。

最初は奴隷として原作キャラに接触せず不当な扱いを受けます。読む時はご注意ください。

2010/5/7 原作にたどり着いた…!

なんかマフくんの口調が分からなくなってきた…。

というか、私が書くとマフくんが里桜に冷たい感じになる…なんで？

と、とりあえずこれからも頑張ります!!!

主人公:

功刀里桜くめましろ

17歳（原作開始時）、女性

持ち物：制服（ブレザー）、リュックサック、携帯電話、教科書類、財布、ミュージックプレイヤー、筆記具、レポート用紙、生理用品
その他もろもろ

性格：前向き、犬っぽいと言われる
容姿：日本人としては普通。アルタイルの世界では12～14歳くらいに見える（…という設定にします）

登場人物についてのメモと考察：

マフムート

年齢：12歳で武術試験に（首席で）合格。新兵学校で1年間

鍛えられる。原作より

ここから考察

ということとは、（足の骨折で卒業が延びてなければ）13歳で軍人になる計算。

軍人 十人隊長 百人隊長 千人隊長 將軍 という昇格方式をきちんと踏んでいくとする。

トルキエは能力主義社会 マフ君は常時功績才能豊か&人格はとっても高潔 ストレートで上り詰めるのも早いんじゃない？

（現実的にありえねーけど）昇格に1年ずつかかったとしたら、原作開始時に17歳の將軍でことになるのか？

でもマフ君、人の上に立つのがうまくないとか言われてたなあ…。でも容貌的にはまだ20歳って感じじゃない気がする。

うーん：17～20歳の設定でいいや！間とって18歳前後ってことで！

というわけで、彼を愛したく、ではマフ君の年齢は18前後にします！

追記：…ってというか1巻でシャラちゃんが「4年前の兵隊さんが將軍になって〜」って言ってんじゃねーか！！！！

訂正！マフ君の年齢は、原作開始時に17歳ってことで！（汗

世界観…

国によって言語が違うということはなさそうなので、言語は全国共通にします。(アラバなど一部を除く)

里桜は異世界からトリップしてきたので、言語が通じません。マフ君は特別。

トルキエ将国はトルコ(現地ではトルコを『トルキエ』と言うそう。世界的にはジャパンだけど日本人はニホンとかニッポンって言うんだぜ！みたいなのですね)をイメージということで、トルコの生活を参考に妄想させていただくことにします。

しかし当方、トルコで生活したことはありません。

所詮、書籍とかネットでの知識程度…。

そこかしこで勘違いだとか間違いだとかがあると思います…。

みなさん、どうか知識不足な私にご協力を…！

(勝手なイメージで) 国語り…

トルキエ将国…

砂漠と草原で覆われた商業の国。

国は13の州に分けられ、それぞれを将軍が統治している。

首都は金色の町も13の区に分かれていて、それぞれに将軍邸がある。

バルトライン帝国…

皇帝ゴルドバルト11世率いる、広大な土地を持つ帝国。

しかし国政に関しては一枚岩ではないらしい。

皇帝に血の連なる女性が戦いの最前線に赴くこともある。

ポイニキア（燈台の都）：
港湾都市国家。

三千年間、他国からの侵攻を許さなかった、鉄壁の都市であった。海の幸が豊富な御馳走は、ぜひ一度は食べてみたい。

サロス：

ポイニキアの南に位置する都市国家。

帝国と修好通商条約を結んで、依存度を高めている。

ここで奴隷の売り買いのシーンが描かれていたので、里桜もここで売られる設定にします（ダメでした。なので、サロスの商人に売られる設定に変更します！すみません！）

ヴェネディック共和国（海の都共和国）：

人工島の都市国家。

自国の利益を最優先させる、一見ドライなお国。

中央最強の海軍を有する。

ムズラク将国：

トルキエに（一部）接して北東にある国。

大トルキエの槍として^{ムズラク}独立自治を許されてきた君主制の国（世襲制）。

3代将王、^{スルタン}紅虎の^{アル・カブラン・バラバン}バラバンが統治。

バラバンさんは「人の価値は顔だよ、顔」と言っちゃうような人。馬車から下りる時も人を踏み台にしてるし…。

しかし彼も悔しいことに顔がいい。マフ君に目をつける辺り審美眼は確かな様子。

クルチュウ将国：

トルキエとは接せず、ブチャクとムズラクの北にある国。西にバルトライン帝国と接している。

大トルキエの剣クルチユとして独立自治を許されてきた君主制の国（世襲制）

将王セリムスルタンが統治。

仮面の王様。この人の衣装は私の（西アジアっていうかトルコの）イメージにあう気がする。

ブチャク将国…

トルキエに接して北にある国。西にバルトライン帝国と接している。大トルキエの短刀ブチャクとして独立自治を許されてきた君主制の国（世襲制）。

将王ウズンスルタンが統治。

ヒゲとターバンと恰幅がいい感じの将王。

（予告から推測すると）帝国に富で買収された様子。

バルタ将国…

トルキエに接して東にある国。

大トルキエの斧バルタとして独立自治を許されてきた君主制の国（世襲制）。

将王ファトマスルタン（ムズラクの将王バラバンの妹）が統治。

将王の中の紅一点で上品なおばさま。しかし娘に反旗を翻らされて部屋に閉じ込められたことも。

もくじ…

タイトル：彼を愛したポーンの思惑

序話：破綻したポーンの日常… 平和な日常の一場面とその
終わり

1話：溺れたポーンと海水… 足のつかない深い海で溺れる

- つて怖いよね
- 2話 : 捕らえられたポーンの安堵 : 荷物と貞操を守れて安心
- 3話 : 小部屋のポーンが現状把握 : 荷物にまぎれてた飴玉は一つずつ袋に入ってるので塩飴にはなりませんでした
- 4話 : 陸地に着いたポーンの脱走 : 人生初の脱走、そして失敗
- 5話 : 捕獲されたポーンと商人 : 人を人として扱わない、そついう商売もある
- 6話 : 路地裏を駆けるポーンが恐怖 : 女性にとってはとても怖いこと。男性にとってはどうなんでしょう？
- 7話 : 捕まえられたポーンの三度目 : どうしても逃げられない現実。思考が無茶苦茶になっていることを文章にするって難しい :
- 8話 : 理解したポーンと事実 : だいぶ落ち着きを取り戻しています。急ぎ足でもいい : 10話ぐらいにはマフ君を出したい : !
- 9話 : 牢屋の中のポーンの現実 : 自分の立ち位置を見出して絶望。次の話でマフ君を、と思ってるのですが :
- 10話 : 彼と出会ったポーンの三日目 : 絶望と希望と絶望と足掻き。2話に分ければよかったです、10話にマフ君を出したい欲望に負けました :
- 11話 : 目を見たポーンと彼女 : マフ君とお話開始。ようやく軽く読み流せる長さになった : !
- 12話 : 泣いたポーンと彼女 : 自分の振り返りと遅れてついてきた感情。ここで自分を客観的に見ることで次のステップに移れるようになります
- 13話 : 傍観するポーンと笛の音 : 奴隷商人の制裁とマフ君のお仕事。こじつけ感満載 : 。里桜の頭で処理できる容量が限界になります。頭パーン
- 14話 : 与えられたポーンの希望 : 今後の生活の保障につ

いて。グダグダ感が否めません。トルキエの家の部屋ってクツションだらけでいいんだろうか

15話 : 彼女とポーンの会話 : お互いの世界観について。お互いにお互いの見解について理解したので、世界観についてのグダグダは今回で終わり(の予定)

16話 : 理不尽とポーンの驚き : マフ君の性別話と彼の考えについて。次話からマフ君の家での生活スタート。捏造万歳につき要注意!

17話 : 彼とポーンとお祝いの日 : 原作開始の10日前。家族がお祝いしてくれないってなら、第二の家族(居候)がサプライズを引っ提げてお祝いしてあげるよ!

18話 : 迷子のポーンと駆け足の一日 : 原作開始に間に合った。とりあえず、現在の二人は「目の前のことで手いっぱい」と「そんな彼を追いかける」って関係。

序話 : 破綻したポーンの日常

今日で学校が終わり。

明日からは待ちに待った夏休み、宿題は面倒だけど！

そんなことをつらつら思いつつ、暑い炎天下を家まで急いだ。

電車の中は涼しかったのに、外に出た途端にこの暑さって困る。

荷物も重いし、駅から家まで遠いし。

だーっ！おてんとさまのイジワル！

汗で手が滑って、定期入れが地面に落ちた。

背中で揺れるリュックを背負い直しながら、車の下に手を突っ込んで取り上げた。

車の下で影でノラ猫が暑そうにひっくり返ってた。

うん、その気持ちはよくわかるよ。

「あちーよー…」

すっかりぬるくなつたお茶を飲んで、日焼け止めが汗で流れるのを気にしながら歩いた。

温暖化なんか大嫌いだ！

「ただーいま… ああああああゝっ！?!?」

がくん、と体が下へ下へと落ちていく。

必死に手をのばして、玄関の取っ手にしがみついた。

「な、な、なんなの… なんなのよおおおおッ！」

ぶらぶらと足が風に揺られて、ちよつと怖い。かなり怖い。

遠く下に見える青色がキラキラ光ってる。

あれ、海？

え、だって、あれ？玄関どこいった？

恐る恐る頭上を見ると、両手でしがみついている見慣れた銀色の取っ手があった。

重たそうな扉も自分の家の扉だ。

けれど、扉の枠の向こう側に見える空は、こっちの空と違う。

雲が中途半端に切れてるし、空の青さも全然違う。

こっちのがずうっと青くて重たそうで、なんだか手が届きそうで、綺麗だ。

「う、うへえ…手がしびれるー…」

まだ下に落ちてはいないけれど、重たいリュックが肩を圧迫するし、下に落ちるのを促進しているといつかなんていうか。

痛い痛いと思いつつ歯を喰いしばって、汗で滑る取っ手にしがみついていたのだけれど。

腕の肉がプルプルするし、汗で滑るし、暑いし。

ずる、と手が滑ってしまったのは、仕方がないと言おうがなかった。

汗をかいた肌が急降下の風で冷やされる。

いくら里桜がジェットコースター好きでも、これはキツかった。

言葉にならないぐらい、怖い。

次に気付けば、そこは水の中だった。

一瞬気を失っていたらしい。

吐き出した息が、変な形になって目の前を通って行った。

(ああ、い…)

その青色を綺麗だと思う、前に。

呼吸ができない苦しさ、眼球と鼻の奥の痛さに、里桜は水中でも

がいた。

がばごぼと塩辛い水を大量に飲みこみながら、上下も分からない中で必死にもがいて。

瞼の裏に見える光に向かって、必死に手を伸ばした。

1話 : 溺れたポーンと海水

おーうおうおう、なんだいこいつぁ！

塩っ辛いし、潮の匂いだし、下に引きずられる感じがするし。

「ぶっ…げっほげほがぼっ」

海面に顔を出しながら咳を繰り返していたら、当然体が下に沈んでしまっ。

ここは足のつくプールじゃない、海水浴場の浅瀬でもない。

しかもあたし、服着たままだから溺れるじゃん！

やべーよこれ、やばすぎだよ。

いやいやいや、ちよつと待てなんで海？なんで海！？

海水が痛いよ目にしみるっ！

うん、ここが海なのはよく分かった！

でもなんで海！？

あたし家に帰っただけじゃん。

玄関の床がなくなっって、なんで下に海があっただけよ！

うーみよーおれのうーみよーってか！？

それってどこのCM!？

ていうか地底湖なんかか？

でもこれって地底湖じゃなくて地底海じゃん！

っーかそんなトコの上に家建てるのか、それこそアリエネー！

(でもこれって、青空じゃん…)

(人口のじゃないのなら) 太陽もある、雲もある、空の青色のグラ
デーションがあっって、鳥も飛んでる。

じゃあ、これって、マジ物ですか？

「げぼっ……」

塩辛さに舌がマヒしてくる。

真水飲みたい……。

足首まである運動靴だから脱げる心配はないけど、靴下に水溜まって気持ち悪いし……。

あ！ちよ、これケータイ大丈夫か！？

ていうかりユック、教科書と辞書がヤバいッ！

……ちゃんとフタしてたっけ……。

……大丈夫、きつと大丈夫！

ていうか荷物落ちたらオサラバじゃん、海底になんか取りに行けないじゃん！

海底……だよな、陸地全然見えないし。

足つかない……し……。

(……サメとか、いる……かも……)

そう思いついて、血の気が失せるってのを味わった。

やべーよこれ、死ぬ、死亡フラグじゃん……！

あ、あ、足の先から喰われて、血が、どばーっ、て……！

「がぼがばばばー……！」

だれかたすけてー、とか。

助けてくれる人なんかいないんじゃないか！

どうしよう、どうしよう！

なんか、もう、浮かぶのにバタバタしてるだけで明日の筋肉痛が予想でき……明日がくるかも分からない！

海の水、冷たいし……。

なんだっけ、こういう映画あった気がする。
でーいぷぶるーだっけ？
覚えてないからよくわかんないや。
でも、あれだけ暑いと思ってたのに、今はすごく寒い。
海の水ってこんなに冷たかったっけ？
頭のとっぺんだけ、太陽に焼かれて熱い。
暑い、寒い、熱い、冷たい

(あ、足が……っ)

足の動かし方を忘れたみたいに、筋肉が強張った。
どうしよう、溺れる、死んじゃう…
ざば、と波がたった。

手で波を叩いていた時とは全然違う感じの、なんていうか全体的に
ざわめくような波。

体が揺られて、海水をたらふく飲んじゃった。

塩分取りすぎでぶっ倒れそうだ。

クラクラしながら、波が来た方を見た。

津波でも来るのかと、思ったのに。

あったのは、近づいてくる影。

船。

「だっ」

助かった！

ちようどこっちに向かって進んできてる。

これなら、この調子なら。

…船に轢かれるとかの事故がなければ、助けてもらえる！

…なんか古風というか、現代にはアリエネー感じの、木造の船だけ
ど！

助
か
っ
た
！
！
！
！

2話 : 捕らえられたポーンのア堵

初めて乗った木製の船の上は、ちっとも快適じゃなかった。タイタニックな気分を味わいたかったのになあ。

ていうかそもそもあたしは船に乗ったことないのに、無茶がすぎるってモンなのよ…。

それにこの船の人たち…なんか人相悪いし。

男の人ばかりだし、枯れた声が怖いし、なんか全体的に威圧感バリバリじゃん。

服装もいっただいいつの時代の人ですかーって感じだもんなあ。

しかも外人さんばかり…。

でも助けてくれたのは事実だしなあ。

うん、お礼は言っておこう。

「あのー…助けてくださって、ありがとうございました」

髪とか服から滴が垂れてるけど、我慢我慢。

タオルくれたらもつと嬉しいんだけど、とか思いつつも頭を下げた。これでも本当に感謝してるのだ。

あのままだったら確実に死んでたと思うし。

真摯に頭を下げたあたしに、おじさんたちはなんか変な顔した。

それからお互い顔を見合わせて、ペロペロしゃべってる。

なんだ、外国語か？

一応あたしも現役女子高生、よくよく耳をすませば英語も聞き取れるはずだ！

…と、思ってたんだけど。

この人たちがしゃべってるのって英語じゃないみたい。

あたしは英語得意ってわけじゃないし、方言とかスラングとかで話されたりしたらサッパリ理解できないんだけど。

けど、だって『I』とか『You』とかも言っていないもん。
主語から言うのって英語の基礎でしょー!?

「
」

ヒゲモジヤの一人がこっちに向いて何か言った。
なんだなんだ、あたしが何者かとかか?

「えーと、ごめんなさい、言ってる言葉分かんないです。あ、でも
英語なら分か

るかも。Please speak English?」

ちゃんとジェスチャーもいれて言ったのに、なんか通じてないっぽ
い?

おじさんたちがまた変な顔してあたしを指差しながら話してる。
ああもう、人を指差すなつてのに!
海水で濡れた服が太陽の日差して乾いてく。
絶対これ髪痛んだよ…シヨックー!

「
」

もうっ、なんで英語理解してくんないの!?
誰なんだよ、英語は世界の標準言語だつて言ったのはっ!
全然通じてないじゃんよー!

「I'm Japanese! I can't speak a
nother language!」

イライラして噛み付くみたいに言っちゃった。

おじさんたち嫌な感じで笑ってるし…なんか怖いぞコレ…。

とりあえず、どっか陸地に連れてってもらわなくちゃ。
日本大使館に行ったら、きっと家に帰れる。

「えーと、Please take me to Japanese
…大使館ってなんて言うんだろ…えーと、ほ、home to
wn! Japanese home town!…なんか違う気がする
するけど!」

てか通じない気がする!

戦々恐々しながら言ってみた。

おじさんたちはなんか分かった分かったって感じで頷いて、あたしの背中を押した。

え、これって通じた?

でもおじさんたち笑顔だし、通じたってこと…だよな?

よっしゃ!

なんでこんなトコに来ちゃったのか全っ然分かんないんだけど、帰れるんならいいや。

帰ったらちゃんと床直してもらわなくちゃ!

てかあたしどこに連れてかれてるんだろ?

おじさんたちが早く行けって急かしてるみたいだし…何か急いでんのか。

そんなこと思ってたら、急に背中引っ張られた!

「わ!つちよ、何するんですか!」

階段なのに危ないじゃんか!

てかリユック盗られかけた!?!?

え、なんでよ?

怖いじゃんか、なんで人の荷物盗ろうとすんのさ!

非難の目で睨んでみたら、おじさんたちが面白そうに笑った。

ものすごく、気持ち悪い笑い方だった。

元々人相悪いんだから、服装清潔にして、ヒゲちゃんと剃ってピシツとしてたらしいのに。

そしたら仁侠系のまふいあか893ぐらいで済んだだろーに…残念！それも嫌だけどね！怖いし！

目の前のおじさんたちを睨みながら、リュックの肩紐を握り締めた。この中には教科書とかも入ってるけど、何より財布や携帯電話や学生証が入ってる。

海水に濡れて使い物にならなくなってたとしても、あたしの大切なものだ。

家に帰るために、なくてはならないものなんだ。

盗られたら、帰れなくなっちゃう…！

どうして？なんで盗ろうとするの？

あたし、何かした？

たくさん腕が伸びてくる。

薄暗い船の廊下は、なんだか追い詰められたような感じがする。

怖い。

誰も、助けてくれない。

「来ないで！」

必死になって叫んだ。

少しずつ後ずさってたら、背中が壁に、ぶつかった。

だめ、もう逃げられない…！

もう手が届く距離にまで、近付かれてる。

（荷物を盗られるぐらいなら、まだいい。…殺されても、まだ、まし…。…もし、）

もし、もし、この手が制服にかけられてしまったら。

人として、女性としての、最悪の状況が頭の中で廻った。

「…い、いや…！」

心臓が止まるかと思った。

追い詰められて縮こまったあたしの肩に、手が、かけられてぐいっと。

「え」

横に押し込まれた。

「え…え？」

何事だ！

ぐいっと体を横に押し倒されて、視界がぐるっと回って。

あれ？

今あたし、一人じゃんか。

あれ？？

おっさんたちの笑い声が、扉一枚向こう側から聞こえてきた。あれえ？？？

「ごっつ…ゴーカーン、さっ、され、なかつ………」

湿気た埃のかびっばいニオイに、おもわずむせちゃったけど。

まあ、なんていうか…。

貞操の危機、回避。

3話 : 小部屋のポーンが現状把握

荷物点検しまーす。

どんどんぱふぱふー！

点検中に扉を開けられないように背中でもたれかかっておいた。

内開きだし、うん、たぶん大丈夫…！

下ろしたリュックは、まあ当然というか…海水でビチャビチャですよ。

手は海水でべたべたしてるけど乾いてるから、大丈夫だと思い込みつつ、ふたをあけてみた。

うん…中も海水まみれですなーこれ。

教科書とノートと、和英辞書…よかった、これないと外国人と会話できない！

うっすら積もってる埃の上つても嫌なんだけど、背に腹は、なものです。

半分ぐらいに開いて、一冊ずつ並べて乾かしていく。

辞書はカバーがあつたからか、被害は少なそう。

筆箱の中身もなんとか、ギリでセーフ。

乙女の必需品、生理用品も防水の袋に入れてたから大丈夫。

コレなかったらもしものは超ヤバイもん。

財布…やべ、入れ物ふやけてら…お札は大丈夫っぽいけどカードももう無理だなコレ…。

レポート用紙もふやふやだよ…まだ買ったばかりだったのに！

…って、うわ…課題もふやけてるっ…！

みゅっ…みゅーじつくぶれいやー…お前は大丈夫か！？

恐る恐るイヤホンを耳につけて再生ボタンを押してみた。

うんともすんともいわねえ。

「うおおおお…なんてこった…我が友よおおお！！！」

これがなかったら生きていけないっ！

ああ、電化製品に囲まれて過ごした、めくるめくあの日々よ……。

「…けーたい…」

そうだ、ケータイ忘れてた！

ケータイ…我が魂よ…！

リュックのポケットに手をつっこんで、湿気たストラップを掴んだ。
引きずり出したら、なんか、雫が滴ってきた。

や、やばい…？

ボタンを押しても反応がないケータイに冷や汗を流しつつ、電源を
オン。

…反応、ナシ……。

「そ、そんな……」

いや、電源入っても国際大丈夫なヤツじゃないから電話とか無理だ
つたかもなんだけどさ、ほら、こう、…ねえ？

心の気休めみたいにはなるかも、と思っていたのに。

まさか、故障しちゃった、だなんて…。

（防水加工のケータイ買えばよかった…）

だってこっちのが太陽光発電できたんだもん…。

涙がちよちょ切れ。

電源入らなかつたら太陽光発電なんて意味ないじゃんヨ！

あとは学校でワカちゃんとなっちゃんからもらった飴玉がいくつか
…。

いい感じに塩味がついた塩飴になっていることでしょう…。

うふ…うふふふ…。
…リュック干しとこ…。

「…ここ、どこなのさー」

日本…じゃないよなあ。

日本だったら日本語の通じる人が船に乗ってる…と思うんだけど…。
ま、まさか…密漁船!?

ていうか、え、やっぱりここって…海なの!?

…制服、これが大量の汗によるものじゃないなら、やっぱり塩水だし…。

海水…磯臭いし…うむ。

「海、には間違いない。うむ」

あの人たちに、日本まで連れてってもらえるとは限らない。

泳いでもきつと、逃げられない。

ええと、タイタニックでは、脱出用の小舟が船の横にくっついてた

(少なかつたけど)。

…奪えば、逃げられるかも?

ああ、でも無理、小舟なんか漕いだことないし、海に行ったって死
んじゃうって…。

真水ないし、ごはんないし。

救援がくれればいいけど、救援信号?とか出さないと遭難してること
なんか分からないだろうし。

うわ…どうしよう…。

…でも、違法な船なら、摘発とかされるかもしれない…よね?

だって、そうだよ!家から落ちて来たんだったら、ここ日本海とか
のはずじゃん!

日本海だったらきつと取締があるはずだし、こんな目立つ船だった

らきつとすぐ捕まるって！

それにケータイも、復活するかもしれないじゃん！

ケータイが動くようになったら、すぐ助けてって電話すればいいんだよ！

「…大丈夫、助かるよ。絶対…大丈夫！」

ぐらゆら揺れる海上の霧囲気を、埃っぽい小さな部屋で過ごす。

窓もないから、完全な密室で、息がつまりそうだったけれど。

それでもまだ、こんなところでもまだマシだったんだ、と後であったしは知ることになる。

4話 : 陸地に着いたポーンの脱走

陸地。

家とか学校とか店とかがある、土から上の場所を移動する生き物の住処。

船に拾われて（体内時計でたぶん）数時間で到着したから、たぶん海の近くにあったと思われる場所。

あたしが、日本だと思ってた場所。

…ナノデスガ。

（えーと…外人さん、だよなー…？）

なんで陸地に日本人が見当たらないのだー！？

ていうか外人さんばっかじゃーん！

うおおおお…マジか…マジでここ、日本じゃねーのかヨ…！

全体的に見てても、なんか東洋人が、いないぞ…。

金髪の人は肌の色が白っぽくて、黒髪の人は肌の色が褐色。

割合みてたら、白人さんが8割ぐらいで結構多いな。

しかし黄色っぽい肌がないって、これって…どうなのよ。

中国人って、世界的に見て多いんだよね？

どの国にも東洋系の人って生存してるんだと思ってたんだけど…。

あたしの偏見だったのかなあ…。

それとも…東洋人は来ちゃいけない場所？

でも…。

じろじろあたしを見てくる視線は、居心地悪いつちゃ悪いけど、そこまで嫌な感じのじゃない。

なーんか…珍妙な動物にでもなった気分だわ…。

本当になんだか、珍しい物を見るような目で見られてるんだけど、なんじゃいなー！

けど…。

…なんか…嫌な感じ…。

しかも指で数を示してるっぽいジェスチャーをやりとりしてる。

こっち見ながらジェスチャーってことは…あたしの年齢について話し合いでもしてんのか？

いやいやいや、あたし30代じゃないから。

まだぴっぴちの17歳だから！

…確かに、あたしの身の回りの女性ってのは、30代前後から美女の雰囲気を出してるけど…。

け、けどあたしだって女なんですからっ！

これみよがしに老けてるとか言われたくありませんからっ！

とか思ってたなら、ちゃんと金髪のおじさんが否定してくれたっぽい。オイオイありえねーだろあんな娘が30だと、って感じた。

よし、おじさんナイスだ！

そしたらなんかまた、指でジェスチャーしながら話し合ってる。

30からだんだん数字が少なくなってる。

…いや、あの、確かにあたし30代じゃないんだけど、その、まだ20代でもないから…。

言葉が通じるなら、花の17歳だって言ってるのに、ちっともあたしに聞こうとしてこないんだから。

そのくせ嫌な視線だけはよこしてくるし…。

失礼だぞ、キミたち！

ぶーたれて、ちよつと周りを観察してみることにした。

後ろのおじさんもなんか話し合いに参加し始めちゃったし…。

うむ、周りにいるのは、まだ船から降りたばかりだから、男性が多いね。

なんか映画とかで見たような、かっちりした服の人と、下働きですー、って感じの服の人が多い。

ときたまいる女性は、だいたいドレス着て日傘さしてる。

ひらひらのレースがいっぱい使われてて、ちよっぴり憧れ。

いいなあ、ひらひらのお姫様ドレス。

あんなん学祭でだってなかなか用意できないよ。

ああ、空が青いわー…。

「…ん？」

あれ、今ってあたし、フリー状態？

逃がさねえって感じのおじさんたちは話し合いに熱中してるし、船にいた他のおじさんたちは荷物おろしてるし。

…極限にフリー状態！？

い、今なら…逃げられる…かも…？

（荷物、大丈夫。周りの人たちも話してたり働いてたりだし…女の人たちも動きにくそうな服だし…これって逃げられるかもしれない…）

海で拾ってここまで連れて来てくれたおじさんたちには悪いけど…。

あたし、強面のおじさんって大の苦手なんですよねー！。

…というわけで。

運動靴の靴紐もちゃんと結んであることだし。

……功刀里桜、いつきまーす！

町に逃げ込もう！

そう思つて、一目散に走る。

後ろからおじさんたちの怒鳴る声が背中に響いて、怖くて体がぶるって震えたけど。

でも、なんかアブナイ雰囲気だったもん。

大使館じゃなくて、内臓売買とかそういう感じの場所に連れていかれそうな雰囲気だったんだもん！

これは逃亡ではない、自由へのマラソンだ！

(ひ、人が多くなってきた！)

しかもみんな服がいろんな意味でド派手！

おいおいおい、なんでマトモな服の人がいないわけ！？

ちよ、これじゃああたしのが浮いちゃうじゃんか！

カメラどこカメラ！

ていうか撮影現場を脱走しちゃってごめんなさい！！！！

(よし、あっちの方に人多いし、あっち逃げよう！)

すれ違う人の中に東洋人がいたら、その人にしがみつこう！

英語も危ないあたしだけど、にーはお、とか、あんによんはせよー、とかは言えるもん！

同じ東洋人なら、きっと助けてもらえる…はず！

そんなことを思いつつ、人の多い方へ、多い方へとダッシュ。

すれ違う中に、東洋人が全く見当たらなかったのは、あえて気付かないふりをした。

だって、怖いじゃん。

東洋人がいないって、日本の中で生まれ育ったあたしにとっては、未知の体験だから。

周りに日本人がいないってだけで、ちょっとしたパニックなんだから。

ちょっとぐらい、気づかないふりをしたって、いいじゃないか！

「ぜ、は、っ、は、っ、」

学校のマラソンでだって、こんなに真剣に走ったことってそうなかったと思う。

疲れるし、怖いし、荷物肩に食い込んで重いし。

怖い、怖い、でも立ち止まったら、

殺されちゃうかも。

それでも体に限界はきてしまう。
なるべく人が多い方に逃げたのに、気づいたらまた人が少なくなっ
てる。

しまった、さっきの市場みたいところでひそんでたらよかった…。
後ろからの声が、近い。

いいかげん諦めてくれたらいいのに。

標識がない、電線がない、電灯がない、言葉も違う、そんな場所で。
あたしを助けてくれる人は、誰もいない。

追いかけてらるって分かってるはずなのに、助けてくれる人は、
誰も現れなかった。

誰も、あたしに手をのばしてくれなかった。

あたしを助けてくれる人なんて、どこにもいないんだ。
いないんだ。

「っあ！」

石畳に靴先が引っ掛かった。

とっさに手で庇って、なんとか顔からダイブするってのは避けられ
た。

掌がジンジンする、小さな石が皮膚にめりこんでた。

膝も痛い、全身が火照って暑い。

汗が流れる。

気持ち悪い、シャワー浴びたい…。

喉の奥が痛い。

なによりまず、酸素が欲しい。

一度立ち止まってしまったあたしは、もう一度走ることができな
かった。

「
」

強面のおじさんたちが、ぐるりとあたしを囲んでいたから。

5話 : 捕獲されたポーンと商人(前書き)

後半、ちよつと酷い表現があります。
注意してください。

5話 : 捕獲されたポーンと商人

捕獲されました。

お縄になりました。

とっつかまりました。

…ええ、何度でも言ってるやりますよ、捕縛されましたーあ！

今度は左右前後にデカイ強面のおじさんがいます…。

腹にロープを巻かれています…。

もう逃げられません…orz

いやーあつはつはまさかねーまさかねーとか思ってただけ、まさか本当にお縄になるとは思わなかったわ…！

しかもビニール紐でも縄引きでもない、ザリッザリイガイガの紐

…ってか縄ですよ！

今時こんな使い古された年代物の縄で人を縛るやつがいんのかよー？いや、ここにいてどね！って感じ。

女だったのを考慮されてんのか、それとも逃げられないってあたしが分かったからなのか。

手錠みたいなのをつけられたりってのはなかった。

もう普通に、お腹に輪っか状の紐が二重三重につけられてるだけ。

そのロープの端を、後ろにいるおじさんが持つてる。

…犬の散歩状態？

あたし、犬！？

(…でもなんか他にいい例えがない…っていうか、なんであたしこんな扱い受けてんの？)

釈然としない！

そりゃ確かに荷物取られたりはしてないけど、これって捕虜に対する扱いつてのと変わりないんじゃない？

授業でちよつと聞いたただだから、よくわかんないけど。

この後、本当に内臓を取られたり、ば、ばいしゅん、の所に連れて行かれたりしても…おかしくない雰囲気だ。

どうしよう… なっちゃん、男の人になにかされそうになったら股間を蹴り上げなさいって言ってたけど…。

蹴り上げるって、4人もいるんですけど？

それになんか、あたしたちの前に、あの嫌な笑い顔をする金髪のおじさんが、部下の人をひきつれて立ってるんですけど。

全員の夕マを潰せと…？

無理無理、こんなデカイ集団相手にそれは無理だつて！

なによりあたしの精神的ダメージが計り知れない！

ああもうっ、やっぱり船で小舟のつとつて逃げたらよかった！

…すぐにとつつかまってたかもしれないけど。

そのままあぶねーことされてたかも、しれない…けど…。

…で、でも今からそういうことされるかもだし…。

…。

やっぱいやだー！！！！

どどどどうしよう、あたし、まだ死にたくないよっ！

「
」

ぐいぐい、体を引つ張られる。

なんか、向こう側に連れてかれちゃうみたい。

向こう…って、あの金髪の嫌なおじさんがいるトコだ。

まさか、あのおじさんに縄ごとあたしを渡しちゃうとか…ないよね？
と思つてたら、まさかのまさか、縄ごとパスされた。

「
」

にや、と笑う顔が、あたしを見下ろして何かを言ってる。

な、なんか…気持ち悪いぞ…。

船にいたおじさんたちよりも綺麗な身なりだけど、なんか、怖いし…。

「」

「」

「」

「」

急に、話してたおじさんたちがあたしに手を伸ばしてきた。

びっくりして一歩後ろに下がって逃げたのに、あっさり後ろにいたおじさんに前へ突き出されてつんのめった。

ぐ、と顎をつかまれて、上へ顔を上げさせられる。

顎を掴む手とか、まわりのおじさんたちの視線とか、気持ち悪くてしょうがない。

けれど逃げられない。

逃げられないから抵抗したくても、できない。

視線が、怖い。

怖い。

たぶん怖いって思ってるのとか、なんだよケツ！って思ってたのがばれちゃったんだと思う。

にやにやしてた金髪のおじさんが、手に持ってた杖で殴ってきた。

お腹、横腹を、思いきり殴られた。

一瞬わけがわからなくて、目の前が真っ暗になった。

「あ、ぐっ……」

お腹ってというか、肺がギョってなっちゃったみたい。
空気が吸い込めなくて、喉がぐつとひきつった。

「げほっ…げほ、っ…」

顎を掴まれてる手を振り切って、思いきり噎せた。

そのあたしを見て、まわりのおじさんたちがにやにや笑ってる。
なんていうか、変態じゃん！

年頃の女の子のお腹殴って笑ってるなんて、最低だよ！

気持ち悪くて、泣きそう。

家に帰りたいよう…。

「」

縄を引っ張って、金髪のおじさんが歩く。

ぐずぐずしてたら、早く歩けと後ろにいたおじさんに頭を殴られた。

ぐわん、と視界が揺れて、眩暈がした。

早く歩け、と引っ張られて、殴られたお腹に縄が食い込んだ。

痛い、痛い痛い、痛い…っ！

どうして？

どうしてあたしが、こんなめにあってるの？

ひどいよ、どうしてなの？！

「あたし、なにもしてないのに…」

後ろから、笑う声が聞こえた。

6話 : 路地裏を駆けるポーンが恐怖(前書き)

中盤からちよつと酷い表現が入っています。
注意してください。

6話 : 路地裏を駈けるポーンが恐怖

手首を縛られた。

とげとげしてる縄だから、動かしたら手首に擦れてヒリヒリして痛い。

その紐の先を、ちょっときれいな服を着たおじさんに引っ張られてる。

手首を引っ張られて歩くからと、慣れない石畳のせいで、よく躓いてこけそうになる。

あたしがこけかけてるのを紐を引っ張ってるおじさんも知ってるはずなのに、ちょっと歩幅を狭くするとかも何もしてくれないまま。

なんて不親切で嫌な人たちなんだろ…。

周りの人たちも、物珍しそうに見てくる。

見世物、みたいだ…。

恥ずかしいよ、それにすごく嫌だ…。

どうしてこんなことになったんだろう、なんて、考えても分からない。い。

家に帰ったのがダメだった？

あそこで玄関のドアノブから手を離しちゃったから？

船に助けてもらった時、逃げださなかったから？

町で逃げた時、もっと早く走ればよかったの？

分からない。

分からないことばかりなのに、あたし、どこに連れて行かれるんだろう。

逃げられない、怖いし、動けないから。

どうしよう、どうしよう。

ぐるぐる考えてたら、だんだん人気のない道に誘導されてった。

空がだんだん暗くなってって、夕焼け色になってる。

薄暗い路地裏に、オレンジ色が広がってる。

高い家の窓に、花壇がいつぱい。

外国って感じだった。

こんな感じじゃなかったら、ずっとずっと、きれいだって思ってた。今はただ怖いばかりだ。

日本とは違う匂いがするし、すれ違う人も、全然違う。

紐を引っ張っているおじさんは、一人。

今なら、逃げられるかな…？

思いきり紐を引っ張ったら、おじさんの手から抜けるかもしれない。そう思っ、あたしは両手を思いきり振り下ろして紐を引っ張ろうとした。

けど。

突然、逆におじさんに思いきり引っ張られた。

「いッ、」

ぎり、って手首が軋んだ。

痛い、痛い、怖い。

つんのめったあたしの肩を、おじさんの手がぐっと押ししてきた。

引っ張ったり押したり、いったいなんなんだ！

と思っ、睨み上げようとしたら、どん、とリュック越しに背中が冷たい石に押しつけられた。

あたしは、どこかの家の壁に、押しつけられてた。

目の前には、目がぎらぎらしてるおじさんが、いる。

これって、これって、まさか、まさか……！

「い、や…」

手が、制服に伸びてくる。

スカートに、手が

「やだ…いやだ…ッ！！！」

こえが、ひきつる。

太ももに、触られる。

気持ち悪い、体温の高い、手が、手が、スカートの下に、手が、て、
が

「っひ、」

嫌だ、嫌だ嫌だ嫌だいやだいやだいやだいやだいやだ、いやだッ！

！！

頭を振って、手首の縄を解こうと暴れて、足をばたつかせて。

逃げようとした。

でも、逃げられなかった。

暴れるあたしの首に、肩をつかんでた手が伸びてきた。

片手で喉を押さえられて、壁に押し付けられる。

「が、」

喉を圧迫された。

呼吸、できない。

声も出せない。

息が、できない。

死んじゃう、死んじゃうよ、いやだ、死にたくないよっ…！！

涙まで出てくるし、手が下着にかけられるし、もう、最悪だ。

死にたくない、でもこんなことされるのはもっと嫌だ…！！

もう眩暈がするぐらい、頭の中が、グラグラしてる。

こんな時にも、まだ、太ももとかお尻とか触ってくる手の感覚が、

消えない。

気持ち悪い。

こんな人、こんな、ヤツ…！

シャーペンがあれば、石ころがあれば、包丁があれば、殺してやるのに…ッ！

たぶん、あたし、めちゃくちやに暴れたんだと思う。

ごつ、と肘が何かを殴りつけたのを、感じた。

途端に、首をぎりぎり締め付けてた手が、離れた。

「っごほっ、ごほっ、ぐ、はっ、がはっ…はっ…は…は…は…は…」

血が、ぐるぐる、体中を回っていく感じを、体感した。

プールで息を止めているのとは全然違う、本当に、本当に、死ぬかもしれないと感じてた。

地面にへたれこみながら、口の端から流れてた涎を手の甲で拭う。

荒い息を整えて、はっと気付いて見たら。

そこに、体を丸めて、頭の横側を押さえてうめく、おじさんがいた。やってしまった、と思うよりも早く、あたしは壁を伝いながら立ちあがった。

立ち上がって、黒白にチカチカした視界をなんとか戻して、あたしは、走った。

ずるずる、手首から垂れた紐が地面を擦れてたけど、踏んで転ばないなら、もうどうでもよかった。

逃げられるなら、どうでもよかった。

ただあたしは、逃げたかった。

帰りたかった。

家に、我が家に、帰りたかった。

7話 : 捕まえられたポーンの三度目

息が切れても、喉がヒリヒリ焼けつくみたいにも痛くなくても、止まれない。

止まっちゃ、向き合っちゃ、だめ。

逃げなきゃ、だめ、だめなの…！

「は、は、っ、う、は、は…」

どこに行けばいいんだろう。

靴の底、薄いから、石畳の衝撃、足に響いて、痛い。

痛い、走りにくい、つまずく、だけどこけてるひまもない。

立ち止まらない。

止まったら、後ろを振り向いたら、また捕まっちゃう。

「っ、や…!!!!」

がつ、と。

足、膝が、駆けあがってた階段にぶつかった。

膝のおさら、石の階段に思いきりぶつかった。

痛い…！

本当に、膝が割れたみたいだ…！

「いた…」

でも、でも…。

ばたばた、と石畳を走る、誰かの足音。

いくつもいくつも聞こえる、その足音と声…！

「い、いやだ…っ！…！」

また、捕まる。

どうしよう…あたし、あたし…殴っちゃった…あの人、殴って逃げ
てきちゃった…！

どうしよう、どうしよう…今度は、今度は本当に、何かされちゃう
かもしれない…！！…！

逃げなきゃ、どうしよう、逃げても、逃げても…逃げられる？

(逃げられる…？逃げられるの？)

頭の中で、囁く声。

(逃げられる？逃げてどうするの？逃げたら家に帰られると思っ
てる？)

でも逃げないと、ごーかん、されるかもしれないのに。

逃げないと、逃げなくちゃ、逃げて逃げて逃げて逃げて…。

(ねえ、どうするの？逃げるより、大人しく戻った方がいいんじゃないの？そしたら寝るところとかごはんとかももらえるよ？帰る方法、
探せるかもしれないよ？だって、言葉、通じないじゃない。他にあ
たしを知ってる人、いないじゃない)

「…けど、」

だけど、怖い。

何をされるか、分からないよ。

怖いよ。

助けて、お母さん…。

「！」

声……！！！！

真後ろから、男の人の声。

あたしに向かつて、大きな、声。

太ももを撫でる、手を、思い、出し……て……

「っ、い、やだあつ……！！！」

血が流れるなんて、考えない。

骨がぎしぎしいつてるのも、考えない。

逃げなきゃ、逃げなきゃ、逃げなきゃ。

膝が痛くて、うまく走れない。

どろどろ、血が下に流れてって、靴下がぬるくなってる。

地面にぼとぼと、血が落ちていくのが、感覚で分かる。

なんでだろう……くらくらする。

後ろから、まだ、声がする。

近づいてくる、男の人の、声。

だめだ、もう、捕まる……！！

そう覚悟をして、足が、止まったのかもしれない。

あっという間に縮まった差。

ぐ、と肩を、捕まれた。

捕まった！

肩に食い込む指に恐怖を覚えて、体が動かなくなった。

怖い、怖い、怖い！

振り払わないと、逃げないと！

そう思つて、とっさに腕を振り上げた。

後ろの人もあたしの動きを見て分かっていたらしい。

あたしの腕を掴んで、肩を引っ張って、あたしを反転させた。

あたしの目の前には、男の人。
けど、服装も、あたしを見る目も、違った。
今まであたしを囲んでいたおじさんたちと、違った。
けど服装は同じ、教科書で見たことがある、布がたぼっとした感じの服。

「、！」

その男の人は、早口で何かを話してきた。
：なんだか、怒ってるみたいな声。

「な、何言ってるか、分かりません…！放してください！」

ギリギリ食い込む手が痛い。

顔が怖いし、目も怖い。

舐めまわすような視線じゃないけど、怒ってるような怖い視線。

ただでさえ背の高さも違うのに、上から威圧的に外国語で怒られた
って、わけ分かんない！

なんとか手だけでも振り払おうと腕を振り回すのに、全然、軽くあ
しらわれちゃうだけ。

ああ、そっか。

学校で、女の子は特に、夜遅く一人で出歩いちゃだめって言われて
た意味、さつきと今なのでようやく分かった。

こうやって力づくでおさえこまれたら、何をしても無駄だからなん
だ。

「放して、放してよおっ…！！！」

「！！！」

「だ、から！何言ってるかわかんないってば！！！」

もう太陽が落っこちた。

薄ぼんやり明るい空が、見る見るうちに暗くなる。

これって絶対6時過ぎてるのに、どうしてチャイムが鳴らないんだろ。

早くおうちに帰りましょって、どうして鳴らないんだろ。

「、、」

変なことを考えながらも暴れていた、あたしの耳に。

さっきまでとは違う声色で、男の人が何かを言う。

短いその言葉に、なに、と反応するのが遅れて。

あたしのお腹に、何かが、めりこむ感触がした。

「ッ、か、は……」

お腹、みぞおちの辺りに、何か固い物がギリギリとめりこんでる。

突然の衝撃に思わず口が開いてしまつて、みつともなく、口の中の唾液が流れ落ちるのを感じて気づいた。

殴られたんだと分かったのは、その後。

大きな石でもお腹の上に落とされたみたいな、…なんて説明すればいいのかわかんないけど。

とにかく、鈍くて痛い痛みがお腹にキてるから、苦しくて気持ち悪くて、お腹を抱えてうずくまつただけ。

そんなあたしの体を、男の人が抱えたトコまで、覚えてる。

自分を殴つた見知らぬ人なのに、あたしを持ち上げても重たくないのかな、なんて思ったんだもの。

その後は、覚えてない。

疲れてたから、寝ちゃったのかもしれない。

足が痛い…傷がズキズキしてる。

あーあ、靴下汚れちゃった。

帰ったらお母さんに怒られるなあ。

8話 : 理解したポイントと事実(前書き)

最後の方、ちょっと酷い表現が入っています。
注意してください。

8話 : 理解したポーンと事実

…お腹と足、痛い。

あれ、この匂い、うちの布団の匂いじゃない…ぞ？
ベッドも硬めだし、なんか、…あれ？

「あれ…？」

ここ、どこだっけ？

ぼうつとしながら周りを見てみた。

知らない場所で、柵の嵌った窓からは夜空が見えた。

窓は空いてるのか、涼しい風が吹いてきてる。

部屋の中にはあたし以外いなくて、ちよつとゾクツとする。

あとついでに背中の下敷きになってたりユックの中身が背中に刺さ
って痛かった。

なんなんだろう、と思いながら体を起こした。

首筋がズキツとして、とつさにそこを手で押さえる。

びっくりしつツ振り返ったけど、そこには何もなし、誰もいなか
った。

投げられた大きめの石が首に当たったような痛みだったのに。

なんでだろう。

なんか、変。

(…でもあたし制服のままだし。あれ？あたし、旅行とか行っ、)

行ってない。

どこにも、自分の意志で、行ってない。

ゾワツと体中の毛が粟立った。

背中を冷たい手で不意に撫でられたような、無数の目でじいっと見

つめられているような、生々しい気持ち悪さが湧き出た。
ぶるっと体が震える、抱いた腕が鳥肌を立ててる。
ここは、どこ!?

(や、やだっ!まさか、まさかアレって…そんな、っ…夢じゃなかったの!?)

家に帰ったら海に落ちて、船に拾われて、怪しい人たちに引き渡されて、…強姦されかけて。

逃げても逃げても捕まって、嫌だと、放してと言っても通じなくて。だけどまさか、アレが、あんなことが、人をあんな風に扱うことが、許されてるだなんて。

現実にはそんな怖いこと、21世紀にもなって、ありえるはずがないと思っていたのに。
夢か幻、そのどちらでもなかったとしても、現実のことではないとだけ、信じていたのに。

「…痛い……」

首筋、痛い。

足も痛いし、お腹もズキズキしてる(ちょっとゲロっちゃいそうだし…)。

何もかも、考えることができなくなって、顔を膝に埋めて縮こまった。

お腹の痛みがますます酷くなった。

痛いのが嫌だっというより、痛いのには悪夢から目覚められないこととか、これは本当のことなんだって示すような感じで、それがたまたまなく嫌だった。

嫌で嫌で、でもどうしようもなくて。

大きく、大きく、お腹の中で渦巻いてる不幸を全部息に乗せて投げ

出そうと、溜息を吐いた。
でも。

(溜息で全部解決なんて、できるわけないんだって)

膝から顔を上げる。

真っ暗だった視界に、窓から入る月の光で浮かび上がった部屋が映った。

やっぱり、世界は何も変わってなかった。

世界が変わらないなら、あたしが、あたしから、動かないと。

「よい、しょ」

薄っぺらい布団を跳ねあげて、足をベッドから下ろした。

靴下を脱がされていたらしくて、足の裏から石の冷たさが駆けあがってきた。

この部屋の床は、石らしい。

しかもざらざらしいたバリバリ天然石みたい。

そういえばよく見ると窓の柵はドラマの、牢屋のシーンで見たような鉄格子にも見える。

(牢屋とか…)

まさかねー、とか思うんだけど、どうもこれはアタリっぽいぞ。

いや、ホントどこよここ！趣味悪すぎる！

夏だけど夜だからか、思いのほか寒々しく感じるのは、きっと床とか壁が石とかだからだ。

畳にしろとは言わない、けどせめて布ぐらいは敷いてほしい。

スリッパがあればなあ、と思って足を動かしたら、ごっつ、とつま先で何かを蹴ってしまった。

「?あ、靴!」

見慣れた運動靴がきちんと揃えて置かれてた。

なんかそれだけで、なんていうんだろ、仲間に巡り合えたみたいな感じになつて、ちよつとウルツときちゃったよー。

靴下はなかったけど、血まみれでぐちゃぐちゃだったし、この際だからスツパリ諦める。

素足に運動靴とかハンパなく違和感があったけど、冷たい床を歩くことを思えばなんてことない。

紐をきちんと結び終えて、さて立ち上がるのか、と膝を見て、びっくりした。

両足の膝とか脛が、白い包帯に巻かれてた。

今まで気付かなかったのが不思議なくらい、包帯が巻かれている面積が多くて、暗闇でもハッキリ見える。

ゆっくりと力をかけないようにその上から手でなぞった。

市販の包帯っていうより布を割いて作ったみたいなの、お世辞にも質の良いとは言えない包帯。

けど丁寧に巻かれた包帯は全然ゆるみも隙間もなくて、純粹に上手い!と思えた。

ということ、手当してくれた人がいるってことだよ。

そういう人がいるってことは、嫌な人ばかりじゃないってこと...だよ?

あたしは、.....逃げきれた?

「...とにかく、確かめようかな」

いつもなら独り言って虚しいとか思うんだけど、今は独り言でも何でもいいから言ってるやないかと、本当に怖い。

布団を畳んで、あたしはドアの取っ手を持った。

輪っかになつてる金属の取っ手だけど、押しても引いても、ついでにスライドさせてみても、全然開かなかつた。

…やっぱり、逃げきれなかつたんだ。

その事実が、どすんと重たい石みたいに落ちてきた。

もう、ここまでくると、お腹が痛いとか首が痛いのかは捕まつた時のせいだ、と諦めがついた。

ていうか、認めざるをえなかつた、っていうかもしれない。

逃げるにも逃げられない、閉じ込められた空間。

これからどうしよう、なんて、ちよつと先のことを考えられる余裕が自分にあつたのが不思議だつた。

こつ、こつ、こつ。

扉の向こう側から、音が聞こえてきた。

足音だつてのは、すぐに分かつた。

扉の下の隙間から、オレンジ色っぽい光が差し込んでくる。

あたしはちよつと悩んだ。

ここでまだ寝てるってフリをした方がいいのか、それとも隠れて脅かして逃げた方がいいのか、それとも、って感じに。

(寝たフリしたって襲われるかもだし、隠れるって言ってもどこに
って感じだし…)

そう悩む時間もなくて、あたしは結局ベッドの上に座っておくことにした。

ただし、リュックはおろしておいて。

何かされそうになったら、リュックで思いっきり殴りつけてやる！

英和辞書、舐めんじゃねえ！

なんてノリで。

後から思うとパニックで異様に気が大きくなつてただけなんだと思うけど…まあ、これはこれ、それはそれ。

ガチャガチャと扉に鍵を入れているらしい音が聞こえて、扉が少しずつ開いていく。

開かれた扉から、二人ほど、男の人が入ってきた。

一人はだぼつとした布をたっぷり使った感じの服を着てる中年の人で、もう一人は槍？みたいなものを持つてる…なんていうかこう…兵士？みたいな若い人。

いったいどこのおとぎの国だよ、と思ったあたしは間違っではないはずだ。うん。

「？」

「？」

どうやら会話はサツパリらしい。

相手が言ってる言葉が、どうしても理解できない。

主語とか聞いててもなんか知らない言語のようだし。

「えーと…Hello？」

「？」

首傾げられた。

しかも後ろの人もぼかんとしてる。

わーい、異国バンザイ

ってヤケになってる場合じゃないって！

なんとかこの人たちと話をして、日本に帰らせてもらわないと！

親だつて心配してるだろうし、国際問題とかになったら大変じゃん！

とか思つて、あたしは身振り手振りで「私は日本人です」「ここはどこですか」「家に帰らせてください」と伝えた。

日本をジャパンだとかハポンだとかヤーパンだとかニッポンだとか

いろいろ置き換えて言ってみただけど…。

「「？」」

「…ダメっすか…」

うん、なんとなく分かってたよ…。

どうやら言語がまるきり分からないみたいだ。

相手も言葉が通じないということに気付いて、何度も身振り手振りで何かを伝えようとしてくれてたんだけど、分からなくて首を傾げてばかりのあたしに諦めたのか、肩を落としていた。

肩を落としたいのも溜息を吐きたいのも、あたしなのに。

帰る方法以前に何も通じないことにガツカリしながら、あたしはリユックを背負い直した。

どうやらこの人たちは変な人じゃないみたいだし。

それだけでも分かったなら、いいや。

そう思っつて、あたしは自分を、次に扉の外を指差した。

「あたし、外に、出たい」

何回も自分を指差して「あたし」と言っつてたからか、「あたし」という言葉を「功刀里桜自身」だと理解してもらえたらしい。

ゆったり服の人が、兵士さんらしき人に何かを言っつて、扉の外に出た。

何をする気だ、と見てたあたしに、ゆったり服の人がおいで、と手まねきをしてきた。

…出てもいいってこと？

まさかこれでいきなり暴行とか…ないよね？

さすがのあたしも不安になっつて後ろに立つ兵士さんらしき人を見上げただけど、早く行きなさいと頷かれちゃあ…ねえ？

(行ってやるうじゃないの！)

ていうかあたしがここにいる理由なんてないんじゃない！

そう思うとなんだか目が覚めたような気がした。

出て行ってもいいじゃん、だってあたしはあたしなんだから。

ていうか詫びの一つでも入れろや！みたいなノリで、あたしは先導されるままに、重苦しい石の通路を歩いて、階段をあがった。

ぱ、と眩い光が、目を驚かせる。

ビククリして目を覆った手を、徐々に下ろして、さっきまでの場所が本当はずいぶんと暗かったんだ、とようやく気付いた。部屋の壁や机の上なんかには、煌々と蠟燭の火が灯ってる。

(…変なの。停電でもしてるのかな？)

そう思って天井を見たんだけど、自分が見慣れた、あるべきはずの電灯が、なかった。

取り付けられていた跡すら、なかった。

代わりに壁には使い古された蠟燭立てがいくつかあって、部屋の端には手作り感あふれる木の重たそうな机があった。

あれ？

違和感が浮かび上がる。

現代で、辺境ならまだしも、こんな豊かっばい雰囲気の人たちがいる建物で、電気を使わない家ってあるの？

あたしが海外に行ったことがないからかな、うん、きっとそうだよ
ね。

そう思って、あたしは部屋の不思議さから意識を背けた。

けれど浮かび上がった違和感は、服にしみついた汚れみたいに、ずっと気になり続けることになった。

「
」
前方の視界がゆったり服の人のせいで見えなかったけれど、どうやら部屋には他に誰かいるらしい。

誰だろう、と気になって体を動かしたあたしの肩を、急に伸びてきた手がガツシと掴んだ。

ぎよっとして振り返るまでもなく、この手が兵士らしき人の手だと分かっていった。

だってこの人しかあたしの後ろにいなかったし。

嫌な感じが、ふつつつ、浮かんでくる。

浮かび上がるその悪寒は、消えることがなく、あたしの心を濁った色に染めていく。

目の前から男の人が動いて、それがアタリだったことにあたしは心の底から嘆いた。

かつかつかつ、と苛立っていると分かりやすい歩調で男が近づいてきて、大きく振り上げた手で、あたしを叩いた。

頬を打った容赦ない一撃に、チカチカと目の中で白黒のノイズみたいな星が散る。

「
」
「！！！！」

何かを、どなつて、もう一度。

今度は顔を下にしていたからか、額の辺りを殴りつけられた。

「ッ！！」

上下の歯がガチンとぶつかって、舌を少し噛み切ってしまった。血の味がブワツと口の中に広がって、舌の激痛に頭の中が恐怖に染め上げられる。

それでも男は、手を振り上げた。

三度目はこめかみに、四度目は頬骨に。

最初は手のひらで殴っていたのが、二度目からは拳になっていた。そして怒りのままに殴りつけられた。

それは、もはやあたしにとって、恐怖以外の何物でもなかった。手を振り上げられる度、次に来る激痛を理解してしまふ。

唾を吐きながらの大きな怒声に、身がすくんで震えが止まらない。

ああ、そっか。

あたしはもう、逃げられない。

9話：牢屋の中のポーンの実現（前書き）

気持ち悪い系の内容があります。

生理的にヤバイかもしれないので気をつけてください！

9話 : 牢屋の中のポーンの実実

「……っ」

あれ、ここは……どこ？

ふと気がついたら、あたしはどうやら目を閉じていたらしいということに気づいた。

当然のように目を開けようとしたけれど、瞼が開きにくくて、びっくりした。

重たいというか、瞼に重石みたいな何かをくっつけられてるみたいな感じで、頑張って開けようとしても細くしか目が開けられなかった。

視界が開かれないという今まで体験したことがない事実には怖くなって、体が強張った。

途端にズキリと体に痛みが走った。

「っっ、あ……」

うめき声みたいな声しか出ない。

体中が重くて、動かそうとしても、動かない。

落ち着こうと思って呼吸をしたら、呼吸に合わせるように、胸の部分、ろっ骨の辺りがギリギリ痛んだ。

痛い、痛い痛い、痛いッ！

あえぐみたいに浅く呼吸しながら、じっとして鋭い痛みが過ぎるのを待ち続けた。

しばらくしたら、痛いのはなくならなかったけれど、少しだけマシになった。

口の中がベタベタしてて、唾を飲もうとしたけれど口の中に水分が出てこなかった。

舌がカラカラして、なんかすごく、気持ち悪いし。それでもじつとしてたら、少しずつ、少しずつ口の中に潤いが戻ってきた。

味覚が戻った舌が一番に教えてくれたのは、血の味。

(……なぐられた)

殴られた時に、舌を切ったからだ。

口の中、頬の部分も膨れてて痛いけれど。

噛み切ってしまった部分が歯に触れる度、口内炎とか食事の時に舌を噛んだのとかとは比べ物にならないぐらいの痛みが走った。

頭に響く痛みは、頭痛のせいか、他の傷のせいか、分からない。

頭も顔も、肩もお腹も足も痛い。

分かる限り、体全部とはいわないけど、いろんな場所が、痛い。身体の部分部分が痛いってことが、よけいに現実味があつて。

(ひどい...)

酷い、とあたしは泣いた。

暗い部屋だからあたし以外の人がいるかもしれないと思って、声を出さないように、泣いた。

浅く吐く息が熱くて、切れた唇に痛かった。

零れた涙が傷口に沁みて痛かったけれど、あんな男の人の手で殴られた場所だと思ったら、痛くても涙で洗われた方がいいと思った。

「……はあ」

しばらく泣いて、泣くの疲れで、あたしは大きく息を吐いた。

心臓がドキドキしてて、横隔膜(横隔膜であつてたっけ?)がシャツクリするみたいにピクピクしてるような感じだったけれど、なん

とか耐えきる。

でろでろつと出てくる鼻水をなんとかして、鼻を手の甲でぐじぐじ。ジャリ、と金属っぽい音を立てた手首を目の前まで持ち上げて、手首にあった違和感に納得する。

どうやらあたしは本格的にとっつかまったみたい。

両手の…なんていうんだろう、太い手錠？みたいなものの先を見ていたら、鎖の先が壁に繋がってた。

足首には手首と同じものはなくて、大丈夫みたいだ。

足を動かそうとしたら、お腹がぎちぎち痛んで思わずうめいてしまった。

思ったほど満足には動かなかったけれど、ちゃんと、足は動く。

ものすごく重たく感じるけど…。

それに。

するつと足を擦ってみた。

包帯の感触がしたけど、うん、大丈夫…みたい。

(……知らない間にゴーカンされてなく、て…よかった…)

そのことに心底安堵して、体中の力が抜けるような息を深く吐いた。

一層体が重くなった気がした。

無事に家に帰れたら、ダイエットしよう。

そう決意した。

ガチャ、と扉が開く音がした。

一瞬だけ、あの地下のことを思い出して体が強張った。

誰かが、この部屋に入ってこようとしてる。

もしかして、ひょつとして、まさか、これから強姦だなんて、されないよね…？

そう思うけれど、あたしの身体の無事を保障してくれる人なんて、ここにはいないんだ。

家族も友達も学校のみんなも、日本の人たちも、守ってくれない場所なんだ。

身をもつて知って、あたしは今までどれだけ守られてたのか身にしみて分かった。

そして、これから我が身に起こることに、ただ怯えた。

ギギ、と軋んだ音をたてて扉が開かれていって、扉の下から差し込む灯りが目に入った。

デジャブ：デジャブ？デジャ・ヴだっけ？

一回体験したことをもう一回体験するように感じるのはデジャヴじゃないかもだけど。

壁に繋がれた鎖を利用して、痛い体を無理やり起こして、壁にもたれかかるように座り込んだ。

荒々しい足音を出して部屋に入ってきたのは、もう何回も見た、だぼつとした服の人たち。

その数人が起きてたあたしを見て、お互いに頷きあった。

それから何も言わず、壁の鎖をはずして、あたしの腕を持って力任せに部屋から引きずり出した。

腕の傷も痛かったし、足も痛かったけれど、文句を言える雰囲気じゃなかった。

ここで逆らったら、殺されるかもしれない。

振り上げられる手、大きな怒声、：そんなのもう、うんざり。

考えるのも疲れてきたけれど、意識があつたら音とか耳に入るから、しかたなく、あたしは周りを見た。

まだ今は夜みたい。

あの石畳の町じゃなくて、どうやら野原とからしい。

葉っぱの匂いとか、地面の匂いがした。

ずるずる引きずられて別の場所に入れられたから、それ以外は分からなかったけど。

あたしが入れられた場所、むせるような嫌な臭いがした。

場所の先を照らしてた一人が何かを言って、鎖を持った一人が鎖を壁に繋いでた。

やっぱり、逃げられないんだ。

吐き気がする臭いの部屋だからため息を吐くのもできなかつたけれど、心の中であたしは大いに嘆いた。

暴れないあたしに満足したのか、あたしを連れてきた人たちがぞろぞろと出て行って、重たそうに扉が閉まった。

がちゃん、と落とされた錠前の音なんて、聞きたくもなかった。

…日本でも都会から離れたら明るいのかなあ。

鉄格子のはまった小さな窓から、月の光が入ってる。

(お母さん、心配してるかなあ…)

まだ一日も経ってないのに、思い出す両親の顔までが遠くに感じられた。

鎖をつけられた壁にもたれて、そのまま座ろうと、して。

あたしはためらった。

床がズルズル滑りやすい。

部屋にはあたし以外の人もいるみたい。

…あたし以外の人も、あたしみたいに捕まったのかな…?

姿は見えないけど、部屋のすみっこにうずくまるように座ってる人たちの気配は分かった。

けど、誰も動かない、声を出さない、…生きてる感じがしない。

荷物なんじゃないかと思っただけけど、どうも違うみたいだし、寝てるのとも違うみたいだった。

…ここ、なんか、変。

それになんだか…息、苦しいし。

変な臭いにおいとかが、いっぱいしてる。

あたしこのニオイ知ってる。
排泄物とか、ゲロとか、汗とかのニオイだ。
あとそれから、病院でしてる、消毒液じゃない方の、やなニオイ。
死にそうな人のニオイ…。

(気持ち悪いよう…)

暗闇に目が慣れてきて、もうそろそろ部屋の中が見えるようになる、
という時に。

ぐらりっ、と部屋全体が大きく動いた。

(地震!?)

ぎよっとして鎖を手繰ってそれにしがみついた。

…地震じゃなかったみたいだ。

なんか、これって…部屋が移動してるみたい。

まさかと思って外に目を向けて、うんと背伸びをした。

遠くに少し見えた木々が、ゆっくりと動いてる。

…うっん、この部屋が移動してるんだ…。

がたん、と何かにつまずいたように上下して、背伸びしてた体が壁
にべちゃりと叩きつけられた。

「っつー!!!」

い…ッでええええええ!!!

声にならない叫び声をあげて悶えた。

なんていうか…あたしって運が悪いの!?って感じ。

…運がよかったらこんな所にはいないんじゃない!

ふう、とため息を吐いた。

ちよっただけ、この嫌なニオイに慣れたみたいで、吐き気も治まっ

てきた。

すっかり暗さに慣れた目で周りを見る。

あたしがいるのはこの部屋（トラックか何かの中？…全面木張りだけど）の一番端っことで、顔をあげると部屋全体が見える場所。

その一目だけでも、この悲惨な状況が分かった。

いち、に、さん……6人の人たちが、死んだように寝てる。

蚊みたいな音をたてる虫がぶんぶん飛んでくるのを、手で追い払いもしない。

…病気、なのかな…？

息苦しいこんな場所に入れられてるから病気になるんだ！

そういえば、終業式で校長先生が言ってた。

『息苦しい』は『生き苦しい』って。

だから人は『息抜き』をして『生き抜く』んだって。

じゃあ、ここの人たちは？

『息が詰まる』所の人たちは、『生き詰まる』の？

あたしもここで、『生き詰まる』の？

「うえ…」

気持ち悪い…。

滑ると思ったら、足元にグチャグチャした液体が垂れてた。

あたしの靴も汚れちゃってるし…。

これ、きつと誰かの糞尿とかゲロしたのとかだ。

思いたくないことに行きあたった。

違うと言える要素を探そうとしたけど、無理だった。

ツンとしたニオイを嗅いでられなくてまた手で鼻と口を覆った。

耳元をぶんぶん飛び交う虫がうつとうしいけど、追い払ってもキリないし。

…それにしても、なんでみんなぐったりしてんだろ？

夜だから寝てるだけ？

ねえ、誰も掃除しようとか、綺麗にしようとか思わないの？
不衛生じゃん、体壊すよ！

ボロ布みたいな服が汚れるのにも構わず床に座り込んでる人たちを見て、気付いた。

両手を拘束するように鉄の枷がつけられて、それが鎖で壁に繋がれている。

しかもあたしのよりも鎖が短くて、あれじゃあ立ち上がっても中腰状態にしなければならないんだ。

動きたくても動けない、声を出せば……その先は、考えたくない。でもこれじゃあまるで奴隷みたいじゃない……。

最悪の事態が、頭をよぎった。

(もし、もしもだけど……あたしの知らない国とか知らない場所とかで、もしも、…人身売買とかがあって、…あたしが…)

あたしが、その人身売買にかけられてるのだとしたら…？

…やめとこ…何も考えたくない。

近くにひっくり返して放置されてた穴のあいたスープ皿みたいなものを引き寄せた。

液体的な汚れとかは、一応…なさそう。

あんまりやりたくないんだけど、と思いながら、苦勞してリュックからレポート用紙を一枚引っ張り出す。

シワになったって構うもんか！

余分に出してしまったけど、まあいいや。

ひっくり返ってる皿の上にレポート用紙を敷いて、その上にお尻を乗つけた。

床にスカートがつかないように持ち上げたり足で挟んだりしておく。うん、これなら液体が流れてきても大丈夫…のはず！

頼りない場所に座って、膝に顔を埋めた。

しんどいし、痛いし、何よりすごくすごくすっごく、疲れた。

そういえば全然大丈夫なんだけど、トイレ行ってないなーとか、ごはん食べてないなーとか思い出す。

でも全然尿意なんてないし、お腹も減ってない。

や、ちよつと喉乾いたりはしてるんだけど。

…でも、…うん、疲れた。

ちよつとだけ、ちよつとだけ…。

そう思いながら目を閉じた。

家で両親と話をしながらごはんを食べてる夢を見た。

テレビを見ながら、面白い場面で笑ってた。

夢の中のあたしは笑ってた。

何も考えてない顔で、笑っていた。

9話 : 牢屋の中のポーンの実現(後書き)

今後の内容について

アンケート、ありがとうございました。

言語は、『マフムートの言葉が理解でき、里桜の言葉も通じる』に
決定します！

この設定は今後、話を書きやすくなるので嬉しいです…！

正直誰からも声がないのだと思っていたのですが…(名前は控えま
すが)お一人さまから貴重なお声をいただきました…！

むせび泣きました…感涙です！

ありがとうございました…！！！！

今後よろしくお願いします！

10話 : 彼と出会ったポーンの三日目(前書き)

全体的に若干酷い表現があります。

注意してください。

最後にちよつとだけど、マフ君出たよー。

10話 : 彼と出会ったポーンの三日目

あれから、しばらくたった：と思う。

気持ち悪いと思ってた虫に馴れてしまっぐらい、時間がたったから。格子越しに見える黒い星空が、徐々に明るくなっていった。星が見えなくなっていく。

だからたぶん：朝になったんだと思う。

部屋の中の暗闇に、白っぽい光が線みたいに差し込んできて気付いた。

朝の光が白っぽい、あたしはそんなことも知らなかった。

光が徐々に大きくなっていくのを、ぼんやり見てたら、部屋の中がだんだん変化してくのに気づいた。

死んでるみたいにくったりしてた人たちが、スイッチを入れられたみたいのそりのそりと起きあがってくる。

その全員が全員、あたしを凝視してくる。

じいっ、と、新入りを見定めるみたいに、じいっ、と。

何も言わずに見てくる目に、体が震える。

全員、鎖で繋がれて動き回れないって確認しててよかった。

自由に動き回れるんだったらきつと近寄られてただらうな、と思いつながらあたしは震える息を吐いた。

見られてるだけなのに、ものすごく怖い。

怖い。

スカートを挟んで膝を抱えて、膝に顔を押しつけて縮こまる。

あたしはいない。

ここにいない。

だからあたしを見ないで、あたしを意識しないで。

そんな気持ちで小さくなった。

徐々に、徐々に視線がはがれていくのを肌で感じた。

一人、一人、視線と意識をあたしからはがしていく。

最後の一人の視線を感じなくなつて、しばらく待つて、ほんの少しだけ顔を上げる。
髪の間から周りの人を確認して、聞こえないように小さく息を吐いた。
また死んだみたいにくったりとしながら、どこか宙を見てる人たち。本当はこんなこと思つちやだめなんだろうけど、…不気味で、気持ち悪かつた。

(あたしもこうなるのかな…)

自分がこんな目をするようになるとは思いたくなかつた。けど、こんな場所にずっといたら、たぶん…。手が冷たくなつてく。寒いな、と思つた。

息を吐いて、目を閉じて、何も考えないようにしてた時だつた。一人が、唐突に、突然に、前触れもなく、叫んだ。ギョツ、として体が数センチ浮かんだような気がする。部屋の端の人から、唸り声みたいな、叫び声みたいな、喉の奥から出てくる、体が震えるような野太い音が出てた。鎖ごと腕を壁にぶつけながら、雄たけびを上げる人。鎖がなかつたら暴れていただろうと分かる迫力で。怖いっ！

耳を塞いで、膝に顔を埋める。

それでも聞こえてくる音に、涙が浮かんだ。ずっとこんな場所にいたら、ハツキョウ、しちやいたくなる気持ち。は、分からなくもないけど。

だからって…！

いつになったら終わるんだろう、と思ひ始めた時だつた。今までずっと揺れてた床が、ぴたりと止まつた。ごつごつ、と外から荒い足音がここに近づいてきた。

それでもまだ叫び続ける人。

ああ、だめ、来る…！

ダンツ、と、荒々しく扉が開けられた。

ビクついて縮こまるあたしの前を通り過ぎて、男の人が歩いていく。

怒鳴り声。

風を切る音、悲鳴に似た叫び声。

何かが倒れる音、振動。

何かが男の人から放り投げられる。

また、怒鳴り声。

最後にまた、荒々しく扉が閉められた。

つくり物の暗闇が戻ってくる。

…終わったんだ。

あたしに害がなかったことに安堵して、詰めていた息を吐き出した。

そして顔を上げて、見た。

足元を、床一面を流れてる液体に、赤い色が、混じってた。

「っ、う……！」

あるだけの力を込めた両手で口を押さえこむ。

胃がケイレン、してるのを感じた。

喉がぐつと内側から圧迫されてる。

胃液が喉を焼く痛みに、生理的な涙が浮かぶ。

うめき声が、聞こえる。

それから、他の人たちが何かを食べている音も。

それだけですぐに分かる。

あの人は食べ物を要求して騒いでいた、騒いだから棒で打たれた、だから痛がっている、周りの人は持つてこられた食べ物を食べている。

文字にしたら、それだけ、それだけのこと。だけど…。

どうして痛がつてる人を無視して食事なんかできるの？

どうして誰も助けてあげないの？

動けないからできないって理由じゃないって、今のあたしは分かる。
…分かってる、だってあたしだって手を貸そうとしてないんだから
ようするに、他人だからってこと。

他人だから、どうでもいいんだ。

どうなっても…。

(…何も考えたくない、何も見たくない…何も…)

膝に顔を埋めて、小さくなる。

それだけでいい。

それだけで、あたしは外と自分との間に壁を作れる。

何も見えないように、聞こえないように、あたしは心をシャットアウトした。

そうじゃないと、本当に、気が狂いそうだった。

しばらく、そうしてた。

…時間がどれだけたったか、分からない。

床はずっと揺れ続けている。

(ここ、どこだろ…)

窓の外を見上げた。

どうやらどこかの町に入ったらしい。

日本にあるみたいない感じじゃない壁の色の、建物が見えた。

ざわざわと人が賑わっているのが薄い壁一枚向こうに感じられた。

楽しそうな、明るい声。

子どもとかの声もしてる。

本当なら、本当なら、いつも通りだったなら。

(あそこにいたのはあたしなのに)

お父さんは、お母さんは、あたしを探してるかな？

丸一日連絡が取れなかった娘を、心配してくれてるかな？

家のことを考えると、たまらなく悲しかった。

辛かった。

だから、何も考えないふりをした。

膝を抱えて、小さくなる。

それだけでいいと気づいて、ずっとそうしてた。

たぶん、寝てたんだと思う。

時々目を開けると、外が暗くなっていたり、床の震動が止まっていたりしたから。

周りの人たちも、また死んだみたいに寝てた。

耳鳴りがするぐらい静かだから、周りの人たちの寝息が微かに聞こえるのは、安心できた。

たぶん、一人だったら泣きわめいてたと思う。

それからまた、朝がくる。

空が明るんで、星が消えて、白っぽい光が差し込んで来る。

「……………」

顔をあげたら、背中とか腕とかが、ぎしりと音がしそうなぐらい固くなっていた。

手を見たら、ビックリするぐらい白くなってて、爪なんか紫になっていた。

体中カチコチ。

足なんか感覚がないし。

それでもスカートが床に落ちて汚れたりしてなかったのを見て、自分すごいと思った。

足に挟んだりしてたから、皺になってるだろうけど。

お尻も痛いし、少し体勢を変えよう。
そう思つて、体を動かした時だった。
こつり、と、硬質な音。

「…?」

なんだろう?

音がした場所は、あたしがお尻に敷いてるお皿。
お皿とポケットの中身がぶつかったみたい。
強張った手でポケットの中を探った。

「け…たい……」

海に浸かつて、壊れて動かなくなった新しいケータイ。

太陽光発電に魅力を感じて買ったけど、耐水性じゃなかったから…
壊れちゃったケータイ。

前に、お母さんが間違つてポケットにケータイを入れたまま洗濯し
ちゃったことがあった。

そのケータイは、洗濯物と一緒に干してたら、なんか動くようにな
った、と笑つてたけど。

…もしかしたら…!

氷みたいになつてた手を動かして、丸みのあるケータイの蓋を開け
る。

画面に塩がついてて見にくかったけど、そんなの、どうでもよかつ
た。

祈るような気持ちで、電源ボタンを押す。
機動までの時間が、とてつもなく、長く感じた。

(動いて、動いて、動いて動いて動いて、動いて…お願い…っ!)

神様でも何でも無い、目の前にある、掌に収まる小さな機械に、ただ祈った。

その祈りが通じたのかどうかは、分からない。分からない、けど。ば、と。

暗い部屋に、硬質な白い光が生まれた。

「っ、いた……」

奇跡ってあるんだ。

ハロー、と浮かびあがった文字に、目が潤んだ。

助かる、ここから出してもらえる！

滑って落ちそうになるケータイを握り締めて、間違えながら暗証番号を打ち込む。

その親指が……止まった。

圏外。

…圏外。

何度見直しても、電波が立ってない。

あたしの声、助けてって声は、届かない。

届けられないんだ…。

……絶望、した。

有名なアニメでこの言葉を使って、それを見てた時は笑ってたんだけど、たぶん、もう二度と笑えないと思う。

本当の本当に、手づまり、打つ手なし。

ケータイを持っていない方の手が、力が抜けて、膝からゆっくりと落下した。

濁った液体にぼちゃりと落ちて、液体が腕にはねる。

スカートの端にも、じわりじわりと染みていく液体。

それがまるで、あたしみたいに見えた。

じわりじわり、染められていくあたし。

いつも通りのあの日常に、帰れなくなる。

こんな感情を知って、こんな目にあってしまったあたしは、たぶん、もう、帰れない。

何も知らない顔で生活する日になんて、もう、帰れない。

「…つうつ…あ…」

おえつ…なきごえ、出ってしまったけど、もうどうでもいい。
どうでもいい、こんなの。

迷惑そうに周りの人たちが起きて見てくるけど、そんなの、もうどうだっていいよ。

どうしてこんなことになったんだろう。

考えても考えても答えなんかでなかった。

あたしが…、あたしがいい子じゃなかったから？

それなら、誰か、あたしの悪いところを言っつてよ。

直すから。

…直すから、だから、帰らせてよ！

涙がこぼれて膝が濡れていく。

涙で膝が暖かくなるのが、なんか辛かった。

心が痛くて小さく唸ってたら、音が聞こえてきた。

「！」

こっちに向かってってくる足音が聞こえて、意識もしてないのに、ビクツと体が震えた。

足音がここに来たら、殴られる…！

慌ててケータイを握り締めながら手の甲で涙を拭う、鼻もぐぐつとこすった。

泣いてたせいで喉が震えるけど、無理やり押し込める。

「
」

声が聞こえる。

あの怒鳴り声の人だ！

体が強張ってく。

怖い、怖い！

顔を膝に埋めて、縮こまる。

(…あれ?)

何か変だな、と外に意識を向ける。

声も足音も、複数だ。

それに、外で立ち止まって何か話してる。

「
」

「
」

…中に、入ってこないの？

たぶん2人ぐらい、外で話してる。

何を話してるか分からない。

まあ、分かっても言葉が通じないから分からないんだろうけど。

けど、部屋にいる他の人たちが、ぼそぼそと何かを囁き合うように

話し合ってた。

今まで全然感じなかった、期待みたいなものを感じさせる声で。

その声色に、あたしも気付いた。

たぶん、これって、殴りに来る人たちと、違う。

(…もしかして……警察の人!?)

思わず腰を浮かしかけて、鎖が音を立ててしまった。

(や…やばい！)

すぐ外に人がいるから音を立てちゃだめ、って分かってたのに！
外の声が、とまった。

あたしのたてた音のせいだ！

どうしよう、怒られるかもしれない！

息を詰めて硬直したあたしとは反対に、他の人たちは外が反応した
ことに色めいた。

がちやがちや、と鎖を揺らしたり、手を壁に叩きつけたりして、一
斉に騒ぎ出した。

(い、いや…やめて…！)

耳が痛い、うるさい！

耳を塞いで唇を噛んで耐えようとしたのに、全然、うるさいまま。

やめて…！！

ひよつとしたら、あたし、怒鳴ったかもしれない。

今までの音がウソみたいに、ぴたりと止まった。

ばたん、と大きな音を立てて、扉が開かれた。

扉の外から、部屋の人たちから、視線を向けられる。

じいつ、と。

「あ、あたし…」

ずかずか、外から入ってきた人が、あたしの前まで来た。

何をするんだろう、と思うよりも早く、伸びてきた手があたしの髪
を掴んできた。

「！！！」

がつん、と後頭部に、鈍い痛み。

息をのんで見てきてた外の人と視線が合って、ようやく、壁に叩きつけられたんだと気づいた。

正直、後頭部の痛みより、掴まれてる髪の毛、頭皮の痛みの方がじわじわきて酷かった。

でも、それよりも。

痛ましげな顔で、あたしを見てくる人、あの子が気になる。

綺麗な金色の髪の毛、薄い青色の瞳の、女の子。

朝の光の下で、綺麗な子。

何か言いたげに口を開いて、閉じる。

あたしとは正反対の彼女を見てられなくて、見たくなくて。目をそらされる前に、目をそらした。

「！！」

あたしの髪をつかんでる人はまだ怒鳴り声をあげてる。

それから、あたしの手に、視線を向けて、あたしのケータイを、取り上げた。

「や…返してっ！あたしのケータイ…！」

「、、！！」

ばしん、とこめかみを叩かれた。

めまいで、視界が揺れる。

体が崩れそうになるのに、髪を掴まれてるせいで、動けない！

誰も助けてくれないってのは、分かった。

あたしだってそうしただろうから。

「ただ、だからって、こんなさらしものみたいなのは…嫌だ！
やめてよ…！」
歯をかみしめて、目も閉じて、拳を握り締める。
誰にも見られたくなかったから、誰も見ないようにした。
全部が終わるのを、待った。
けど。

「…やめてあげてください」

小さな声が、聞こえた気がした。
待っても、痛みがこない。

そっと顔をあげて、あたしの髪をつかむ人が見ている方を、見た。
そこに、汚い液体が流れてる部屋に入って、光を背にする人がいた。

「彼女にそれを返してあげてくれませんか？」

(え…にほんご…？)

ちょっと低めの女の子の声を、あたしは聞きとることができた。
今まで全然分からなかったのに、この子の声は、聞こえた。
だって日本語だったから。

「？」

「ええ。大切なものようですから」

(…あれ？でも)

この人の言葉は、分からない…？
どうして？

滑る床になんとか足をつけて、壁にもたれながら立ち上がる。
彼女はあたしを見て、それからあたしの髪を掴んでる人に視線を動かした。

「。、」

「…ではお聞きしますが、彼女の服や荷は、彼らとはずいぶん違うようですね？ いったいどういうことですか？」

「、」

「その割には、ずいぶん傷だらけですね」

「！ …！」

目の前の人が、だんだん、彼女の言葉に怒りが高まっていつてるのが分かる。

会話は、通じてるみたいだ。

…どうして？

「そうですね。分かりました」

ふう、と息を吐いた彼女が、納得したように頷いた。
そして扉に手をかけた。

(ひょっとして…帰るの!?)

警察じゃなかったし、やっぱりこの子も服装が変だったけど。ただ、助かると、助けてくれるんだと、思ったのに…!

「や、やだ！行かないで！助けてっ！」

裏返りかけた、変な声が、出た。
女の子が、驚いたようにあたしを見てきた。

「！！！！、！！！！」

頭皮が引つ張られる感覚が、なくなる。

あ、と思う間に、大きな手が、容赦なくあたしの喉を、圧迫する。
ぐう、と息が詰まって、奇妙な圧迫感にむせそうになる。

けど空気が体に入らなくて、むせるどころか、呼吸もできない。

あ、死んじゃうかも。
なんて思った。

「な…何をしていますか！放してください！」

鋭い声を出した女の子が、液体が跳ねるのに慌ててやってきて、あたしの首を掴む手を払いのけた。

ほんの数秒の間だけだけど呼吸ができなかったからか、一瞬、目の前が真っ白になった。

視界が…力が抜けたあたしの体が、揺れる。

液体の中にあたしが落ちる前に、彼女の、意外としっかりとした腕が、あたしの肩を抱きとめた。

「！！！！？」

「…あなたには、彼女の言葉が分からないのですか？」

「？、、！！！！？」

「……そう、ですか……。……君は、大丈夫？」

女の子が、気遣わしげに、顔を覗き込んできた。
綺麗な肌だな、と思った。
まつげ長いし。

「あ……う、ん……だいじょ、ぶ……ありがとう……」

頭がガンガンしてるけど、うん、……大丈夫。

だけど、手を借りて立とうとしたけれど、力が抜けたのか、足が動かない。

自分の体が鉄の塊みたいに重いつつ、ふにゃふにゃになってるみたいだ。

……自分でも重たいと思うのに、この子、すごく平気そうな顔で支えてくれる。

すげえ、とか思った。

「……少し彼女と話をさせてもらってもいいですか？」

「？、」

あたしを彼女を変な目で見ていた男の人が、少し渋った後、嫌そうに頷いた。

「君も、いいかな？」

「え、うん……」

ここにきてから三日目の、朝が来た。

10話 : 彼と出会ったポーンの三日目(後書き)

- ・次辺りからもうちよつと短くしたいです…。
- ・パニックが収まったらまた1、2話みたいのにんきな文章になる予定。

けどあと10話ぐらいかかりそうだ…orz

今後の内容について

アンケート、ありがとうございました。

言語は、『マフムートの言葉が理解でき、里桜の言葉も通じる』に
決定します！

この設定は今後、話を書きやすくなるので嬉しいです…！

正直誰からも声がないのだと思っていたのですが…(名前は控えま
すが)お一人さまから貴重なお声をいただきました…！

むせび泣きました…感涙です！

ありがとうございました…!!!

今後よろしくお願いします！

11話 : 目を見たポーンと彼女

鎖を解かれて、部屋の外に連れ出された。

体中ギンギンだったから、あの女の子に手を貸してもらって。

あの部屋は馬に繋がれた…馬車？だったみたい。

中とは別物で、見た目は結構豪華だった。

あたしを連れてきた人たちが顔をしかめてこっちを見てる。

女の子は気付いてないのか、あたしの手を引っ張って馬車から離れたところまで連れてってくれた。

地面の匂いと朝の澄んだ匂いに気付いて、空を見上げた。

朝の太陽がすごくまぶしくて、空が青くてきれいで、泣きそうになった。

「……君に聞きたいことがある」

沈黙を破るように囁いたのは彼女の静かな声だった。

「あたしも、教えてほしいことがいっぱい、あるの」

この子、自分でも触りたくないぐらいものすっごい汚れてるあたしの手を、握ってくれた。

あたしの目を見てくれた。

だから、あたしは彼女をいい人だと思った。

そんなんで人を見てていいのか、とか言われちゃうかもだけど…。なんていうか…女のカン？

…うん、あたし、テストの山カンは外れまくりなんですけどね…。っていうか、それ以前に、自分が女だとか思ったりすることって、少ないんですけどね…。

けど、うん、この子はきつと大丈夫！

それにあたしの言葉、分かってくれるのはこの子しかいないんだから……。

「ここ、日本じゃないの？」

「ニホン？」

不思議そうに、ちょっと変な発音で、繰り返された。
……え、ちょ……まさか……。

「そこが君の住んでいた場所か？」

聞いたことがない地名だが、と呟かれた言葉に、気が動転する。

そんな、なに……っ、何言ってるの、この子……！

叫びたい気持ちを押さえて、無理やり笑顔を作った。
ぐるぐる、黒いものが、胸の中で渦巻いてる。

どつきどつき、心臓が大きく早く動いてて、……痛い。

「っ、ちょ……あ、あのね、冗談とか今はいいから、警察とか呼んでもらえないかな？それが大使館の人でもいいから……」

女の子の目がきゅっと細くなって、眉がしかめられた。

「その前に、こちらの質問に答えてくれ。どうして君の言葉は俺にしか理解できないんだ？」

……どきっ、とした。

それは、あたしも思ってたことだから。

「……知らない」

答えられない。
知らないんだから、分からないんだから、…答えられないのは、しかたない。
問い詰められるように迫られて、足がすくんだ。

「じゃあ、どうして君は俺の言葉が分かるんだ？他の人たちの言葉は分からないのか？」

「っ、知らない！分からないっ！だ、だって、どっどっどうしてみんな、あたしの言葉が分からないの！？どうして、みんな変な服着て、変な町にいて、変な言葉で怒鳴ったりするの！？どうして、どうして殴られなきゃいけないの！！？あっ、あ、あたし、あたし、何も悪いことなんかしてないのに…ッ！！！」

手を振り払って、彼女から後ずさった。

信じられない物を見たいな目で見られて、正直…傷ついた。

彼女から離れたかった。

こんな場所から離れたかった。

家に帰りたいかった。

なのに、どうして…？

彼女はあたしの言葉に戸惑ったみたいに視線を少し彷徨わせた。

それから、落ち着いて、と近づいてきた。

布をたくさん使ったどこかの民族衣装みたいな服が、ゆらり、揺れた。

キラキラ光る金色の髪、宝石みたいな薄い水色の瞳。

この子も…この子にも、あたしのことなんて、あたしの声なんて、どうせ届かないんじゃないか。

そうだよ。

あたしのことなんて。

だれも、わかってくれないんじゃないか。

「…、こないで」

汚れてしまった運動靴が、石畳を蹴り飛ばす準備をする。

海の中に入ると、今までで3回捕まった。

陸に着いてから、2回逃げた。

逃げて捕まえられるたびに、痛いことが増えた、環境が悪くなっていった。

逃げると嫌なことになる。

けれど、逃げずに嫌なことになるよりも、きつと、ずっとマシなはずだ。

足掻かないと、足掻かないと。

そう、思うのに。

(…あ、足が…動かない…)

コンクリートに埋められたみたいに、足が全然、動かない。

体を反転させて、今すぐにでも走りだせる。

その体勢まではちゃんと動いたのに。

手で太ももを触ってみた。

まるで冬の寒い時みたい、ケイレンしたみたいに、足が小刻みに震えてる。

そう分かったら、立っているのも耐えられなくなって、慌てて壁を手で押さえた。

でも目は彼女から逸らさない。

もう、いい子だなんて、思えなかった。

周りの全部が敵だ。

そう思っ、あたしは歯をくいしばった。

そんなあたしをしばらく見てた彼女は、不意にため息を吐いた。

こっちがドキツとするようなため息だった。

「…分かった、近づかない。だからもう少し教えてくれないか？」

「…なに、を…？」

ごくり、と唾を飲んだあたしを見て、彼女はほんの少しだけ微笑んだ。

「君のことを話してほしい。言葉だけじゃなくて、故郷のことも」

え、と彼女の顔を見た。

さっきと変わらない、だけどあたしをちゃんと見てくれてる顔だった。

だけど、あたしを知ろうとしてくれてる目だった。

なんかおおげさだけど、…初めて、言葉をかけてもらえた気がした。

11話 : 目を見たポーンと彼女(後書き)

千人隊長時代のマフ君(モロに捏造)∴難しいデス∴。
原作よりもギスギス感を出したかったんですが∴ううむ∴。

12話 : 泣いたポーンと彼女

「あたし、は…日本って国で生まれ育った、日本人…なの。学生で、勉強とかして生活、してて」

「その歳で学生…ということは、^{セラム}新兵学校のような場所…？君の国では女性も軍人を目指すものなのか？」

「セラム？や、普通に英語…外国語とか数学とか歴史とか古典とかを習う場所なんだけど…」

やっぱり、ここは日本じゃないのか。

分かってたけど、改めて気付かされると、…辛かった。

「一昨日のお昼過ぎ、学校から、家に帰ってきて、」

帰り道、車の下でノラ猫がひっくり返って寝てたぐらい、暑かった、一昨日の昼過ぎ。

あたしは宿題とか日焼け止めの心配とかしながら、家に帰った。それで、鍵をあけて、ドアノブを回した。

「玄関を開けて、あ、あし…足を…」

胸が痛い。

思い出すだけで、ドキドキしてる。

足を踏み入れた瞬間に体が下に落ちる感覚。

頼りない体の安定感、血が足にたまって、手がしびれて冷たくなっ
ていく感じ。

足の下にどこまでも広く青く広がっている、あのキラキラした海。

夏の制服から出ている腕が風に撫でられて、鳥肌が立ってた。
ごくり、と唾を飲み込む。
彼女はそんなあたしを、じっと見てた。

「足の下に…海が、広がって、て……」

「海？」

どうして急に海の話に、って目で見られて、ちよっと困った。
いや、だって…海が広がってたとしたか…ねえ？

「扉につかまっただんだけど、海に落ちちゃって、溺れかけてたら船に助けてもらって。…陸にいたら、あの人たちに、渡されて…。
あ、あたし…わけ、分かんなかった、から…それで、そ、それで、で
……」

息が苦しい。

「逃げた、の」

逃げた。

その一言を言うのに、勇気をふりしぼった。

「けど、捕まって、…「う、う、」

ぞわりと太ももに触られる感じが甦った。

喉を圧迫されて、締め付けられる感じも、思い出した。

…本当はこんなの、言いたくない、思い出したくない。

だけど、言わなきゃ、…言わないと、あたしの正当性が、あたしが悪くないってことが、伝わらない。

息をつめた。

そんなあたしの肩に、手が乗った。

「言いたくなければ、言わなくていいから、」

無理をしないで。

そう、彼女が言ってくれた。

知らない間にうつむいてたあたしは、その言葉に顔をあげた。

あまり表情に変化がない彼女の目が、あたしを気遣ってくれた。

それだけで、涙が出てきた。

それだけで、…救われる気がした。

「ごうかん、されかけた…！」

肩に乗った手が強張った。

彼女もあたしと同じ女の子だから、分かってくれただろう。

どれだけ怖かったか、どれだけ…恐ろしかったか。

「だから、また、逃げた…逃げたけど、逃げたのに…逃げられなかった…！助けて、くれなかった！誰も、だれ、も…あ、あたしの声、『いやだ』って声、」

届かなかった。

路地裏だったから、人がいなかったから。

そんな理由じゃない。

言葉が分からなかったから、ちゃんとあたしが『助けて』って言わなかったから。

そんな理由じゃ、ない。

もつと、もつと根本的な部分で、あたしは救われなかった。

…声だけじゃない、『あたし』が、『誰にも届かなかった』。

涙が落ちてく。

まつ毛を伝って、目から直接石畳に落ちてく。

雨の降りだし始めみたいに、ぼつぼつ濡れてく石畳が見えた。

そしたら、急に。

肩に乗ってた手に力が加えられて。

彼女の方に、体が傾いた。

え、と思うよりも早く、鳥小屋のにおいとお日さまみたいなにおいがした。

あたしよりも背が高い彼女の肩に、あたしの顔があった。

びっくりして固まったあたしの頭を撫でて、少しためらって、彼女が言った。

「辛かったな」

…そう。

辛かった。

しんどかった。

全部全部、嫌になった。

誰も分かってくれなかった。

分かるうとしてくれなかった。

あたしを見てくれなかった。

それが一番、救われなかった。

あたしがみじめだった。

自分がかわいそうだった。

何もできない自分が憎かった。

不条理な立場が苦しかった。

しんどかった。

つらかった。

「っ、う、あ、あっ……っ！」

まだ出会って数分の女の子にしがみついで、みっともなく、声を上げて泣いた。

一日以上水分も何も口にしてない声はかすれてた。それでも涙が出るのが不思議だった。

12話 : 泣いたポーンと彼女(後書き)

今、私波にノってる!!!

というわけで、この短さならもうしばし更新が早そうですね。

…いつまで続くかなあ。(遠い目

13話 : 傍観するポーンと笛の音

泣きまくって、ちょっと気が抜けた。

体が重い気がするし、水分不足でカラカラだ。

臉がすごい重いぞ…。

彼女の服も、べろんべろんに泣いたから濡らしちゃったし…。

「服、ごめん…濡れちゃった」

「い、いや、かまわない」

んん？

彼女の頬がピンク色だ。

声もどもってるし。

なんかめっちゃ…照れてます？

ワカちゃんとかなっちゃんなんて、あたしがいきなり後ろからアタックしても冷静にチョップしてくれるのに。

や…純情乙女ってこういう子なのか…。

声ちよっと低めだし、言葉もちよっと男の子っぽいし、胸も（正直）なかったけど。

久々の女の子らしい反応してくれる女の子に出会えたなあ…。

…という感じに考えてるあたしは、結構疲れてる。

疲れてるんだって今気付いた。

てか気付けた。

たぶんちよっとだけ、心に余裕ができたからだ…と思う、けど。

けどまだ、これからどうなるとか、考えてないし。

…うん、どうしよう…。

そう思ってへこんでたのが伝わったのか、彼女が一つ咳払いをした。

「と、とにかく、彼らと少し話をしてくる。ここで少し待っていてくれないか」

こっちを見てる男の人たちは、明らかに焦っているというか、苛立っているように見えた。

今あたしがあそこに戻ったら…。

想像するだけで体が痛くなる…。

そういえば、この子、あたしと同じ年ぐらい、だよな。

こんな子が一人で行って、大丈夫なの…？

この子、ものすごく可愛いから、あたしよりひどいことになるかも

…！

「い、行っちゃダメ…危ないよ…！」

向こうに行こうとしてた彼女の手を掴んだ。

彼女は驚いたみたいに肩越しにあたしを見て、それから目を細めて笑った。

「心配はいらない。少なくとも、俺は君よりは強いからな」

…おおう。

…か、かか…ッ！

(かつこいー…っ…！！)

ちょっと、これは、と、ときめくぞ…！！？

かつこい女の子好きになっちゃんだったら、きつと絶叫してる。

とつてもたくましい足取りで、彼女は男の人たちの所へ行った。

ハラハラしながら見てるあたしに、会話してる凜とした彼女の声が届く。

「あなたたちは彼女をどこで買ったのですか？」

かった。

買った、ということだろう。

…薄々は分かっていたけれど、あたし、やっぱり、人身売買に…かけられてたんだ。

そっぴいえば、あたしを見ながら、船の人とあの人たちがジエスチャ―で数字のやりとりをしてた。

そっぴか、と理解した。

船に拾われた時点で、あたしは『商品』になつていたんだ。

ここは、親切で人を助けてくれるような、そんな場所じゃないんだ…。

なら、と彼女を見る。

なら、彼女は？

彼女はあたしを、助けてくれるの？助けてくれないの？

助けてくれるとしたら、どうして？

警察は本当にいないの？

ここはいつたい、どこな の ？

「

…おかしいですね。彼女の話ではあなた方に会つたのは2日前だそうですが、サロスの港からこのトルキエまで、奴隷を連れてだとどれだけ急いでも1日2日で着く距離ではありませんよ」

「、、、！、、…

「！！！」

何度も聞いた、あの大きな怒鳴り声が聞こえて、思わず体が飛びあ

がってしまった。

あの人をなるべく視界に入れないように、下を向いた。
履きなれた運動靴に、汚れがこべりついてた。

「、、！！！」

「……分かりました。しかし仮にそうだとして、その港での人身売買による許可は得たのですか？」

「、……、、！！！」

「彼女は身売りをしてもされてもいない一般人だと言っています。万が一彼女が一国の身分ある立場であったとしたら、あなた方は裁かれることになりませんが、」

それは承知ですね。

そんな言葉が、空を飛んでる鳥の羽音と混ざって届いた。

男の人の声が、だんだん、小さくなる。

言葉が分からなくても、あの人たちが彼女の言葉に動揺してるのが分かった。

「念のために彼女を売った船について教えていただきましょうか。
…それと最後に一つお聞きしたいことがあります」

よく見たら、馬車の下の方からポタポタと汚い液体が零れてた。

「あなた方はムズラクへ向かう道中だと仰いましたが…ムズラク将
国へ向かうのであれば、キャラバン・カラヨル 隊商の街道ではなく海デニス・カラヨルの街道を利用するも
のではありませんか？それとも、帝国に何か用事でも？」

きやらばんからよる、だとか、でにずからよる、だとか、全く知らない言葉ばかりだ。

だけど、『帝国』という言葉が出た瞬間、男の人たちの顔色が、さっと変わった。

一言で言うなら、あおざめていった。

酸素を求めてる金魚みたいに口をぱくぱくさせて、何も言わずにじり、と後ずさった。

彼女はそれを見て何か確信したのか、後ろにいるあたしからでもはつきりと分かるようなため息を吐いた。

「…商人だというのに知識不足も甚だしいですね」

本当に奴隷商人なのですか、と彼女は呆れてた。

いや、それ、なんか挑発じゃん！挑発してんじゃん！と思ったけれど、口は出さないで見てた。

ようするに、……どーゆーこと？

あの男の人たちは…ウソを言ってたわけ？

ウソを言う理由があったってこと？

あたしと同一年ぐらいの女の子に？

なんで？

っていうか、あの子…。

「少し、お話を聞かせてもらいましょうか」

「…、…！！！！」

急に。

男の人が他の人に向かって大きく声を出した。

怒鳴るんじゃない、切羽詰まった声で。

そしたら、あの人たちが急に背中を向けて、馬車の前の席に飛び乗

甲高い鳥の鳴き声みたいな、風を切るような音。

「どう、から…」

音のする方向を探して、見た。

馬車を見下ろすような位置に、あの子がいた。

遠目にだけど、何か…金色にピカピカ光ってる紐が、彼女の手を中心に回ってる。

あの子が回してる紐から、音がしてる…？

逃げる馬車を見つめながら紐を回してる彼女が、その紐を回すのをやめた。

いつの間にか、空に、建物の屋根一面に、鳥。

地元でもここまで鳥の群れを見たことがなかった。

そんな鳥の群れの中心に立って、何かを口にくわえて。

「行け！イスカンドル！！！」

ヒュイ、と高い笛の音。

そして彼女の言葉に従うみたいに、鳥の群れが馬車を追って。

遠く、小さくなった馬車から、悲鳴のような声がいくつか聞こえてきた。

なんか、よくできた劇みたいで、…あっけにとられた。

呆然としてしまった。

ぼんやりと地面に落ちた汚い液体を見れば、その中に、赤い色が少しだけ混じって見えた。

あの時の…馬車に乗ってた人が急に騒ぎ出して何かで叩かれた後と同じような色の液体。

シヨックだったけど、反応もできなかった。
疲れてた。

けど、それ以上にあの子から目がそらせなかった。

腕に鳥を止まらせて、笑ってる。

（何者なんだろう…？）

14話 : 与えられたポーン希望

正直に言います。

あのことか記憶にありません！

たぶん寝ちゃったんだと思う。

起きたらふかふかの白い布団に埋もれてた。

…なんで？

「…、う…」

いつものように起きたはずなのに、ぐわん、と頭の中が揺れて気持ち悪かった。

前に親戚のおじさんにお酒を飲まされたことがあったけど、あの時みたいな感じ。

頭が痛いんだぜ…。

目の前がチカチカするのをしばらく我慢してたら、ちよつとずつまシになっていった。

(ここ、どこだろ?)

なんか、床に分厚い絨毯が敷かれてる部屋だ。

あたしがいるのは、その絨毯の上にクッションをいっぱい集めて、シートでひとまとめに包んだような場所だった。

うーん…これは手作りのソファーというか、簡単なベッドなのかな？くぼみを作ってふんぞり返って座ってみたいなあ。

で、トラとかはべらせるのだ。

壁の飾りとか窓の装飾とか、部屋の雰囲気的にはそんな感じだし。えーと、…どつかの国の大富豪的な？

いやいやいや、あたし大富豪の知り合いなんかいないし。

こんな異国情緒あふれる部屋なんて……。

(あ、)

そうだ。

人身売買されたんだった。

「っ……」

服は、変わってない。

体も(頭が痛い以外は)何もなさそう。

体中包帯だらけになってるけど。

ほっとしてモコモコのソファに体を倒した。

ここどこだろう。

今までで一番、いい感じがいい部屋だけ……。

あの子、大丈夫だったのかな……？

空青いな……あ、鳥飛んでる。

いろいろ見ながらぼーっとしてたら、ドアがノックされた。

「あ、はい。どーぞ」

ていうかあたしの部屋じゃないし。

とか思いながら家にいる時と同じように返事してから、ハッとして気付いた。

また、あの人たちだったら、どうしよう。

また引き渡されたりとかしたら……今度こそ……！

「
」

「やや、やっぱり、こないでーっ……！」

何か、何か武器になるものはないのっ!!？

汗を流しながら手近に何かないかと探しても、周りにあるのは布ばっかり。

どうしよう！

せめてもの抵抗に、とクッションをひとつ抱き上げて後ずさりしてたら、困ったような顔のおじいさんの後ろから、あの子が顔を出してきた。

「何をしているんだ？」

「こないでこないでこない……えっ、うっ……うっ……？」

あ、あの女の子だ。

長い前髪が顔の半分ぐらい隠してる。

うっとうしくないのかな？

っていうか、あれ…呆れてる…？

ため息を吐きながらおじいさんと一緒に来たので、失礼かなと思っ
てちゃんと正座してお迎えした。

「えっと…こ、こんにちは。…いらっしやいませ？」

「い、いや、そういうことはしなくていいから…」

頭下げて和風にお迎えしたら、なんかドン引きされた。

いや、明らかに外国人さんって感じの顔立ちだったり部屋だったり
したから分かってたけどさ。

クッションだらけの部屋で正座に頭下げるとかは自分でもどうかと
思っただけさ。

まさかそんなに引かれるとは思ってなかったんだぜ、お嬢さんよお

…。
地味にへこみながら、とりあえず二人をお迎えして、一緒に部屋の床に座った。

さて、と口を開いたのはおじいさんの方だった。
ここまでひげもじゃにしてる人とは生まれて初めて会った。
なんかひげを宝石で留めてて可愛いぞ、このおじーちゃん。

「？」

「はい、せんせー。何を言ってるのかわかりませーん」

拳手して言ったら女の子にため息を吐かれた。

この子、溜息多いなあ。

幸せが逃げちやうよ？

「カリル將軍バシヤは、体調はどうだ、とお聞きになっている」

かりるばしや、というのはおじいさんの名前なんだろうか？
首を痛めそうな大きさの帽子（ターバンっていうんだっけ？）のお
じいさんは、興味深そうにあたしを見てきてる。

「あ、大丈夫です。…って伝えてくれる？」

「ああ。大丈夫だそうです」

「。、？」

「はい。お互いに言葉は通じるようです」

「…、？」

「いえ、どうやらトルキエとは違う国の出自のようです。…というより、大陸とは違う場所と考えるべきなのでしょうが…」

「？」

「彼女は自宅へ帰ると足元に海が広がっていたと言っていました。そして海に落ちていた彼女を船が拾ったのだと…」

「…？、？」

あたしのことを話しているらしい女の子が、ちら、とおじいさんからあたしに視線を移して、少し考えるように口元に手を置いた。

あ、ひよつとして何か困ってる？

クッションの四隅についてる房をいじってた手を止めて、女の子に聞いてみた。

「どうしたの？分からないことがあったら聞いてくれるといいよ？」

あたしなりに気を使って言った。

だってこれってあたしのことを話してるんだろうし、あたしも家に帰りたいからできる限り情報は出すつもりだから。

そしたら彼女は難しそうな顔から驚いた顔になって、ふんわりと笑った。

「……そうだな」

…おお、美少女の微笑み……。

これって役得っていいのか？

見てるこっちまでとろけそうな微笑みに思わずうっとり。

……あれ、あたしって変態？

「私は彼女を信じます」

「え、そういう話してたの？」

えーっと……マジでそういう話してたの？

あたしの言ったことを信じるとか信じないとか、そういう話！？
いやいやいや、あたしうつかりだけど、なんでも聞いてよ、とか
言っちゃったよ？

そ、それならそうと言ってよ！

なんか違う話しちゃった自分がハズいじゃん！

空気読めてないじゃんあたし！

ヒイツ！

(く、クッション！どうかあたしを埋もれさせてええええ！！！)

慌ててコツソリ周りにあるクッションを集めてみた。

途中で何か視線を感じて顔をあげたら、たぶん真っ赤になってるあ
たしを、にんまり笑いながらおじいさんが見てた。

え、なに、ちょ、見ないで！

「

。

」

何か言っつて、女の子の肩を叩いたおじいさん。

途端に彼女の顔色が変わって、乱暴にクッションを跳ね除けて。

「な、なぜ突然俺が彼女の世話するという話になるのですか！？」

「え、今そういうコト話してんの！！！！？」

なんだかんだで結局、あたしは彼女の家でお世話になることになった。らしい。

彼女がひたすら「若い少女を家に置くのは」だとか「第一彼女のこ」とや商人たちの調査を」だとか言ってたけど、どうやらおじいさんに丸めこまれたらしい。

ふおおお、と笑うおじいさんが、おちやめにあたしに笑いかけた。

くやしそうに黙りこんだ彼女には悪いけど、周りにいるのは知らない人ばかりだし、言葉が通じる彼女といられるのは、あたしとしてはありがたい。

「ごめんね」

彼女には、迷惑をかけてしまう。

彼女がいないと、言葉も通じないし、家に帰る方法が分からないから、あたしは途方に暮れてしまう。

それが嫌だから、彼女に迷惑をかけてでも、あたしにできることは彼女にひつついてくことしかない。

お礼も何もできないのに。

「…いや、君は気にしなくていい」

優しい人だけど、いい人だけ。

それを利用するみたいで、そうじゃないとどうもできない自分が、たまらなく嫌だ。

「…ありがとう。よろしく、お願いします」

せめて、と正座で頭を下げたあたしの頭を撫でて、彼女は言った。

「大丈夫、ちゃんと家に帰すよ」

その言葉が、あたしの希望になった。

15話 : 彼女とポーンの会話

そういうわけで、明日、あたしの保護をしてくれることになった彼女の家にお邪魔することになった。

今日は彼女もおじいさんも仕事とか用意があるらしい。

なのであたしは今日はここで待機。

彼女は仕事での立場が上の人らしくて、あたしと同年ぐらいなのにもう働いてるんだ、ていうか部下までいるんだ、とあたしは盛大に驚かせてもらいましたとさ。

つてことは、おじいさんはくしゃくしゃした笑顔で手を振って帰っちゃったけど…この子の上司か何かなのかな？

服装も装飾品が多かったし、恰幅と人の良い富豪さんって感じだったけど。

…あのヒゲは一度でいいから三つ編みさせてほしい。
つていうかこの家は誰の家？

喉がカラカラだったあたしに気付いてたらしい彼女がくれた水を飲みながら聞いてみた。

「ああ、ここは詰所だ。今日一日は空けておくように言っているから、気にせず休んでくれ」

この部屋は来客用に使われることもあるから大丈夫、と言われた。

ツメシヨって…なんぞ？

「ツメシヨって何？」

と聞いてみたら、なんだかすごい反応をされた。

つていうかむしろこっちがオドロキな感じで目を見開いて驚かれた。

「……警備の兵が休憩する場所：なんだが。その…頭を打ったか？」
あからさまに心配してるような顔をされて、ちょっぴり心が傷ついたんだぜ。

「何気に失礼だよ、きみ」

毒舌ってほどじゃないけど、言葉に遠慮がない感じ。

まあ、美少女の悪意がない言葉だから、そんなに悪い感じじゃないんだけど。

でもツメシヨなんて知らないし。

…あ、日本で言うところの警察署なのかな？

それか交番？

でも兵ってなんだ兵って。

外国だから、警察のことそう呼ぶのかな？

でも兵って言い方だと、なんか王様とかいそうな感じだ。

君主制の国で人身売買やってて現在も民族衣装で生活してるような国って…どこかあったっけ？

…だめ、全然思い出せないや。

もっとちゃんと勉強しとくんだった…。

遅すぎた後悔をして、やたら装飾の派手な銅のコップ（はりぼたのゴブレットみたいなの？）の中身を飲み干した。

ぐぐつと背中を反らして飲み干して、で、気付いた。

「あ…あれっ！？あたしのカバンがない！！！」

持つてることを忘れるぐらい背中に背負ってたリュックが、いつの間にかなくなってた。

スカートのポケットの中、ケータイは…よかった、ちゃんと入ってた。

でもあたしのリュックが、ないっ！！！
クツシヨンに埋もれてないかと慌てて探ったあたしを彼女は止めて、
持ってた荷物からあたしのリュックを取り出した。

「あ、それあたしの！」

「悪いと思ったが、中を改めさせてもらった」

「……見たの？」

乙女の必需品を……！！？

いや、この子も女の子だから別に問題はないんだろうけど……一言ぐ
らい言ってくれてもいいんじゃないかね！？

批難の目でじとーっと思ったら、彼女は少し気まずそうにしながら頷
いた。

「筆記具などは分かったんだが、それは何の道具なんだ？」

それ、と指さされたのは乙女の（略）。

……んん？

「何って……生理用品だけど」

「せい……っ！……！」

ぼんつと音が出そうな勢いで顔を真っ赤にして引かれた。

おんやあ、顔が赤いですぜえ？

可愛いなあ、と思うあたしはオヤジ思考ですか、そうですか。
いいじゃん可愛い子を可愛いと思って何が悪い！

ゴホン、と一つ咳をして、改めて他の荷物を指差してきた。

「そ、それは君の勉強道具なのか？」

「うん。辞書と教科書とノート、それから筆記用具。あと、財布とか生理用品とか…壊れちゃったけど、ミュージックプレイヤーも…生理用品、と言った時に、もう年頃なんだから人前でそういうことを言うんじゃない、と赤い顔でばやかれた。
…ピュアピュアめ。」

「…その辞書に書かれてある文字は君の国の文字なのか？」

「うん。英語を調べるための辞書だから」

「えいじ？」

「英語、知らないの？」

世界で一番ポピュラーな言語なのに？

冗談キツイぜー、と笑ったのに、笑い返してくれなかった。
え、マジ…？

「あ、えつと……そ、そういえばさ、ここってなんて国なの？」

「トルキエ将国だ。…言わなかったか？」

「聞いてない聞いて…ない。たぶん！」

複雑そうな顔をされた。

これは呆れられたととるべき？

ていうかこの子、表情硬いよなあ。
ちゃんと笑ってる？

「で、トルキエシヨウコクってどこにある国なの？」

「は？」

「いや、だから、トルキエシヨウコクってどこにある国なの？ヨ
ロッパとか？アジア系な感じじゃなさそうだけど」

「？それはどこなんだ？」

「それって……」

「よろろっぱ？というのはどこの国のことなんだ？」

「……………はい？」

「……………？」

根本的に噛み合わない……？

え、ちよつとどういうこと？

レポート用紙（海に浸かったせいで綺麗じゃない……）を取り出して、
磯の香り漂うシャーペンで描いてみた。

簡略化した世界地図。

北半球と南半球、日本もちゃんと描いた。

日本が紙の中心になってるのは仕様。

だってあたし日本人だもん、日本用の世界地図ばかり見て育つて
るんだもん。

というわけで、この国はどこにあるのか、聞いてみた。

目を丸くして、変な顔をされた。

それを見て、あたしの冷静な部分が、やっぱりな、と思った。それから、冷静じゃない部分が、それでも、と思った。

「世界地図、見たことある？」

「ああ。だがこれは…」

言葉を濁した彼女は、たぶん、分かったんだろう。

あたしと同じことを思って、戸惑ってるみたいだ。

何か言いたそうな顔で、言おうかためらってる顔で、あたしを見てくる。

「…うん、聞かないで。あたしも分かんないや」

そっか。

帰れないんだ。

漠然と理解して、なんとなく、途方に暮れた。

どうしよう、これからどうしよう。

よっぽどへこんだ顔をしてたんだろう、彼女があたしの頭を撫でてきた。

それから、大丈夫、と言ってくれた。

「大丈夫」

「…ありがとう」

根拠もないただの気休めの言葉。

なのに、ちょっとだけ、気持ちが軽くなったような気がした。

家に帰してくれるって言うてくれた彼女には悪いけど、今の状況じ

や無理っぽそうだ。

だけど、彼女の言葉が全部本当じゃないかもしれないし。彼女も勘違いしてたりするかもだし。

決めつけないで、もうちょっと、あがいてみようと思う。

16話 : 理不尽とポーンの驚き

そんなこんなでいろいろありまして。

なんだかんだで結局この子の家でお世話になることになりました。
でもまあ、とりあえず。

「お手洗いきたいです！」

「……………」

ガツクリされました。

「…っ、いきなり何を言い出すんだ君は！…！」

え、なんで怒られんのあたし。

フツーにトイレ行きたいって言ったただけだぜ？

「いや、だって生理現象だし。…………あ、そっぴやー昨日から行って
ねえや」

大丈夫かなあ、あたしの膀胱。

でもあんなこんなでお手洗いのことなんかすっぱり頭から飛んでた
し、行きたくもならなかったし…。

水分摂取を怠ったからか？

そっぴえば昨日はやたら記憶がボンヤリだったけど、あれって水分
不足的原因？

寝て治るとかあたしスゲー。

あ、そういう問題じゃない？

「お手洗いつてどこですかーっ？」

ちゃんとイイコになって挙手で尋ねた。

再びガツクリされた。

おーい、大丈夫かー？

つていうかシモな話で悪いんだけど、あたしの膀胱は大丈夫じゃなくなってきたマース。

「早く早くっ」

クッション叩いて催促したら、布団持つて廊下を歩いてた女性を捕まえてあたしをトイレに連れて行くように言ってくれた。

あれ、なんでこの子が連れてってくれないんだろ？

忙しいのかな？

…変なの。

やっぱり異国風の服を着た、異国な感じの女性が、ニコニコしながらトイレまで連れてってくれた。

トイレは…なんて形容すればいいのかよくわからないのでカット。

洋風っていうより昔の和風に近いかな？

うむ…まあ、察してほしい。

勝手が分からなくてプチパニックになったあたしの心情を！！！！

まあ、なにはともあれ、ちゃんと済ませました。

よかったよかった…。

で、表で待つてくれてた女の人にありがとうの代わりに頭を下げてスマイルだけプレゼントしておいた。

…代わりに、やたら微笑ましいって感じの笑顔をもらったんだけど

…ここの人たちに、あたしって何歳に見られてんの？

「ただーいまー」

「……………」

ちよっと間を空けて、うん、と頷かれた。
戸惑ってるー？

「やー、なんかトイレも雰囲気違ったよー。ここって本当に外国なんだねえ……」

マネしようと思えば、たぶん、日本でもこついう家って造れると思う。

けどやっぱり水回りとかは最新のモノで揃えると思う。

それをあえて本場風に造るなんて、よっぽど心酔してる人じゃないと、しないと思う。

年季も入ってたし、たぶんだけど…本物だろう。

ちよつとだけ、ちよつとだけなんだけど期待してたことも、打ち砕かれた。

やっぱりここって外国なんだ…。

…って感じでちよつとだけ落ち込んでたあたしに、彼女が真顔でトドメをさしてきた。

「……………女性…だよな？」

思わずこつちまで真顔になるぐらい、真剣な顔で聞かれた。

心配になって、自分の体を見下ろした。

うん、ちゃんと胸はある。

「生物学的には。そりゃまあ、揉めるほど発育良くないけどさあ…
…ひどくね？」

あ、また赤くなった。

視線そらすし…おいおい、本当にピュアすぎやしないかい？

「すまない、女性というものはもう少し慎みがあるものだと思って
いたから…」

…ツツシミ？

なにそれ、おいしいの？

この子は…きつとイトコのお嬢様ばかりの中で生活をしていた
んだろう。

だって普通なら間違っても『慎み』だなんて口にしないだろうから。
…いや、お嬢様学校に行った中学の時の友達、お嬢様のくせに暑い
からってスカートばたばたさせて風起こしてるって言ってたな。
お嬢様だったって女なんだぜ？って感じ？
無駄毛のない女の子なんて幻想さ、幻想。

「キミは一般的な女性にどんな幻想を抱いているのだね？」

「いや、幻想は抱いていないが…ああ、年齢のせいか」

いや、あたしもう16歳なんで成長期終わってるんですが。
ていうかキミなんかあたしよりも胸ないみたいなんです。
棚上げですか、そうですね。

「……………まあ、確かに大人のおねーさんほどの色気はないけどさあ。
一応あたしも女なんだぜ？気にしちゃうお年頃なんだぜ…？」

「そう言われても説得力がないな…」

「触る？」

「結構だツ！！！」

クッションを間に挟んで超逃げられた。

ええーっ？

そこまで拒否るかー???

「そこまで全身で拒否らなくてもいいじゃんか……。同じ女なんだし
さあ……」

「……は？」

おお、見事な聞き返し！
ていうかなんかすごい目が丸い……。

…あれ、あたしそんなに驚くようなこと言っただけ？

「え？うん？どした？」

「お、同じ女って……」

「んん？何さーその『俺は男だ！』的な「俺は男なんだが……」はん、
の……う……う？うん？え？何って？」

「…俺は、男だ」

「……マジ？」

こんな可愛い子が、女じゃない？

嘘だ、だって……？

…あれ、この子、そういえば自分が女だって一回も言ってないし、
口調も動作も一人称も……。

「…そういう君は本当に女なのか？」

信じられない、2回も聞いてきやがった！
デリカシーがない…しかし可愛い…！
自信なくす…。

「あたばーよ！触れば分かるっ！ていうか、え、マジな話…」

「？」

恐る恐る、指さして聞いてみた。

「ついでる？」

殴られた。

痛い。

神様は今日もとっても理不尽だ。

「…俺が男だと分かったのなら、一緒に生活することは無理だと分かっただろっ？」

こめかみを押さえながら言われて、あ、と気付いた。

そうじゃん、これって同棲じゃん。

……。

（いやー、でも…男女の同棲って感じじゃないんだよなあ…）

「別にいいんじゃない？」

あ・呆れてる。

「…分かっているのか？君は一応女性なんだぞ！？それを見ず知らずの男の家に泊まり込むなんて」

「じゃあ、あたし女やめる」

言っておくけど、あたしはマジだ。

本気と書いてマジなのだ。

それに単なる思い付きだとかで言ってるわけじゃない。

「女じゃなかったら強姦だとかされないでしょ？それにあなたと一緒にいたら、間違いなくあたしは女には見えないもの。あたしと言葉が通じるのはあなたしかいないみたいだし、それに、家に帰してくれるんでしょう？あなたはあたしの希望だもの。迷惑かけないようにイイコでいるから、お願い」

立て続け、っていうのかな。

思ったことをべらべらしゃべったら、驚いたみたいな顔をされた。なんだ？

何か言いたそうに口を開閉してた彼女：ではなく、彼は、にらめっこするみたいにあたしの目を真正面から見て。

小さく、溜息を吐いた。

「本当は、君を知り合いに頼もうと思ったんだ。女性もいる家庭の方がいいかと思ったんだ」

「……は……はあ？！ちよ、ええーっ！！？」

あのおじいさんにあたしを預かるって言った、あのかっちょいい美

少女：失礼、美少年、はどこにいったんだー！！？

「約束、反故、ダメ、絶対！」

あまりに驚きすぎてカタコトで叫びながらクッションを振り回すという変人っぷりを披露してしまった。

いや、でも、おいおいおい！

それってつまりあたしをポイするってことか！？

飽きた女を捨てる男だったのかキミはー！！！！

…というジト目に効果があつたのかどうかは不明だけど、彼は気まずそうに視線をうつつかせて謝った。

「その、だな…君はまだ小さいのだし、女性であるのだから、思っていたんだが…」

「必要ないデス。っていうかそんな小さいとか言われる年齢でもないし」

だって16歳ですよ？

法的には子供産んでもオツケーな年齢ですよ？

同年ぐらいの子に小さいとか言われるってドンダケー。

しかし彼はあたしの否定を生温い微笑みで流して（失礼だなキミは！）、あたしが（無意識に）振りかぶっていたクッションを取り上げて言った。

「君の保護をカ ril 將軍^{パシヤ}に言い渡されてしまったからな。それに、君を助けると言った責任もある」

「…それじゃあ、」

自分でも顔が笑顔になってくのが分かる。

「ただし、日中は一人で過ごすことが多いと思っておいでくれ」

「！ら、ラジャーですとも！」

ああもう、ビックリさせやがって！

16話 : 理不尽とポーンの驚き(後書き)

お待たせしました、すみません！

16話はこれでシメです！

次回更新などを告知していきますので、活動報告のページもどうぞご覧くださいましー！。

PC 小説右上の『作者：木枯 雪』をクリック 左上の活動報告

ケータイ 『小説案内ページへ』 『作者：木枯 雪』 キー
4番の活動報告

3 / 29 更新 彼とポールの短編集 : 歩み寄り編(前書き)

短編の後からは原作軸がスタートするので、短編を読まないと内容がつかないことがあるかと思われます。

一応読み飛ばしても大丈夫な仕様にしていきます。

何かネタが浮かんだら随時更新していく予定。

1 . 名前編…

改めて、自己紹介。

お互いに名前を言った後、お互いに首をかしげた。

「『とうぐりるまふむーとべい』？なんか長い名前だね。外人さんはみんなそうなのかな」

「『くぬぎりお』？変わった名前だな」

「変わった名前じゃないって！苗字が『功刀』で名前が『里桜』なの！」

噛みつく勢いで説明したら、なんか、引かれた。
ドン引きつつも謝ってきたので、うむ、許してやるか。

「そういうそっちこそ、名前長いよね。どこ呼べばいいの？」

びんばしゅのとうぐりるまふむーとべい、なんてさー。

よく親御さんが名づけたもんだ。

あ、この国じゃこういうものなのかもだけど。

「いや、千人隊長の、トウグリル・マフムート・ベイ犬鷲のマフムート軍人だ」

「だからどこ呼べばいいのーって」

「言葉は理解できても意味は通じないのか…」

「そうみたい。で、どこの部分で呼べばいいの？てかびんばしゅと
かって何？」

びんばしゅのとうぐりるまふむーとべい、びんばしゅのとうぐりる
まふむーとべい…。

何回か口の中で転がしたら、韻の踏み方？みたいなのが分かってき
た。

びんばしゅ、の、とうぐりる、まふむーとべい。

の、は接続っぽいし…びんばしゅ、は出身地か何かっぽい？
じゃあ…とうぐりる、か、まふむーとべい、が名前かな。

「千人隊長は階級で、軍人は敬称ペイのようなものだ。トゥグリル、は
…俺の名称のようなもので…」

「ふむ。さっぱりわからんね！」

それはいったいどこの国の言葉ナンデスカー。

って言って教えてもらったところであたしには理解不可能っぽいか
ら、あえてスルー。あえてのスルー！。

で、教えてもらった単語を頭に詰め込みながら、指折り数えて。

「じゃあ名前は残ってる部分だから…マフムート？」

「、、」

く、と驚いたように彼が喉の奥で息を詰めたのが分かった。

薄い水色の瞳がまんまるに見開かれてる。

そっぴや彼ってなんかきたろーっぽいよね、前髪邪魔そっぴなトコと

か。

なんでこの美顔で男の子なんだろう、もったいない…。

とかいろいろ失礼なことを考えてる間に、彼は何か言いたそうに口を開いて…結局何も言わずに閉じた。

なんだ、言いたいことがあるなら言え！気になるだろうが！

…あ、もしかして呼び捨てはマズかった？

そうだよ、年頃の男の子っぽいし、花も恥じらう乙女（仮）に呼び捨てされたらびっくりだよな。

全然何も考えずに言っちゃったことを反省しつつ、せっかくだから親近感を持たせるためにもあだ名っぽく呼んでみようと思って。

「あ、ごめん。えっと、それじゃ…」君の国には軍人がいなかったのか？」

唐突に口を開いた彼が、何か考え込んでるみたいに、それからちよつと後ろめたそうに尋ねてきた。

唐突な話題に頭がつかなくて、ハア？って顔になってたと思う。てか絶対なつてた。

おいおい話を遮るなよ、…と若干イラッとしたものの、警察とか自衛隊とかじゃない、『軍人』って彼が言った単語から、なにか意味深な空気を感じた。

彼が言っている軍人ってのは、警察のことじゃないんだろう。

真面目に答えなきゃダメっぽいなあ…。

そう思って、頭の中のマジメスイッチを押して、あたしは頷いた。

「日本…あたしの国にいるのは軍人じゃなくて警察とか自衛隊なの。災害救助とか国際支援とかのね。だから軍人ってのはニュアンスが違うと思う」

「…戦争はしないのか？」

「…他国からの侵害に対する自衛って意味では、日本は戦争はできるよ。自衛隊も自衛のためって名目で戦争に参加すると思う。でも、こっちからは仕掛けない。今更戦争なんて世論が許さないし。第一利益がないもの」

利益がない、と繰り返した彼に頷いて、頭の中の教科書をめくる。なんてゆーか…戦争がどうだこうだ、とか、自衛隊がどうだこうだ、とか、そういう話って授業とかテレビとかぐらいでしか聞いたことないし、ふつーに生活してる中で真面目にそういうことについて考えることってそうないから、正直なんて話せばいいのかよく分からない。

…あたしの目の前にいる彼は、ナマモノの軍人さんらしいし。言葉とか国とかお互いに全く知らない状態だし。

「えっと、日本ってね、資源が超少ない国なんだって。だから、他の国から材料だとか輸入して、加工して売り出すって感じの国なの」

あれ、名前について話してたのに、いつの間にか国の話になってんの？とは思いつつ、ピンと張った緊張する空気の中でしゃべる。

…美人のマジな目って本当に威圧感アリアリです。

……なんか怖いよ、マフムートくん！

「資源がないから技術とか人を育てるって感じだね、まあ国債とかなんだかねで国内もゴタゴタだけど、それでもなんとか世界に認められてる小国なわけなのデスよ。で、おじいちゃんおばあちゃん世代で大きな戦争があったの」

ぎゅ、と彼の眉間に深くシワが寄った。

ああもう睨まないでよ！

怖い、怖いってば！

「で、負けちゃった。そこから戦争はダメなことですよ、平和が一番ですよ、って学んで、もう二度と戦争が起らないようにってみんな頑張ってるわけ」

「……頑張って、それで平和が保たれているのか？」

「うん。……まあ、みんな平和ボケしてるって言われるぐらい平和に慣れきっちゃってるし、いろんな国と仲良くしようって笑顔ふりまいてるし、他の国に『私たちからは戦争をしかけません』って宣言してるわりに軍事力はガッツリあるから返り討ち上等！って状況だからできることなのかもだけど……」

詳しいことはよくわからん！

まだ義務教育終えたばかりかの遊び盛り……もとい、勉強嫌いなものですよから。

とかいろいろ心の中で言い訳しちゃったり。

いや、だってほら……まさか自分が初対面同然の外国人さんに戦争とかの話をする機会がくるなんて思わなかったし……戦争とかの話って、なんかあんまり人と話すことって……なくなっ？

ハンパな知識で語っちゃったよ、ごめん！

しかもマフムートくん、思いつめたみたいな顔のままだし……。

やっぱりさっきのナシね！って笑って言おうと思っても、何か自分の世界に没頭してるっばいし。

うつむいちゃったし……心ここにあらずって感じだし……。

……なんか暗いよ、マフムートくん！

あ、明るい話題は……あ・そうだ忘れてた。

「ね、ね。ちょっと聞いておきたいんだけど」

「？」

「名前。マフくんって呼んでもいい？」

「やめてくれ」

「えー？かわいいのに…」

今度は悲しそうな驚きの顔じゃなくて、呆れたみたいな感じの顔だった。

口の端がひきつってるぞ、マフくん。

結局。

あたしの粘り勝ちで、彼の呼び名はマフくんになりましたとさ。

後から「本当は俺以外の人の言葉も理解できてるんじゃないか」と詰め寄られた。

なんでそう思うの、と聞いたら、気まずそうに視線をウロウロさせてた。

ははぁん…何か隠してるな？

この人たちの言語が分かるようになったら調べてやろう、と心に決めた功刀里桜16歳の夏。

ちなみに翌年、彼と旅に出た時。

なんであの時いきなり戦争の話になったの、と思い出して尋ねたら、「普通は初対面同然の軍人を呼び捨てにはしないだろう？」と笑われた。

軍人がどうかは分からないけど、初対面の人には普通は「くさん」とか呼ぶなあ。

そっぴや軍人ベイトってのは敬称みたいなものだとか言ってたね。

会う人会う人みんな、マフムート將軍バンヤとか呼んでくるし。
マフくんじゃなかったら切り殺されてたかも、と思って、一年近くをこの世界で過ごしたおかげで世界情勢を理解したあたしは顔を青くさせたりする。
頭の中がお花畑だった1年前の自分をぶん殴ってやりたくなった17歳、オアシスの町の夜のこと。

- 2 ・衣類編（予定）
- 3 ・会話編（予定）

4 ・不調編…

ここ数日、お腹が、痛い。
痛いだけでも辛いのに、なんかトイレに駆け込む回数も多くて…まあ、腹下し状態？
原因は分かってる。
ご飯だご飯。
メシ！

（だってまさか乳製品のパラダイスだとは思わなかったんだもん…）

毎食なにかに必ず乳製品が入ってるのだ。

ヨーグルトに始まり、チーズ、バターみたいなもの（マーガリン？）
…。

しかも牛以外の動物のも多種多様に。

しかも野菜が超少なくて、肉多め（これまた種類が豊富豊富…）。

食後には砂糖たっぷりのお茶…って、どんだけメタボ道まっしぐら？

それにしても、ダウンしたあたしを心配してマフくんが蜂蜜入れた牛乳持ってきた時は…殺意が沸いたね。

いやあ、うん…正直、イラッときたね。

…飲みましたよ、飲み干しました。

だって何も食べられないのを心配して、栄養価の高い牛乳に高価な蜂蜜突っ込んで持ってきてくれたんですよ？

それを断るなんて…できん！

「そして案の定悪化したのである…」

パイ、と枕元でイスカンドル（連絡係）が暇そうに相づちを打った。

ご主人様^{マフくん}は現在お仕事で外出中。

何かあったら窓を開けてイスカンドルを放つように、とガツツリ言い含められた。

お見送りぐらいしたかったけど、寝てるように、と怒られたし。

外に出られるマフくんが羨ましい。

仕事のため、つてのは嫌だけど。

まあ平日（祭日ではない、って意味）の真っ昼間だしなあ、と指先でイスカンドルのクチバシを撫でようとしたら噛みつかれた。

愛が痛いぜ、ハニー！

そっぴやイスカンドルにはあたしの言葉は通じてるのかな？

痛みでお腹を捻りながら、枕元で丸まっているイスカンドルを見上げた。

いつかあの胸毛（羽毛）に埋もれるんだ、オレ…。

…あれ、何か今死亡フラグ立っちゃった？

「イスカンドルー、キミはあたしの言ってること、分かる？」

「……………」

あ、返事すらしがコノヤロー。

つか眠そうね、キミ…。

(こちとら腹痛で死にそうだったのに…)

マフくんがくれた薬がきいてるらしくてトイレに駆け込む回数は昨日より減ったけど…。

そろそろあたしの体内水分量がヤバげ？

昨日は一応水と薬で乗り切ったけど、真水もダメなのかお腹の調子は良くならず。

マジで走馬灯が見えたっス、はい。

なので今日は飲まず食わず。

この間テレビで見た、空腹に薬って胃の粘膜にヤバイ！みたいな番組を思い出したけど、ま・しょうがなくね？ということであえてのスルー！。

…漢方みたいな粉薬も胃粘膜を傷めるのだとしたらあたし…自分で自分の内臓にトドメさしちゃった系？

うはwwヤバスww

なんて考えながら笑うに笑えなくて変に遠い目してたのが気に障ったのか、イスカンドルーがあたしの顔に攻撃してきた。

「ピイツ！」

「あいたっ！ちよ、イスカンドルーさんマジひどくね？病人に対して

その仕打ちってひどくね？」

「ピーイツ！」

羽でバツバツサ顔を叩かれて、多少ムカツときたものの、なんとか自重。

イスカンドルに当たったトコで意味ないし。

つかそんな体力残ってないし。

いやそれよりも、なしてイスカンドルさんはワタクシに攻撃なさるの？

痛いんだけど。

胸が痛いんだけど。

なんか謂われのないバツシングに泣きそうだよ。

… たった一週間とかそこから根性が激弱になりましたわよ。

さすがにお母さ〜んとか言って夜な夜な泣くってトコまではいつてないけど、もーそろそろ限界やも。

人肌恋しいし。

他人と気兼ねなく話しまくりたいし。

友達元気かなーとか、父さん母さんは悲しんでくれるかなーとか。

ワカちゃんとかなっちゃん、元気かなあ。

学校でもらった飴玉、もったいなくて食べてないよ。

今食べたら、本当に泣いちゃいそうなもの。

うわ、なんか涙出てきた！

ずびずび言いながら布団にもぐって耐える。

落ち着いたらしいイスカンドルが顔のそばに乗ってきた。

む…ちよつと息苦しいぜ…。

無言の戦い（in布団）をしてたら、トントン、と扉が叩かれる音。

「リオ、体調はどうだ？」

おお、マフムート……我が天使！
そしてイスカンドル…お前は悪魔だ！
この、このっ、可愛い小悪魔ちゃんめ！

「イスカンドル、リオは寝てるのか？」

ぴい、とか機嫌のいい声で返事したイスカンドルがマフくんの方に
飛んで行った。

チツ…都合のいい鳥め！

焼き鳥になっても知らないんだからねっ！

…うわ、食べ物のこと考えたらまたお腹痛くなってきた……。

「リオ…？」

「む…起きてるよー」

顔を出したら驚かれた。

え、ちよつと、なんで後ずさるとかするの!?

布団に蹲りながらマフくんの服の端っこを摘んで逃げられないよう
に固定しとく。

この純情天使は女の子の話になるとすぐ逃げようとするんだからっ！
もしくは変な顔をしてドン引きするか、お母さんみたいに注意して
くるか。

「…大丈夫か？」

大丈夫じゃないよ。

けどそんなこと言ったら、きっとマフくん慌てるよなー。

なんか本当にお母さんみたいだし…。

それに今、ちょっとマシだ。

「うん。だいじょぶ…」

「そうか」

ベッドにマフくんが座った。

イスカンドルがベッドの上をちよこちよこ歩いて、あたしの顔の前で座り込んだ。

久し振りに羽毛布団に埋もれたいなあ…。

布団の端っこを掴んでた手を離して、イスカンドルの体をもうちよつと引き寄せて顔を突っ込んだ。

イスカンドルは嫌がらずに、あたしのしたいようにさせてくれた。さすがにマフくんの前では良い子なのね…。

マフくんが苦笑してたけど、気にしない気にしない。だって病人になったら他の人に甘えてもいいんだもん！

今あたしが決めた！

逆らうヤツは許さないんだぜ！

「…後で腹痛止めの薬を持ってくる」

サンキューマフくん！

さすがはあたしの天使だねっ！

「ありがとう、マフくん」

「今はゆっくり休むんだ。いいな？」

「うん」

ぎこちない手つきで頭を撫でられた。
マフくんの手、気持ちいいな。
イスカンドルもフワフワだし。
痛いのもちよっとマシになったし。

「マフくん、ありがと。お母さんみたいだねー…」

「俺は男だっ！」

おお…初日以来だな、その台詞。

お母さんっぽいってのも本当のことなのに。

あ・分かった、照れ隠しだな！

マフくんの照れ屋さんめっ！

あ、ちよっと眠いぞ。

真っ赤でワタワタしてるし、仕方ないなあ。

おとなしく寝てあげようかな。

「マフくん、」

「な、何だ？」

「…おかしさんってよんでもいいー？」

「断る！」

マフくんが怒った。

おいおいマフくん、イスカンドルがビツクリしてるじゃないか。

イスカンドルに顔をくっつけてたら、でかいあくびまで出てきた。

ていうか仕方ないなあ、みたいな目でイスカンドルが見下ろしてくるのとか、なんかもう…自分が悲しくなってくるぜ…。

お腹痛い時は出すもん出して、水飲んで、いっぱい寝て治すとい
んだよね、たぶん。

でも水とか無理だったから…一回、煮沸してもらおうかな。

日本って水道水とかでも飲めるとかいけど、海外ってそういう整
備って簡単にしかしてなさそうだ。

白湯とかだったら殺菌できてるし、大丈夫だよな？

ていうかダメだったら、あたし、干からびて死んじゃう。

それに、今のうちに何か頼んでおかないと、このままだったらマフ
くんが出ていっちゃんいそうな気がする。

マフくんってばワーカホリックだし。

もう一回、気付かれないように気をつけて、マフくんの服の端っ
こを掴みなおす。

これでよし！

「お白湯とか、お願いしてもいい？」

「…分かった、すぐに用意しよう。ああ、そうだリオ」

「んー？」

「果物を持ってきたんだ。これなら食べられるかもしれない」

「ごそ、と紙袋を出してきて、中身を見せてくれた。

オレンジだ！

そういえば、熱を出してお腹が弱い時にも、蜜柑の缶詰めとか桃の
缶詰とか食べたし。

これなら食べれるかも。

そう思ったらお腹が空いてきた。

「食べるー！」

イスカンドルから顔を上げて挙手。
マフくんがしかたないなあ、みたいな顔をした。
やっぱりお母さんみたいだ…。

「分かった。じゃあ用意してくるから、少し寝ている」

「うん。待ってる。おやすみ…」

「ああ、おやすみ」

「ピィ」

イイ子イイ子。

お日様の匂いにするイスカンドルを抱き締めて、マフくんに背中を
撫でてもらって寝る。

今あたし、すっごく幸せ。

(絶対いい夢見れるよ…)

仕事忙しいのに様子見に来てくれたマフくんに、コッソリありがとう
を言って。

あたしは目を閉じた。

腹痛の一件は無事、マフくんが食べさせてくれた果物で解決した。
で結論。

生水はヤバい！

てか火が通ってない物はヤバい！

生水とかつて、エジプトとか海外に行ったら気をつけろって言われ
てるんだよね？

日本とは文字通り『水』が違うって。

それなら果物はどうだった？

いやー、なんか後から聞いたらあの果物は『他国産』だったんだっ
て。

つまり、トルキエのではない…と。

…植物の神秘を目の当たりにした瞬間でした。

でもって、不法に輸入した果物を売っていたことがあたしの腹具合
で発覚して、その果物屋さんはお星様になりました。

なんだかなー…。

「というわけで、台所で遊びたいです！」

元気よく挙手しておねだりしてみた。

整った眉を寄せて怪訝な顔をされた。

え、いきなり何言ってるのこイツ？みたいな顔だぜ…。

まだ治りきってないあたしのピュアピュアな心に大ダメージ！

…いや、マフくんは可愛いんだけどね。

マフくんでは普段から目つきがややキツイからさー…睨んでるのか
よ、とか思っちゃうんだよ。

慣れればちよつと無愛想なだけの美少女だって分かるんだけど。

…あれ、それっていいのか？

まあとにかく。

「だ、ダメかしらー？」

角度は斜め上25度ぐらいがベスト！（当社比）
まあ、ダメって言われてもアタックし続けるけどね！
だって死活問題だし！？（泣）

「調理場を…？」

ハツとした。

そうだ、確か台所って重要なトコじゃん。

生活の基礎は食事から！

男は胃袋からわし掴め！

どんな軍隊も腹痛で戦闘放棄！

暗殺は毒！

つまり、胃袋は大切ってこと。

勝手に他人様の家に居候させてもらってる身で、そんな大切な場所を貸せなんて厚かましかった…。

これは…断られるよなあ…。

「構わないが、何をするんだ？」

「っていいのかよ！」

なんだとー！？

ワッショイしてエアーチャブ台返ししたらドン引かれた。

逃げないでー！

「いやあ、慣れない食事だからお腹壊したのかなーとか思ってさー。
なら自分で作ったら大丈夫かなとか思ったのですよ」

すっかり馴染んだ布団に潜る。

ちなみにマフくんは居候が決定した日にあたし用のベッドを用意してくれました。

絶対、色々と嵩んだよね…。

マフくんには大感謝。

だからダメって言われたら他の手で何とかしなきゃって思ったんだけど。

どうなのかな？

チラッと見上げたらマフくんの肩のイスカンダルと目が合った。

「そういうことなら構わない。…食料も違つだろつから、後で買い出しに行こう。それを基準に次からの材料費はこつちで出すから、後のやりくりは自分でやってくれ」

「神！」

「なつ、拜むな！」

ぎゃあ、とイスカンダルが驚いて鳴いた。

あ・イスカンダルとも割と仲良くなりました。

まあ、何日もベッドの上でイチヤイチャしていましたし？

…主にイスカンダルからのドメスティックな攻撃だったけど。

「んじゃ、早速行きましょー！」

布団を跳ね上げてベッドから飛び起きたら一瞬ぐらつと地面が揺れた。

う、うおー！？

驚いてたらマフくんがガツシと支えてくれた。

おお…反射神経いいな、キミ！

細身の中に逞しさ在中…惚れちまうぜ！

まあ、「冗談はさておき。

「ナイスだマフくん！」

サムズアップでイイ笑顔をプレゼントフォーユー！

あからさまに肩を落とされました。

ちよ、その反応ひどくね！？

「（…気が抜ける！）リオ、今日はまだ寝ている」

「ええっ！？」

「まだ本調子じゃないんだ。その様子では市の人混みに負けるだろ」

マフくんにくつついて前に一回、服を買ったためこの市場を回ったけど。

でもさー、通学の通勤ラッシュに比べたらなんてことなかったよ？つかせいぜいバーゲンをやってない休日のデパートレベルじゃん。

「あんなのチヨロいって」

毎朝通勤ラッシュと戦ってる現代っ子なめんなよ！

そんじよそこいらのヒヨッコたあ鍛え方が違うんでえ！

あ、マフくんも現代っ子が。失礼しました。

うーん、国が違うんでい！ってか？

「とりあえず行くごうよ。市場行きたいよー」

てか行って材料買わないと食べるに食べられん！

料理？

大嫌いです、何か？

学校の調理実習レベルならなんとかなるからいいんだよっての！
でも……炊飯器って…あるのかなあ？

悶々としてたらあたしがへこんだとも思ったのか、マフくんがため息を吐いた。

「…仕方ない」

「え」

呆れたみたいな顔のマフくんが目が合った。

これは……待ってくれてるのかな？

「ほら、行くんだろ？」

ほ、微笑みの天使！

クラツときちやうよ！

君は私の白衣（仮）の天使だ！

あたし、極限に感激した！

「ま、マフくん大好き！」

感激ついでに、友達に言うみたいに言ったら真っ赤になった。

おお…初心じゃのう、お主…。

「リオ！」

「あはは！マフくんてば顔赤いー！」

まだ床がふーらふらするけど、なんかすごい面白かったから笑えた。久々に自分の笑い声を聞いた気がした。でもそろそろマフくんが爆発しそうだし、この辺でやめとこう。

「んじゃマフくん、案内よろしくです」

まだ文句を言い足りないみたいなお顔されたけど、あたしは腹ペコなんですよ。

年頃の乙女にあるまじき腹の音が聞こえないってのか！

ちなみにマフくんを異性（恋愛相手）とは認識してません。

いやー、だってほら、最初が最初だし？

てかいまだに女の子だとか思ってたしちゃうこともあるし。

買い物の時に下着の話とかしちゃうたし、洗濯物とか、お月様からの使者への対処法とか。

…あれ？

思い出すとあたしって何気にエロオヤジ？

セクハラ連発？

…あたし、女だっけ？

うーん…マフくんってクラスの男子っていうより、なんかこう……。

（マフくんってお母さんみたい…）

普段はクールなのに失敗とかしたら真っ赤になるあたしのお母さん。ツンデレだなあ、と思った覚えがある。

あー、そっかそっか、お母さんかあ。

あんまりっていうか全然愛想がよくないクールなマフくんの態度に嫌な感じがしなかったのは、それでなのか。

仕事第一だけど、なんか面倒見がいいし。

媚びた感じがなくて。

我を通す感じで。

けどワガママなガキじゃなくて。

自分にも他人にも厳しくて。

けど身内に優しくて。

わざわざ果物とか買ってきてくれて。

つづいたらすぐ真っ赤になる。

可愛い感じの。

…やっぱり女の子なんじゃないの？

そう思ったらすごい、気になる。

うっわ、めっちゃくちや気になるっ！

マフくんが背中を向けてる今がチャンス？

そーっと…近づいて……。

卑怯と言っなかれ！

後ろからアタック！

「えいつ…あ、やっぱり胸な…いだッ！」

即座に殴られた。

うあぁ…ああ…メツチャ痛いいつ…！！

うずくまって悶えちやうぐらい、痛い！

手加減抜きの肘鉄…あざーっす！（泣）

マフくんは仁王立ちで真っ赤になってぶるぶるしてた。

…怒り爆発で言葉もない感じが…こ、怖え…！

「ごめんなさいすみませんでしたつい『やっぱり同性なんじゃね？』とか思ってた気がしたら手が出てました許してください！」

土下座の勢いで平謝りしました。

…ひょっとして、こういうことばかりしてるからイスカandalが懐いてくれないのか？

とか思ってたなら、あたしの考えを読んだみたいにイスカandalが「

ぎゃあ！」とか鳴いた。

ピィ、じゃありません、ぎゃあ、です。

…いや、ほんと…ごめんなさい。

「…行くぞ！」

「むげうっ！く、首締まる首締まる…っ！」

というわけで、結局買い物が終わるまでマフくんはあたしの背後に立って、あたしの首根っこをひつつかんだままでした。

そしてお店の人たちに捕り物だと勘違いされかけたよ！

うーむ…これからは気をつけよう。

気をつけるだけで、行動に移せるかは分からないけどね！

そして後に、キュロちゃんに言われることになる。

あんたは変態なのか、…と。

でもってマフくんは結局…ていうか最後まで、変態じゃないと否定するあたしの弁解をしてくれることはなかった。

あたしは変態じゃない。

変態じゃないのよーっ！

5・語学編

『言語覚えるってさあ、どうしたらいいかなあ？』

どうせヒマだし、ってことで夏休みの宿題をやるうと思っただけで開いた教科書を見て…やる気半減。

時々写真や絵があるだけの英文…。

英語、きらい！

教科書（海水に浸かったせいでベロベロ）を見ながらルーズリーフ（こっちはちょっとマシだけどやっぱりベロベロ）に回答を書き写していく途中、机のお向かいに座ってるマフくんに聞いてみた。

マフくんは何か手帳？みたいなのに、インクを浸した筆で何かを書いている。

あの手帳、前にも見たことあるぞ。

スケジュール帳か何か？

「言葉か…。実際に生活をしている中で使いながら慣れていくのが一番いいと思うが…」

ちら、とあたしの手元を見て、マフくんがちょっと眉をしかめた。

でもって、同じようにマフくんの手帳をチラ見したあたしも眉をしかめた。

マフくん、それ…何語よ？

「…それはリオの母語なのか？」

『んにゃ、第一外国語。英語だよ。世界で一番通用する言語』

あたしの行ってる高校では、2年になったら第二外国語の選択もある。

まあ、趣味レベルの勉強しかしないし、選択によっては美術とか書道とかを選べるって感じの授業時間なんだけど。

『あたしの母語は、こっち』

ようやく半分ほど埋まったルーズリーフをマフくんに渡したら、なんか不思議そうな顔をされた。

『読める？』

「いや、全く」

だよー。

イギリスとかアメリカとか知らないって言うてる時点で期待なんかしてないですからねー。

あはははは。

…ほんと、どこなのよ、ここ。

せめて英語が通じる国だったら、夏休みの間に英語力を身に着けるとかできただろうに…！

……ん、語学？

辞書をめくってて、ピンときた。

もしや、今の状況って、けっこーオイシインじゃなーい？

『ねね、マフくんマフくん』

「なん…だ…？」

『なぜ言葉を止めたし』

「い、いや…」

なんだってのさ、まったく…。

あたしの最高の笑顔でにじり寄っただけじゃんかよ。

…ああ、思春期か…ふふ…若いねえ…。

いやいや、それよりも。

『この国の言語、教えてほしいなー』

「この国の？」

『いや、だって、ほら…』

なんて言おう…。

将来通訳とかで活躍したからサ　なんて正直に言ったら絶対…絶対！さげすむような目で見られる！
ので。

『げ、現地の言語を学べる機会ってそうないし？それにほら、一人で買い物とか行けるようになりたいし！』

それは本当だ。

来たのは不本意だったけど、本場で外国語を学べる機会ってそうそうないもんでしょ。

それに、こっちに来て自分で食事を作るようになってから、買い物はマフくんが付き添ってくれるか、買い物メモを書いてもらって、それをお店の人に見せて買う感じだったから。

仕事が終わって疲れてるお母さ…マフくんに、買い物につきあってもらうってのは、申し訳ないなー、とかいつも思ってたからねえ。

お願い！って拜んだら、めずらしく、めーずーらーしーく、ため息も呆れた顔もないマフくんが、快く引き受けてくれた。

おお…天使がいる…！

というわけで始まった勉強会。

代わりにあたしはマフくん日本語を教えることになった。
って言ってもひらがなメインだけど。

カタカナとひらがなの違いは何だ、なんて言われたらきっちり答える自信がない!!!

五十音表を作って渡して、これベースにやろうか、って言ったら首を傾げられた。

で、日本語は他にカタカナと漢字があるんだよ、って言ったら、なんか、尊敬のまなざしを向けられた。

うわ、なんか、いつもと違いすぎて鳥肌立った…!

やっぱマフくんはいつも通りのクールなまなざしがいいよ…。

『これは何て読むの?』

今日の買い物メモを作るところから始めようってことで、マフくんに書いてもらった単語を写し中。

ふにゃんふにゃんした文字を見せて、意味を教えてください、それを新しい買い物メモに書き直して覚えてくことにした。

ちなみに、ついでに和英辞書にもメモっておいて、お互い分からないトコがあつたら見ていこうってことになった。

発音については…これは現地の人と話して覚えてくしかない。

だってマフくんの言葉、あたしには日本語っぽく聞こえるんだからしょうがないじゃんよ!

「「カカオ」だ。リオ、書き方はこれでいいか?」

ひらがなで『かかお』って書かれてるのを見て、オツケーを出す。

うん…ミミズがうねったような文字…テラかわゆす…。

『あ、ねえねえマフくん。ついでにさ、交換日記しない?』

「交換、日記？」

『うん。今日あったこととか書いて、お互い解読してくの。どうよ？』

マフくんは夜遅くに帰ってくることも多いし、毎日勉強できるってわけじゃない。

だから、宿題って形でやったらどうか？とか思って提案してみた。あ、夏休みの宿題…。

……放置だ放置！
んなもん知るか！

「…そうだな。やってみようか」

『よっしゃー！』

これで文法も覚えられるぜ！

…そう、それが間違いでした…。

マフくんならきっちりした文法で書いてくれるだろうから安心、とか思ってたなら、うん、ちゃんときっちりした文法で書いてくれたんだけどさ…。

やたら文章が多いわけですよ。

大量なワケですよ！

しかも学び始めた超初心者には分からん単語も多いわけ…。

必死に翻訳しつつも分からん言葉が多すぎだから、そこはごまかしつつ、ニュアンスで返事を書いてたりした。

マフくんも同じような感じだったらしいけど。

お互いに答え合わせをしていって、あまりに内容が食い違い過ぎてたりしたら笑えたもんですよ。

まあ、そんなこんなで早数か月。

毎日の継続力って大切だね！つてのが実感できた。
…主に近所のおばさんたちの井戸端会議で、この語学力は養われたともいえる。

ちびっこに混じって文字の書き方とか覚えたり、魅力的なお姉さまたちに発音を丁寧に教えてもらったりもしたけど。

辞書も日常で使う言語はあらかた埋めれた。

うーん、がんばってるなあ、あたし…。

『ただーいまー』

夕方、買い物&井戸端会議から帰ってきて、マフくんがまだ帰ってきてないのを確認。

サクツと…まではいかないものの、なんとか夕食を作って、ちょっと時間ができた。

そっぴや交換日記はあたしの番だったな、って見たら、なんか…表紙がちよっと違う感じ。

『新しいのに変わったのかな…？』

まだページはあったと思うんだけど。

変なの、って思いながら辞書片手に中を見て…。

『……………』

閉じた。

『え、見間違い…？』

もう一回見た。

いつもと同じ、繊細なマフくんの文字。

いつものマフクンの日記とは違う、短い文章。

一ページに書かれた言葉も少なめ。

内容は……なんか……なんて言えばいいのかな、これ……
そう、まるで……。

『……ふっ……』

見なかったことにしよう。

見なかったことに、してあげよう。

新たなことを覚えるというのは新鮮で喜びに満ちている、とか。

直面した困難を乗り越える人の姿はいつだってすばらしい、とか。

いつつも「キリッ」って顔のマフくんからは想像できないような抽象的な言葉がたくさんあったりとか。

うん……。

『^{ポエム}詩が趣味ってのも、いいんじゃない？』

とか呟きつつ、顔がにやけるのが止まらないという。

あ、やべ。

今マフくん見たら絶対笑う。

真剣そのものな顔で手帳に向かっているマフくんが、まさかこんな……
……ぶふっ。

その後すぐにマフくん「何か楽しいことでもあったのか？」なんて言われたりしたけど。

まあ、なんとか乗り越えた。

でも、ああ、よかった。

マフくんが普段から齒の浮くようなポエムっぽい言葉をしゃべる人じゃなくて。

だってあの容姿で緩い言葉とかしゃべってたら、完璧逃げる。

恥ずかしさで逃げる。

あたしが、逃げる！

というわけで、その後そのポエムノートをあたしが開くことはなかったんだけど。

たまにマフくんが家に置いていくその詩帳に…こっさり手をのばそうかのばすまいか、と悩むことになったりする。

気分的には彼氏のケータイを見ちゃう誘惑？

…見ないけどね。

3 / 2 4 更新 彼とポーンの短編集 : 出会い編(前書き)

短編の後からは原作軸がスタートするので、短編を読まないと内容
がつかないことがあるかと思われ(でも微々たる繋がり…)

何かネタが浮かんだら随時更新していく予定。

日本語が『、アルタイル世界の言語が「」です。

でもマフ君との会話は普通に「」です。

ややこしいので、フィードバックで感じてくだされば幸い。

読みにくいですがよろしくお願いします。

追記: 3 / 2 4

やっぱり日本語を『』で統一しちゃうかも。

読みやすさを現在探究中…。

1. 毒薬フラグ1

「またご鼻屑にね」

まだ言葉がよくわからないあたしに気を使って、ここの通りの人たち
はゆっくり話してくれる。

みんな優しいよなあ…。

「はい！ありがとうございます」

ばいばい、と手を振って籠を持ち直した。

お・おばさん果物オマケしてくれてんじゃん、ラッキー
帰ったら冷やしておいて夕食のデザートにしよう。

あ、でもこの間教えてもらったコンポートでもいいなあ…。

砂糖はあったけどワインはあったっけ？

あ、マフくんはお酒大丈夫だったけ。

イスカンドルは…ダメだよ、鳥だし。

……。

…なんか主婦じみてきたなあ、あたし。

てか半年ぐらい経つのに、いまだ家に帰る手がかりはゼロだし…。

むしろ言葉と分かるようになってきたからこっちに染まってき

ゃってるし…。

あたし、帰れるかなあ…？

…またへこんできたぜ…。

「おや、リオちゃん。一人でおつかいかな？」

「ん？あ、おじさん久しぶり！」

お店から生えたデカイ帽子があたしに話しかけてきた。

うーん、ファンタジー

…ではなくて。

いやいや、最近は割と一人で出歩いていますよ、ナッツ売りのおじさん。

店番奥さんに任せっきりでおじさんたちで遊んでるから会ってないだけですよ。

いっつも奥さんのグチを聞いているのはあたしなんだから知らないとは言わせない！

おかげさまでヒアリングが鍛えられていますけどね！

けどヒゲモジヤの隙間から深いシワが見えるこのおじさんは結構割引してくれるので、満面の笑みで頷いておくことにする。

え、打算的？

なんともおっしやい！！！！

「今日は、おじさんが、お店…と、と、」

当番…当番って何て言うんだっけ！？

ド忘れした！

頭の中身を混ぜっ返してるあたしに、おじさんが楽しそうに教えてくれた。

「当番かな？」

「それ！お店当番、です力？」

「そうなんだよねえ。最近ここいらも物騒になってるからって母ち

やんに引つ張り出されてね…」

「ブツソウ？ヒツパリ…ダレテネ？」

ボヤキだったのか聞き取りにくいスピードだったのと聞き慣れない単語がわんさか。

首を傾げてたらおじさんが苦笑いしながら教えてくれた。

なんか最近、この辺りに引つたくりが出るらしい。

昔から品物を盗む人とかはいるらしいんだけど、どうも最近のはコッソリではなくおおっぴらに盗んでいくのだとか。

当然追いかけるものの、足が速いものこの辺の地理を知り尽くしていることから、なかなか捕まらないのだとか。

しかも悪い感じに調子に乗って、最近は刃物をちらつかせたりもしてるとか。

「そんなことするなんてロクなもんじゃない。リオちゃんはまだ小さいから、十分に気をつけるんだよ」

「（もう17歳になるんですけど…）」

言うのが遅れたけど、ここの通りの優しいみなさんは、どうやらあたしをガキだと思っっているらしい。

しかもマフくと軽く話しているトコから変に誤解してて、現在あたしは拉致されたかわいそうなイトコの箱入り外国人娘の称号を得ている。

…早く外国人女性にランクアップしたい。

料理好きなのでコックでも可。

海賊船の戦うコックさんには遠く及ばないですけどねー。

懐かしいなあ、マンガ、アニメ、ネットサーフィン…。

「えっと…気をツけ、ます」

いい子だねー、と頭を撫でられた。
なんだかなあ。

とか思いながら割と思い籠を持ち直した時だった。
後ろに人の気配を感じて、お客さんかな、と思ったらチクツと背中
に痛みを感じて。

「荷物をよこせ」

………はい？

話しておじさん、道行くみなさんともどもポカンとしてたら、ゴ
スツと後頭部から衝撃と痛みがきた。

目の前にチカチカツと白い光が飛んでるーう…。

次の瞬間、よろけたあたしの手から重みがなくなった。
え、あれ、どゆこと？

「ど、ど、泥棒だああ！！！！」

「リオちゃんしっかりしろ！しっかりするんだ！」

「誰か捕まえてえ！」

おじさんとか、果物オマケしてくれたおばさんとかが、叫び声上げ
てた。

うへえ…頭、痛い…。

この間ベッドから落ちたのより痛い…。

てゆーか…あるえ？あたしの荷物ドコ？

ま、まさか…。

嘘であっておくれ、と思いつながらみんなが騒いでる方向を見た。

遠くの方に、見慣れた籠を持って走る人影があった。
いくら平和ボケなあたしにも分かる。

(や、やられた…!?)

噂の引ったくりに盗まれたんだ、とだんだん現実味が帯びてくる。
ゾワゾワツと鳥肌が立った。

トドメみたいの後頭部から生ぬるいものが…。
頭を押さえてた手離して見たら、血、が…。

又ルツとベタツと、血が、血、が……！

たたた、助けてドラえもんツ!!!

(そ、それよりカゴ…!三日分の食料と食費か…!!!)

冷蔵庫がないからあんまり買い込んでないけど…あれがなくなった
らごはん食べられない!

事情を話せばマフくんなら仕方ないって言って、大丈夫だったか、
って言ってくれると思う。

けど、それじゃあ、そんなの、なんか…あたしが、ヤだ!

あたしが納得いかない!

なんで殴られたんだ、とか、なんでよりによってあたしのを盗むの
さ、とか…もう頭の中がゴチャゴチャ。

ただ言えるのは…ムカつくってことだ。

『ツのやる…あつたまきた!!!おじさんちょっとあたし取り返し
てくる!ついでにポッコボコにぶん殴ってマフくんを逮捕しちゃう
ぞ っつてやつてもらっただからっ!』

頬を叩いて気合い入れて、ポカンとしてるおじさんたちに宣言。
みんな待ってて、あたし、伝説になる!

走ってつた犯人はもう見えないけど、人がワイワイ言ってる方に行けばいい。後ろからおばさんたちに名前呼ばれたけど、振り返ってるヒマなんてない！多少ふらつくけどダッシュできるし、急がないと逃げ切れちゃう。

『はあ……はあ……どっち、だろ……？』

息が切れる。

とつくに商店街の賑わいは途切れてて、周りはなんか…薄暗い道。ここ、ドコだろ…。

トルキエってゆーより、たった一度だけ見た…逃げるために走り抜けたあの場所に……似てる。

無意識のうちに鳥肌が立ってた。

背中もゾワゾワツツしててる…。

半年…半年も前のことなのに、フラッシュバックしてくる。

逃げても、逃げても、逃げても、…逃げられない。

体が震えて、乾いた血がついた髪がパリパリしてて、汗が止まらなくて。

コツ、と足音が聞こえた。

驚いて顔を上げたあたしは、たぶんとっても変な顔をしていたと思う。

だってあたしの顔を見た人が、ものすごい変な顔をしたから。

「そこで何をしている」

ちょっと速かったけど、低くて聞き取りやすい声だった。

目つきの悪いお兄さんが、路地裏の階段の上から太陽の光を背負って尋ねてきた。

「ど、泥棒…追いかけて、ましタ…」

いつも以上にイントネーションがグダグダなセリフで返した。
ふん？とお兄さんが目を細めた。

うわ、ますます目つき悪…。
つて泥棒のこと忘れてた！

「あノ、泥棒…これぐらいのカゴ、持った泥棒、見ませんでした？」

これくらい、と両手で輪っかを作って見せたけど、シカトしやがったよ、このオニーサン。

イラッ ときたものの泥棒は確かにこっち来たはずだし、と思ってお兄さんを見上げた。

さあさあさあ、とつとと白状おし！

じーっと見てたらため息吐かれた。
え、なぜに!？

「…」

カツ、カツ、カツ、と足音が階段を降りて近づいてきた。

ちよ、階段降りて来ないでいいから早くどっち行ったか教えてよ！
見てないなら見てないでいいから！

イライライラ…。

キリキリしながら、それでもちゃんと待ったあたしはとっても偉い
と思います。

マフくん褒めておくれー。

細身だけどなんかあたしより背が高かったお兄さんが、あたしを見
下ろして何か突き出してきた。

「ア、そのカゴー！」

現代日本が忘れつつある手作り感あふれる籠が、お兄さんの手にかかってた。

最初買物に持って行った時、持ち手のあまりのガサガサに現代の子の手が耐えられなくて血みどろになったから、信じられない！みたいな顔しながらマフくんが持ち手に布巻いてくれて…。

お兄さんが持ってたのは、まさしく見慣れた籠だったわけで。

手を伸ばしたあたしから遠ざけるみたいに、お兄さんが籠を上を持ち上げた。

イラッ としつづムキになって手を伸ばしたら再び遠ざけられた。

「……………返しテ、くれませんか？」

「……………」

無言でじーっとあたしを見てくるオニーサンを睨みつつ訴えた。

あまりの反応のなさにイライラする。

……………ま、まさかこのお兄さん…ひったくり犯だった…のか……………？
じりじりつと後ずさりしたけど、ようやくお兄さんが口を開いた。

「……………どこの国から来た」

「……………日本、です」

「……………ニホン？」

モロに疑ってますみたいな目ですよコレ……………。

てゆーかですね。

お兄さんが持つてるその籠の中、イスカンドルのごはんが入ってるのですよ。

そう、買ったばかりの生肉が入ってるのですよ。冷蔵庫がないとはいえ、台所にはちゃんと氷室みたいなトコもあるわけで。

うん、ぶっちゃけ、こんな直射日光の真下よりも抜群にいいわけだ。肉が腐ったらイスカンダルが腹壊すんですよ。

その辺わかってんのかこのオニーサン。

頭も洗いたいし、籠の中が無事かも確かめたいってのに！

イライライライラ…。

「何なら、カリル將軍ハシヤに聞いてください！」

「何？」

噛みつくみたいないな勢いで叫んだあたしにビックリしたらしい。

降りてきた手から籠を取り返して、ダッシュで家まで帰って、大きく息を吐いた。

疲れたヨー…。

ちなみに中身は…まあ、当然のようにグチャグチャでした。

しかもお肉もなんか変色…。

(……許せ、イスカンダル)

でも念のために焼いて夕食に出したら、新鮮な生肉を食べたかったらしくて、遠慮容赦なく足蹴にされました。

こ、この…お鳥様めー！理不尽だろコレ！？

あのオニーサン、今度会ったら覚えとけ！

イライラしながら果物に噛みついた包帯グルグルなあたしを、マフくんがドン引きしながら見てた。

え、ちょ、何コレ…踏んだり蹴ったり！

2・毒薬フラグ2

「ま、マフくんのこと、悪く言わないで！」

「あ、あ？なんだ、コイツ？」

「…こいつマフムート千人將軍の居候じゃねえか？」

ゲツ…バレてるし！

マフくんは怒られるかも…。

逃げようと足を引いたら胸倉つかまれた。

は、早いよこの人たち！

なんだ、お前らイニシャルGの再来か！？

黒光りする台所の悪魔の生まれ変わりなのか！！？

…と、こうなつた原因を考えてみることにした。

今日も買い物をしに町に繰り出しました。

鳩子（私の伝書鳩。マフくんに借りてる）の餌の買い出しもしたいな、ってことでいつもと違うところまで足を伸ばしたわけです。

にぎやかな繁華街から離れて、家とかが増えてきて、ちよつと閑散とした感じだなつて所。

迷子にならないように目印とかチェックしてるから、たぶん大丈夫。…迷ったら町の人に聞くだけですよ。

で、鳩子の餌をゲットして、さあ帰ろうか、と来た道を引き返した時だった。
なんとなく視線をずらしたら、建物と建物の中に、薄暗くて細い道が見えた。

いい印象が皆無な、若干トラウマな感じの、薄暗い横道。
今はまだ明るいから一応大丈夫だけど、近づきたくない。

やだなー、と思いながらさっさと通り過ぎようとしたのですよ。
でも、できなかった。

見た顔がいたから。

マフくんの部下だ。

細い道の樽の上に座ったりして、休憩中っていつかサボり中って感じ。
じ。

…先生に^{マフくん}告げ口してやるかこの野郎。

給料ドロボーじゃん、とか思ったけど、まあ、サボりたくなる日とかもあるのかなーとか思って、見なかったフリしてさっさと帰ろうと思ったわけです。

いや、ほら、相手も人間だし。

仕事かったりー日とかも、あるでしょうよ。

でも、なんか気が付いたらあの人たちに声かけてた。

だって許せなかった。

……仕事サボって、マフくんの悪口言ってたから。

「文句言うなら、本人に、ドコが悪いと力、言いなさい！」

大嫌いで嫌な場所だけど、踏み込まなきゃ大丈夫…たぶん。

ギラツとこつちを睨んでくる大人げない男3人相手。

いざとなったら逃げてやる。

敬遠されがちな軍人より、あたしの方が町の人たちからの好感度と
か高いし、町まで逃げたらたぶん助けてもらえる。

それに何より、むかつく。

影でコソコソコソコソ、ウツザイのよ！

それでも男かテメェら！

町のおばちゃんたちみたいに、お昼時に群がって堂々とダンナさんの愚痴言ってる方が健全で良い感じなのよ！

…たぶん。

っていうかマフクんの悪口とか！

許せん！

で、こうなりました。

デカイ男のくせに女子供に手をあげるとか！

最低！

でも胸倉掴まれてるから声とか出せない。

ていうか足！足地面から浮いてるからっ！

「あんだ、マフムート千人将軍の家に住んでるんだよな？カワイソ
ーだよな、あんなヤツの世話になってるなんてよ」

「はア…っ！？」

胸倉掴んできてるオニーサンが、目をギラギラさせて言ってきた。

何なんだいきなり！

ていうかカワイソーってなんだ！

確かに家に帰ったりとかできないけど、あたしはカワイソーじゃな
いっての！

つかマフくんからの待遇ってメチャクチャいいんだからね！

三食昼寝付き…とまではいかないけど、勝手に台所とかで遊ばせて
くれるし、服とか買ってくれるし、鳩子だっってくれたんだから！

「冷血で、こつちの事情も聞かず、何でもかんでも規則規則規則と……！」

…まあ、合ってるわな。

だってマフくん、カタブツだもん。

「俺らは毎日食ってくために働いてるんだ。アイツみたいに国の未来なんて考えてる余裕はねえんだよ」

あたしも似たようなもんだけど。

けど、だからって他人にイライラを押しつけるなんて、筋違いでしょ？

「俺らは駒じゃねえってんだ！」

「っ…、ならソレを、本人に言いなさいよッ……！」

「ぐあっ……！」

股間を蹴り上げてみました。

いやー、ちようどいい位置にあるんだもん。ていうか気持ち悪かった。

「っの、ガキッ！調子に乗りやがって……！」

「駒がイヤなら商人にデモなれっテの！軍人なんて、しよせん、上からノ命令に従う駒でしょ！？」

会社員しかり、軍人しかり。

縦社会に組み込まれるのが嫌なら、横の繋がりと客を大事にする商

人になればいいのよ！

ていうか最近美味しい果物屋さんがないから、それにでも転職すればいいのよ！

胸倉掴んでる手を払いのけて、落ちてしまった荷物を抱きしめる。うずくまってるオニーサンの手から逃れようとして、石畳に靴を引っ掛けてしまった。

どしん、と尻もち。

超痛え！

お尻撫でてたら、頭上に、影。

一人が、また胸倉掴んできた。

で、変な顔をした。

「：お前、女？」

「！」

ばれた！

マフクんに怒られる！（心配する意味で）

うずくまってる人と後ろにいた人には聞こえなかったのか、あたしの胸倉を掴んでる人だけ変な顔をしてる。

そりゃー、普通は男装とかしねえわな。

「何してんだ、どけっ！」

「うぎゃー！」

選交代。

もう一人の人が胸倉掴んできた。

なんなんだこいつら、そんなに人の胸倉掴むのが好きなのか！？

この変態フェチめ！！！！

気持ち悪いから嫌だけど、もう一回　を蹴り上げてやろうかと暴れてみた。

でも今度は足が届かない。

…さすが軍人、味方の死を無駄にはしないってか。

「恨むならマフムート千人將軍を恨むんだな…！」

なんでマフくんなんだよ。

手をあげてきたあんたらを恨むよ！

ていうかどんだけ前の悪役だよ、その台詞！

とか、色々文句は出てきたけど。

握りしめられた拳が振り上げられるのが見えて、思いつきり目を閉じた。

ちくしょー！

だから路地裏は嫌いなんだっ…！！

「っ…！」

齒を食いしばる。

ああもう、一応こっちも女なんだから顔はやめろよな顔は！

そんな感じで覚悟を決めたのに。

チツ、と誰かが舌打ちをするのが聞こえた。

「…やめておけ。国際問題にしたくなかったらな」

………？

殴…られ、なかった……？

「ひ…毒薬の…！？」

ざわざわ、波がひくように音が消える。

あたしの胸倉を掴んでる人の手が、なんか震えてる。

誰だ、あの人。

そんな中で男の人が歩いてくる足音がよく聞こえた。

それから、あたしの呼吸がいつぱいいつぱいになってるのも感じた。

一度湧き出した恐怖が薄れた今、恐怖の代わりに満ちるのは冷静な怒りだ。

他の人はどうか分からないけど、あたしはそんな感じ。

というわけで、非常にイツライラしてた。

あたしの胸ぐらをつかんでる人の足を踏み碎いてやりたいぐらいには。

ああもう、なんであたしは今、OLのお姉さんたちみたいなピンヒールを履いていないんだろう！

「失せる」

ビクウツ、と大人げなく男3人が震えあがった。

で、投げ捨てるみたいにあたしを突き飛ばして、逃げてった。

……………。

はっ！

マフくんの悪口を訂正させてなかった！

靴でも投げつけてやるうか、と思っただけどやめておく。

それよりこの人…気になる。

どっかで見たような……………。

「あ。カゴのオニーサンだ」

そっだそっだ、ドロボーに買い物籠盗られた時に、なんかよく分か

らないけど籠を返してくれたんだ。

このお兄さんがなかなか籠を返してくれなかったおかげでイスカンダルに怒られたんだよ！

……なるほど、なんであの人たちが逃げたのか分からなかったけど

…このオニーサンのオーラなら小物は尻尾巻いて逃げるわな。

ていうか…なんでこの人路地裏の出現率が高いんだ？

そもそもタイミング良すぎじゃね？

ま、まさかこの人…アブナイ系の人…！？

「……………」

「……………」

おいこら何見てんだこの野郎。

助けてもらった手前、言えないけど。

ていうかなんでこの人、あたしのこと助けたんだろう。

人としてなら困ってる人を助けるってのは当然かもだけど、だって

このオニーサンだし。

むしろ絡まれてるお前が悪いんだろ、みたいな感じで見捨てそうな

人っぽいけど。

なんでだ？

…あ、国際問題云々だからか。

「異国から来たといっても子どもは子どもか」

「んなつ！？」

な、な、何を言い出すのこの人！

いきなりガキ呼ばわりとか！

ギリギリ睨みつけてたら、呆れたようにため息を吐かれた。

「さっさと行け。目障りだ」

話す速さは早いけど、言葉が短いから理解できる。

ただ、今は言葉が理解できることを素直に喜べないけど。なんだ、目障りって。

そーゆーあんなの前髪の方が目障りだったの！

「…助けteくれて、ありがとウございましたッ！サヨナラっ！」

もう二度と会いたくない！

次会ったらあの前髪パツツンに断髪してやるんだからっ！

…というわけで、今回もイラッ とさせられました。

うーん…あの人、絶対モテないな。

とか考えながら家に帰った。
夜。

帰ってきたマフくんが、変な顔をしてたから理由を聞いてみた。

「…転職して商人になる、と言いだした部下がいたんだ。まあ、彼なら命令に従って動くよりも、あの広い交友関係を活かした職の方が合っていたのかもしれないが…」

「…え、マジで？」

「？リオ、何か知っているのか？」

「い、いえいえ何もー？」

あのうちの誰だったんだろう…。

そんなことを考えながら買い物に行った三日後。

相談もなしにいきなり転職したことを奥さんに怒られて頬を殴られたという男性が、左頬に包帯を巻いた姿で肉屋の店頭で働き始めていた。
あたしの顔を見て腰が引けていたから、股間を蹴り上げたあの人と判明。
ニヤリと笑ってあげたら、ニヤリと笑い返された。
仕事の方は順調らしい。

3・従者フラグ

ある日のお昼のこと。

トルキエに来て、たぶん半年は経ってたと思う。

辞書にメモったトルキエの言葉だとか、市場の人たちのおかげで、だいぶトルキエの言語に慣れてた頃だから。

この頃には、もう日常がパターン化されてきた。

マフくんはお仕事で昼間はいないから、いつも昼間は探検と家事と近所の人たちとの交流をして。

一人じゃ寂しいでしょ？とか言ってくれた近所のおばさんの家でお昼を食べるのが日課になって。

でももらってばかりじゃ悪いな、と思って、創作だったり教えてもらったりするレシピでごはんを作って、持って行って食べたりしてた。

でもって、お昼のことを知った市場のおばさんたちも、各々昼食を持ち寄って来てたりして、ちょっとしたパーティー三昧な感じ。

まあ、そんなある日のこと。

そろそろ作ったお昼ごはんを持っていこうかな、ってお鍋とフライパンを重ね持った、ちようどそれぐらいだったと思う。

玄関の扉がノックされて、お客さんかな？なんて思いながら玄関に行ったら：おひげのおじーちゃんがいたのである。

初日に会った、あのおじーちゃんである。

マフくんにさんざん、「カリル將軍が世話をしてくれてる」^{ハンヤ}とか言われてたから、ちゃんと覚えてるんだぜ！

このトルキエの国の、とつても偉い人。

マフくんは、カリル將軍が、外国の情報を集めてくれてるって言うてた。

だから、カリル將軍が、今、ここにいるって、こと、は……。

かえられる。

日本に、家に、帰れる。

そう思ったら、なんか、メチャクチャ緊張した。

「い、いらっしやい、です！」

なんか、声がちょっと裏返った。

ガツチガチになったあたしを見て、おじーちゃん…もとい、カリル將軍は、ふかふかのおひげの下から笑い声をあげてきた。

「そんなに緊張しなくていいよ。ちよつとりオちゃんに話したいことがあるんだけど、今からいいかな？」

きた、と思った。

日本の情報を、教えてくれるんだ、つて思った。

緊張で手に汗がにじんでる。

おばさんたちには悪いけど、今日はお昼は抜けさせてもらおう。

あたしは頷いて、どうぞ、って家の中にカレル將軍を招いた。

なんか、ぐるぐるぐるぐる、頭の中でいろんなことが回ってる。マフくんのお世話になってばかりだったな、とか。

おばさんやおじさんたちに、今までありがとうって言わなきゃ、とか。

半年近くかかってようやく日本のことが分かるなんて変なの、とか。マフくんは鳩子のことを頼まなきゃ、とか。

イスカンドルとさよならするのはちょっと寂しいな、とか。

せつかくトルキエの言語を覚えたんだから将来通訳の仕事でもしちやおうかな、とか。

…マフくんは、もう会えなくなるのかな、とか。

太陽に当たってるカレル將軍の白い帽子が、ちょっと目に痛い。

今、涙が出そうなのは。

きつと、そのせいだと思う。

「マフ君の調子が良くないんだよねー」

「チヨウウシ？」

あれ、なんて意味だっけ？

えっと…うらかな昼下がりの社交界…という名の井戸端会議で、おばあちゃんたちがよく言ってる…。

最近腰のチヨウウシが良くなってねえ、とか…うちの旦那なんて体のチヨウウシがよくないとか言うくせに可愛い子が店の前を通るとすぐ元気になっちゃってさあ！あ、リオちゃんはいいのよ気にしないで！、とか…。

あ、「調子」か！体調のことですな！
後で確認しとかなくちや。

……え、調子？

日本のことじゃないの？

あたし、まだ家に帰れないわけ？

っていうか……マフくんの、調子が良くない……！？

「どどどうしよう！マフくんが、マフくんが！ってか日本のコトじや、ないのですか！？それよりも、ま、マフくんが……！」

お茶を持ってたこと忘れてパニックってたら、カ ril 將軍が「はいはい落ち着いて」なんてのんびり言いながらヤカンを持ってくれた。
サンキューです！

っていうか、日本のことじゃねーのですかよ！？

いやいや、それよりも、そんなことよりも、マフくんが……！！
ちよ、おじーちゃん、そんなのんびりしてる場合じゃ……！！！！

「まあ、気持ちの問題だと思っけどね。体調はよさそうだし、家もリオちゃんが留守番してるから安心してるだろうし。だから大丈夫だよ」

もふもふの白いひげが、モッフモッフ動いた。

……カ ril 將軍のしわしわの顔に裏がなさそうだったから、ちよっと安心した。

いつもなら、「マフくんってばあたしがいるから安心してるとかー。あのツンデレめーうふふふ……」ぐらい言って身もだえしちゃうとこなんだけど……。

気持ち……気持ちの問題、なあ……。

マフくんの悩みなんて、あたしには全くもって分からん。

可愛い形のコップ（チャイグラスっていうらしい。チャイってスパ

イシーなミルクティーじゃなかったのか…）に紅茶を注いでもらって、アツアツのお茶に息をかけて飲んだ。
熱すぎて味が分からん！

「リオちゃん、忘れてるよ」

「あ、ありがとうございます！」

砂糖がたっぷり入った、細かい金色の入れ物から、カリル將軍が砂糖をたっぷり入れてくれた。

たっぷり…スプーン3杯分…。

これぐらい入れたら一番おいしいんだよ、なんて言われたら…断れんだろうが！

チクシヨー…小太りヒゲもじゃシワシワ顔の笑顔で言われたら…断れんじゃないか！

クリスマスにはぜひともサンタ服を着てほしいところ。

プレゼントを持ってなくても、それだけで胸キュンしちゃうかも。

…いや、プレゼントも欲しいけどね。

物欲的？なんとでも言う方がいい！

「ニホンのことはまだ何も分からないんだよね」

カリル將軍がお茶に息を吹きかけながら言った言葉に、ギクツとした。

もふもふのおひげから白い息が出てるー、なんて和む余裕もなかった。

日本と、トルキエが、違う世界にある国かもしれないって話…マフくん、言っていないの？

…でもその話をしたら、きつと頭がおかしいとか言われちゃうから、マフくんが黙っててくれるのかな。

困ったように首を傾げてるカリル將軍に、ちよつと申し訳なくて、何も言えなかった。

胸のモヤモヤが、なんか、変な感じ。

寂しくて、悲しくて、お父さんお母さんに会いたいとか、いろんなことがぐるぐるしてるのに。

…ちよつとだけ。

ほんのちよびつとだけ…だけど。

…ほつとしてる。

帰りたいのに…まだ…まだ、あとちよつとだけでもいいから、ここにいたい。

あたしがすつごいモヤモヤした顔してたのか、カリル將軍が申し訳なさそうに眉を下げた。

「ごめんね、リオちゃん。もうしばらく待つてね」

自分よりも年上で、しかもとっても偉い人が、しょんぼりしてる姿プラス。

マフくんの「カリル將軍はすばらしい方だ」的な言葉。

……なんか、急に申し訳ないっていうか恐れ多いっていうか、そういう気持ちになった。

やっべ、なんかすげー罪悪感が…！

「あ、いや、ソの、いいデす！気にシないでくダサイ！」

慌てて手をバタバタさせたら、なんか、複雑そうな顔でうーん、とか唸られた。

いや、あの、唸られると困っちゃうんだけど…。

「本当にね、不思議なくらい、まったく情報が入ってこないんだよ。何かニホンについてももう少し情報はないかな？」

「情報…情報…ですか？…うーん……」

なんて言えばいいかなあ…。

世界が違うとかそういうのは、ちょっと忘れることにする。

だってほら、地図が間違つてるとか、あるじゃん？

トルキエって機械がぜんっぜんない国だし、衛星の情報とか、正しい世界地図とか、そういうのがないわけで。

だからほら…ひよつとしたら…ひよつとしたらだけど、本当に、日本だとかアメリカだとか中国だとかいう国のことが、この国に知られてないだけ……かもだし。
うん、きつと、そうだよ！

「えつトですネ、日本は…あたしミたいな、髪も目も黒っポい人たちの国デ、極東の島国デ、中国つてイウ大きな国の東にあるんデす。で、機械いジリが大好きな人たちがいて、えつト…魚が好きデす！」

「そっか、魚が好きなんだ」

「はい！」

………ん？

いやいやいや、魚の話ではなく！

日本！日本の話をしているわけでありまして！

話をもとに戻したいんだけど、カリル將軍の笑顔をさえぎるなんてできないってどうか…話術はあるけど話を戻す言葉がとっさに出てこないってどうか！！！！

もんもんとしながら「あー…」とか「うー…」とか唸ってたら、ふ

おふお、って笑い声が聞こえた。

あ、これこれ。

前に会った時に、楽しそうに笑ってた声だ。

とっても偉い、マフくんが尊敬してるカ ril 將軍が笑ってるなら、大丈夫だ。

あたしのこと、まかせて、大丈夫だ。

絨毯の上で、きちんと正座して、ありったけの気持ちを込めて、頭を下げた。

「日本のこと、お願いします」

「うん、やれるだけやってみるね。だから、リオちゃん」

「はい？」

名前を呼ばれて顔を上げたら、カ ril 將軍が、ちょびつとだけ寂しそうに、笑ってた。

「マフ君のこと、お願いするよ」

その顔と声で、思い出した。

マフくんが、ぽつぽつこぼれてくみたいに、教えてくれた昔のこと。マフくんは小さい頃、戦争のせいで家族を失って、一人ぼっちになっただけ。

でも、カ ril 將軍に助けってもらって、今、こうしてここにいることができるんだって。

カ ril 將軍は、マフくんのお父さんみたいな人なんだ。

「はい」

あなたのマフくんが無理をして倒れちゃわないように、ちゃんとあなたが支える。

具体的に、何ができるんだ、って話だけど、そんなこと全然考えないで。

でも、ありったけの気持ちは込めて。

頷いたあたしの頭を、カ ril 將軍はしわしわの手でゆっくり撫でてくれた。

マフくんが顔や体に怪我をして帰ってきたのは、その日の深夜だった。

4・従者フラグ2（予定）

17話 : 彼とポーンとお祝いの日

「イエーイツ！マフくん、将軍に昇格おめでとうございまーすっ！
！」

どんどんぱふーっ。

帰ってきたマフくんの頭にモツサリ紙吹雪を乗っけてみました。

金紙とか銀紙とかもあつたらもつと派手になったのになあ…ちよつと残念。

とはいえお祝いの品なんて用意できなかったから、せめてー、ってことで夕食を豪華にしてみました。

一年で結構レパートリーが増えたなあ…。

でもって、余つても保存がきかない料理ばかりだから、少なめで品数を多くしてみました。

驚くがいい！褒めるがいい！

「……………ありがとう、リオ」

…おお…マフくんが素直に礼を言った…！
可愛い可愛い可愛いっ！

大きく…なったねえ…お姉ちゃん感動しちゃっ！

はっ！も、もしやこれが噂の…選ばれし将軍にしか発揮できないと
いう崇高なるオーラ…？

「リオ」

「じゅめんなさい」

「…（また変なことを考えていたんだな…）」

思えばこの一年、いろんなことがあった。
今みたいにマフくんがあたしの考えを読むようになってきたのは…
いつからだっただろうか。

恐ろしい子、と引いたら、顔色が読みやすいとか言い返された。

…そりゃあ…イスカンダルに比べたら人間の顔なんて読みやすいだろうよ。

あたしなんてまだ鳩子（連絡用の鳩）の世話で手一杯だから感情とかなんてわかんないし。

それから他には…、外国語習得にワタワタしたり、泥棒に会ったり、偉そうなお兄さんに会ったり…色々あった。

…うん、あのお兄さんのことは忘れよう。

嫌いだ！あの嫌味野郎！！！！

マフくんはなんか、丸くなったらしい。

部下の人たちと話してる姿とか、最初の頃なんて全然見なかったもん。

近所のおばさんたちも、マフくんに声をかけやすくなったって言うてた。

でもってマフくんは最初から話しやすい子だったよ、とか言ったら生暖かい目で見られるんだよね。

なんで？

あ、最初あたしはマフくんのことを女の子だと思ってたんですけど。だからか。

あたしもなんだか女の子に見えるようになってきたんじゃないかな。胸のサイズもこっちに來た時より大きくなったみたいだし？

髪も伸びたし？

…余計なところに脂肪もついたけど。

男性用の服とか着てるからスタイルなんて二の次だけど。

むしろ今さらあんな露出だらけの女性服なんて無理だったの！

「そついえば、どうして昇格のことを知っていたんだ？」

「え、なんか偉い人が教えてくれた」

「…は？」

「マフクんの従者だから君は將軍付きの従者ね、って連絡が来たの」

ねー、鳩子。

くるっくー。

「ちょっと待て！いつ、だれが、だれの従者になったって！？」

「先月、あたしが、マフクんの従者になったの。従者っていうか連絡係？カリル將軍と話して決定したんだよ。あれ、言ってなかったっけ？」

いやー、確定するまでは言わないでおこうとかは思ってたけど。

あれ、言わなかったっけ？

「聞いてない！…っ、カリル將軍はなぜそんなことを……」

「マフくんが部下をことごとく扱き下ろすから従者がいなかったってのが一つ。あたしが家に帰る情報を得るために肩書きが欲しかったのが一つ。マフくんにイスカンダルと鳩子で連絡できるつてのが一つ。あたしが国籍不明かつあたしの話す言語がここでは知られていないってのが一つ。他にも色々あるよ。全部言おうか？」

「…だからって、リオ自身がそんなことをする必要はないだろう？俺が情報をリオに伝えれば…」

「マフくん、分かってる？昇格してたくさんの上立つてこととは、自分を省みる時間が余計に減るってことなんだよ？っていうか前から言おう言おうと思ってたんだけど、元々自分の生活とか後回しにしてるマフくんに、あたしの世話なんて焼く余裕ある？それに、従者の一人もいなかったら、マフくんでは絶対野垂れ死ぬよ！」

前に体調を崩して倒れたんだし、って言う前に、マフくんが反論しなくなった。

うむ、ちゃんとあたしが言いたいこと伝わったんだ。

まあ何にせよ、従者やめます、ってのは今さら言えないんだし。

カ ril 將軍と…ちょっと取引きもしちゃったし。

あ、マフくんって一人で何でもしちゃう感じだから、動きが怪しくならないように動向とかを国に伝える役割をするように、みたいな感じで。

「反論がないならお終い！今日ぐらいのんびりしたっていいじゃない。ほらほら、料理が冷めるよー」

レンジがないから料理を温めなおすのとか大変なんだよね。

紙吹雪は後で片付ける！

今日はお祝いなんだから楽しんだっていいじゃん！

「この話は明日きちんと説明してもらってからな」

「いいよいいよー。…引く気はないけどねー！」

たぶん、マフくんが折れてくれるだろう。
っていうかあたしは引かない。

絶対。

だって、もう1年だ。

だけど全然帰れないんだから。

あたしもちゃんと自分から行動しなくちゃ。

そろそろ日本の料理が恋しいし。

お父さんとお母さんにも会いたいんだ。

マフくんに取り皿を渡して、イスカンドル用の肉も設置。

よし、完璧！

「美味しそうだな。リオが作ったのか？」

「ふっふっふー。もつと褒めてもいいよ？」

鼻天狗になって言ったら、マフくんの代わりにイスカンドルから制裁を喰らった。

…相変わらず、イスカンドルの愛の鞭は痛い。

悶えるあたしを見て、マフくんがいい感じの表情になってた。

穏やかな、ほつとする感じの。

だって今までずっと將軍になりたくてなりたくて、ずっとずっと気を張り詰めて頑張ってたんだもんね。

近くで見てたから、今だけでもマフくんが安心してるのが分かる。

これで戦争が全部なくなるって決まったわけじゃないけど、国政に口出できるし、トルキエを豊かにもできる権限が手に入ったんだから。

夢が叶ったんだから。

「じゃあ、改めて。おめでとう、マフくん！」

「…ありがとう」

それじゃあ、いただきます。

17話 : 彼とポーンとお祝いの日(後書き)

時間経過もあって、里桜が強気になってます。

若干流れが強引すぎた気がしますが…まあ、そこはそれ。

次話から原作突入！

18話 : 迷子のポーンと駆け足の一日

ちよ…またマフくんとはぐれたー！

えええ…ちよっと…あたし、出勤10日ぐらい…よ？

「どこいったのよマフくんっ?!?!?」

主人を見失う従者なんているわけがない！

…あたしにもそう思っていた時期がありました。

そして現在進行形でマフくんを見失い中のあたし…。

えーっと、…切腹モノ？

『給料もらつといてそれはないよね（笑）』みたいなの？

…黙ってたらいいかなあ？

上空でぶんぶん旋回してた鳩子が、のんきに鳴きながら下りてきた。

「マフくん、見つけタ？」

「ほほー」

うん、分からないね！

どうしようもないけど、とりあえず念のために鳩子の足の書簡を見
ておく。

連絡とかする用だから、小まめにチェックすべし、と言われたので
す。

我が熱血師匠マフくんに。

耳が痛くなるぐらいね！

で、鳩子の背中をガツシと掴んで、片手で足から書簡の筒を開けて
みた。

「…入ってるーう」

手紙が入ってた。

…マフくんめ、あたし（部下）に手紙だけよこして自分は自由の身
ってか!?

手紙を見るために鳩子を頭の上に乗せる。

肩に乗せるよって?

…無理!怖いじゃん!

ただでさえこの国では動物に嫌われやすいつてのに、愛しの鳩子に
まで首筋を突かれたら…あたし、立ち直れない!

っていうのもあるけど、何より鳩の羽って結構しっかりしてるのね。
で、バサツと広げられたらあたしの顔がますます哀しいことになる
よ!（断言）

というわけで。

小さい紙をくるくるーと開いたら、マフくんからの気遣い溢れる手
紙が現れた。

…あ、文字が大きいとか、簡潔とかいう意味でね。

マフくんってば普段は季節の挨拶とか謝辞とかはすっ飛ばした手紙
を出す人だから。

「えーつと?… 『緊急の将軍会議デイナーンに召集された。行ってくる』…
……………」

What?

念のため、手紙を裏返す。

真っ白。

もう一回手紙を読む。

…変化なし。

……えーと?

「つまりー……帰宅命令ってことかね？鳩子さんや」

頭の上から唯一の味方に「くるっくー」とか言われた。

「…緊急なら、仕方ない、かあ……」

…帰って、美味しいご飯でも用意しとこう。

この一年ですっかり慣れたむき出しの地面を、あたしが履くトルキエの靴が踏みつける。

「…進歩、ないなあ。あたしって」

役に立たないまんまだ。

……。

「…やっぱり、帰るのやめとこ」

マフくんの手紙からは会議があるとしか分からないけど、あたしの今の立場って、

マフくんの従者じゃん？

なら、『会議があるから先に帰ってる』より、『会議があるから早く来い』の方が正しい気がする。

っていうか、絶対そうだ！

ヤバい、遅刻だ！

「おや、リオちゃん。さっそくお仕事かい？」

「そつでスー！行ってきマーすー！」

えらいねえ、とか、がんばるんだよー、とか言われちゃったよ。

…前から思ってたけど、あたしって何歳に見えるの？

一応17歳なんです…よ？

た、確かにこの国の17歳みたいに発育はよくないけど…。

っていうかエロいオーラが出るのが早いんだよ！

絶対年上のお姉さまだと思ってたらあたしより年下とかザラにあるし。

…へこむ！

まあいいや。

えーと、イスカンドルは…あ、いたいた。

イスカンドルはマフくんの目印なのですよ！

「イスカンドル！」

あたしを見つけたイスカンドルが、ピイ、と鳴いて飛んできた。

羊か何かの皮で裏打ちしてる腕を出して、イスカンドルを止まらせる。

頭の上で鳩子がビツクリして一回ばたついた。

今のあたしは鳥の止まり木だ！

「イスカンドル、マフくんはどこにイるの？」

イスカンドルが視線を向けた所。

会議をする場所だ。

つてことは…間に合った？

「駆け足サイコー…っ！」

よくやった、あたしの足！

息切れもあんまりしなかつたし、これなら今到着したってバレない

よね。

あたしはマフくんみたいにこの国での地位はないから、会議に出られない。

確かに『公認』の従者だけど、あくまで『個人的な』従者だから。要するに、イスカンダルの立場？

…悲しくなんかないやい！

……にしても、暇。

イスカンダルの羽でも梳いところ。

階段に座って、イスカンダルを膝に乗せた。

うーむ、いつも通り、爪が痛いぜ！

猫みたいに引つ込められないからしょうがないんだけどねえ…。

もっさ、もっさ、もっさもさー…お、抜け毛…抜け羽根？

前にイスカンダルの抜けた羽根で羽毛布団を作ろうとしたことがあります。

お隣のおばさんに体に悪いって怒られたからできなかったけどね！

(泣)

いろいろ考えながらぼけーっとしてたら、入り口からたくさん人の話し声が近付いてきた。

会議、終わったのかな。

マフくんどこだー？

「ピーイ！」

「わひゃ!?!」

マフくんを見つけたらしいイスカンダルが、かん高い鳴き声を出して羽ばたいた。

ぐわし、とあたしの太ももを爪で蹴り上げて！

あのヤロウ！

「ちよ、イスカンドル！？鳩子も落ち着けてノ！」

イスカンドルに食べられるとも思ったらしい鳩子が、なんかもう、
暴れ過ぎ！

ようやくホシを確保した時にはみなさんお帰りで、当然のようにマ
フくんもイスカンドルもいなかった。

っていうかあたしの頭が…。

帽子代わりに頭に巻いてたバンダナは落ちてるし髪の毛はぐちゃぐ
ちゃだしで、大変なことになってた。

これだから鳥類ってやつはよお…！（泣）

「って違う！マフくん！マフくんどこー！！？」

これじゃあ結局遅刻だし！

本日二度目のおいかけっこ！？

つかマフくんもマフくんだった！

（自称）娘が会議場のすぐ外で待ってるのに気付いてくれない
だなんて…っ！

それでも母親（本人は認めず）なのかー！！？

愛が足りないんだぜ！

あ・家族愛的な意味で。

でもまあ…済んだことだし。

しょうがない。

探しに行こーっと。

頭を直して、もう一回鳩子を頭に乗せた。

マフくんの肩がイスカンドルの所定位置、ってぐらい定番化してき
た。

空を見上げて、イスカンドルを探す。

いないなあ…。

いないいない…。

いないなななー………？
つて、なんか人通り少なくなってきた。
ていうか…ここって市場の端っこ！
こんなとこまで来ない…よなあ。
散歩するとかでもないだろうし…。

(マフくんはどこなのよーっ！！！)

人前で叫ぶに叫べなくて頭を抱えて悩む。

そしたら道端で遊んでた子どもに指刺して笑われた。
ちくしょーっ！

「あれー？リオちゃん？」

「んん？」

なんか…聞き慣れたおじいちゃん声が…？

どこだどこだ、と見回したら、カリル將軍が手^{バシヤ}を振ってた。

いやあ、相変わらずの首に悪影響な巨大ターバンとモッフモフなひげですなあ。

つていうか先月(従者をやりたいつてお願いしに行った時)以来？
あたしよりちよつと背が低いカリル將軍に手を振り返して。

その隣に、花も恥じらうマフくんを発見！

おかーさーんっ！

まんま迷子の子じゃないかって？

そこは気にしな〜い。

ていうかなんでこんなとこにいるわけ？

まさか本当に散歩とかいうオチ？！

…カリル將軍が隣にいる時点であながち違つとも言えない気が…。
と、とりあえず！

「まま、マフくんーっ！！？」

「リオ！？どうしてここに…！」

ひ、ひでえ……！

イスカントル

あの男のことは忘れないくせに、あたしのはポイ捨てだって言うのねっ！？

酷いわ酷いわっ！！！（泣）

…っでどこのお芝居だよ。

でもマフくんってば、先週からずーっと単独行動ばかりしてるし。あたしが従者だって忘れてんじゃないの？

「あたシ、あなたタの、従者！伝令係！一緒にいるノが仕事！世界の果テまでどこまでモーっ！」

拳手して名乗り上げたら引かれた。

そ、そんなにあたしが嫌だって言うのかい…？

「す、すまない。ついリオのことを忘れていて…」

…マジでかよ！？

すごい…へこむぜ……。

がっくりうなだれてたら、カ ril 將軍が楽しそうに笑って話しかけてきた。

「いい関係だねえ、キミたち」

「どこがデすかー！」

酷いわ酷いわっ！って泣き真似したらマフくんが本気で慌てました。

…本当に女子供の泣き真似に弱いねえ、マフくん……。いつか足元すくわれるよー？

さて。

そろそろ夕方。

鳩子を小屋に戻す時間だ。

そろそろ帰ろうか、と言いかけたあたしに、マフくんが口を開いた。

「リオ、悪いが用事ができたんだ。先に戻ってくれ」

「用事…？」

久々に切羽詰まった感じの顔のマフくん。

仕事？

それならしょうがないか。

頷いたあたしを確認して、マフくんはカ rilル将軍に頭を下げた。

「カ rilル将軍…できるコトをしに行きますので、これで失礼します」

「うん。行っておいで」

顔を上げたマフくんが、なんかすごく、將軍って感じだった。

そんな顔のマフくんはあんまり見たことがなくて、驚いた。

イスカンドルを連れて走って行くマフくんの後ろ姿に、ようやくあたしも気付いた。

今日は緊急で將軍会議もあつたし……何か、大変なことがあつたんじゃない？

それならあたしもぼーっとしてられないじゃん！

何があつたのか聞こうと思ってカ rilル将軍に尋ねようとしたら、あの優しい笑顔を返された。

「さて。それじゃあボクはそろそろ行かないと。ボクの従者たちも待ってるだろうしねえ」

カ ril 將軍のしわしわの手で、背中を撫でられる。につこり笑顔を浮かべて。

なんか… 本当におじいちゃんみたい。

… 久々に家族を思い出しかけた。

みんな、元気かなあ…。

そういえば最近家族のことを思い出してなかったなー、って気付いた。

ちょっと泣きたくなった。

でもって、アンニユイになってたら、いきなり！ 思いつきり！ 背中をばんつと叩かれた。

痛い！

違う意味で涙腺が緩むっ！！！！

「な、なんデすかつ！！？」

「マフ君を、頼むね」

カ ril 將軍の笑顔が、真剣な顔になってた。

… なんか、これでサヨナラって感じの顔みたいだ。

そう思えて、なんか、どきっとした。

「や… やだなー。なんか、お別れミたいな言い方…。」

カ ril 將軍は微笑むだけで、否定しなかった。

ぞわぞわ、なんか、嫌な汗が背中を流れた。

え、どういうこと？

『そついうこと』…なの？

「っ、マフくんの、手伝いに、行きます！」

「うん。頑張るんだよ」

「はいっ！」

さっきのマフくんみたいに頭を下げて、マフくんが走って行った方向にあたしも走る。

どういうことなのか、聞きださなきゃ。

マフくんならきつと知ってる。

だからあんな顔をしたんだ。

きつと、何か、悪いことが起きてる。

それがもつと悪いことにならないように、マフくんはがんばってる。

「マフくん、どごーっ!!!？」

本日三度目の大捜査。

ハラペコのあたしの頭上で、ハラペコらしい鳩子がブーイング代わりに蹴ってきた。

痛い痛いマフくんどこだー!!!!と叫びながら走るあたしを、また近所のガキンチョが笑ってたけど。

気にする余裕もどっかに飛んでっっていたのである。

19話 : 駆け足のポーンとお仕事の夜

「マフくん！マフくんどコー！？」

もう夜なのに走ってっったマフくん。

カ ril 將軍のあの顔。

絶対…絶対、何かあったんだ。

何かは分からないけど、カ ril 將軍のあの顔…。

『やなかんじ…！』

ぼやいてみたけど、マフくんは見つからない。

息も上がってきたし。

でも立ち止まったら鳩子が頭に乗ってくるし…。

……あ、鳩子がいるじゃん。

伝書鳩がここにいるじゃん！

あたしのバカ！

なんで忘れてたのよーっ！

「鳩子！」

頭の上に鳩子に乗せて、急いで手紙を書く準備。

うへあ、インクが手にベツタリと！

>てっただう。いま、どこ？<とだけ書いて、鳩子の足の筒に突っ込む。

ぐちゃぐちゃしたけど…キニシナイ！

「マフくんのトコに、お願い！」

「くるっ」

頼もしく鳴いた鳩子が、暗くなりつつある空に羽ばたいた。

…往復に時間がかかると、完全に太陽の光が消えちやう。

鳥目っていつのか分からないけど、夜になったら鳩子は飛ばなくなるし。

だから、鳩子が飛んで行った方向にマフくんがいるってことで、あたしもその方向を目指して走る。

時間短縮っ！

ランニングハイ突入っ！！

お腹空いたあああっ！！！！

腕時計持っていないから（ていうかこの人たちってみんな時計持っていないのよね…）、正確な時間とか分からないけど。

…^{デイトン}将軍会議に行ってくるって連絡が来たのって、お昼ごろ、だったよな。

ってことは、昼食とおやつを抜いちゃった、と。

…… お腹空いて当然じゃん。

『…マフく…ど、こー！？って…何あれ？』

汗だくで走って走って、家が途切れてちよつと開けた場所があつて、その奥にデカイ壁が見えた。

高層ビルとまではいかないけど…ベルリンの壁？

え、ひよつとしてこの壁って街の端っこ！？

ちよつ…… どんだけ走ったの、あたし……。

結局マフくんにも会えずだし…… ひよつとしなくても道、間違えた……？

うわあ、空もなんかお星様がキレイ…… っって、暗っ！

空暗っ！

つかもつ完璧に夜じゃね!?

『鳩子…間に合わなかったのか…』

オーマイガツ!

あと10分早く鳩子に気付いてたら…とか思ったけど、たぶん気付くのが10分早くても30分早くてもこうなっていたらうから、ふあっきんとか叫ぶのはやめといた。代わりに頭を抱えておいた。

見ててイタいのに変わりないって?

気持ちの問題です。キモチの問題。ハートってヤツですよ。

でもって壁(城壁ってやつ?お城ないけど)の周りでウロウロしてた人たちの一人が近付いてきた。

「…ボーズ、大丈夫か?頭でも痛いのか?」

グサツときた!

何の疑いもなくボーズとか言われてグサツときた!!

「あ、いエ、大丈夫、デス……。ア、犬鷲のマフムート將軍、どこか知りませんか?」

「マフムート將軍ならさつき話したぞ」

「本当ですか!?!」

なな、なんだってー!!!?

ていうかマフくん、足早っ!

こ、これが…リーチの差…?

いや、身長もあんまり差がないはずだし……ま、まさか足の長さ…

…考えるのはやめておこう、そうしよう。

「あ、あノっ、今どこにいるカ、知っテマスか!？」

「ちよつと待ちな。おおい、マフムート将軍がどこ行つたか見てたかあ?」

壁の上でわいわい話してたおじさんの一人が、松明を持って言つてきた。

せめて懐中電灯でもあつたらいいのにね…。

この国の文明開化はいつたいいつになるのか…。

ちなみに一番欲しいのは冷蔵庫です。

家に帰るためにも一番は電話つていいところだけど、とりあえず生活に必要なのは冷蔵庫。

二番目に…水道かな。

あ、扇風機かクーラーも欲しいトコだけど。

「壁沿いに北東へ向かつたぞー」

「おじさんありがトー!」

よし、マフクんに追いつくぞー!

「って、おいボーズっ! 反対だ、反対! そっちじゃない! こっちだ!」

「お、おじさんありがトー!」

うわー恥ずかしい恥ずかしい!

ダッシュして反対方向とか…うむ…今度からはちゃんと聞いてから

にしよう…。

あー…マフくんどこだろ…。

お腹空いた…お金持ってるし、市場でおばちゃんから果物でももらってこようかなあ。

…んお？

あ、あの鳥の下で走ってる影って…！？

「…まっ、マフクン…っ！」

ぜーはー言いながら走ってって声をかけた。

大当たりっばくて、振り返った時にきらめいた美貌にあたし、メロメロ。

…冗談はおいとくとして。

いや、冗談じゃないんだけど、…言ったら確実に怒られるし。

「リオ！どうしてここに…！？」

『手伝うって書いたでしょ！？ほら、何したらいいか教えて！』

息を整えながら顔を手で仰ぐ。

湿気はないから夜は涼しいんだけど（むしろ寒いめ？）、熱いー汗が…。

ていつか鳩子よ…マフくんの肩でお昼寝たあ…いい度胸じゃねーの！

「…全く…。だが…助かる。人手が欲しかったんだ。…ありがとう」

天使の頬笑みが…っ…！！

『…っ…か、かわいい…じゃなくて！あたし、何をしたらいいの？』

「…壁伝いに夜間勤務の兵たちへ聞き込みをして欲しい。最近使用した矢の用途と、本数の確認、それと帝国方面から不審な人物がこなかったか調べてくれ。調査だと俺の名前を出してくれて構わないから」

…聞き込み？

帝国って、トルキエの北にある国だよな？

…マフくんは、カ ril 將軍は、トルキエのトップだよな。ってことは…いや、今は、いいや。

言われたこと、ちゃんとしよう。

今、戦争とか言われたら、あたし、びびって動けないって。気合入れて、腹に力を入れる。

…よし。

給料分のお仕事はしなくちゃ！

『「や」って…弓矢のことだよな。うん、分かった。どこで待ち合わせとか決めとく？』

「そうだな。日が昇ったら一度連絡を入れる。とりあえずリオは鳩子連れて行ってくれ」

ちよーっと、怯みかけた。

日が昇ったらって…うん、朝まで強行ね。

ちゃんとマフくんについていきますよーチクショー！（泣）

『了解！後で事情、教えてね』

「ああ」

「おいで、鳩子！」

「くるっ」

トルキエの言葉じゃないと鳩子はちゃんと反応してくれない。

ていうか日本語でちゃんと反応してくれるイスカンドルが賢いだけ？

まあ、あたし以外の人も鳩子を使うんだから、日本語に適應したらまずいんだけど。

腕を出したら、イスカンドルよりもずっと軽い鳩子が乗っかってきた。

鳩子をしっかりとバンドナを巻いた頭の上に乗つけて、マフくんとは反対方向に行く準備。

よし、うん、がんばろー。

走ろうとしたら、マフくんが呼びかけてきた。

「リオ、これを」

差し出された手に、…なんだろ、棒？

何かなーって思いながら受け取ったら、なんかズシツとした重み。

見た目よりずっと重かった物体を遠くの明かりを頼りに調べて、ビツクリした。

『これ…って、剣！？む、無理！こんなの持てないよ！』

ゴージャスな鞘に入った、なんだろ…ゲームとかアニメとかに出てきそうな、短剣？

なんか刃がぐるっとカーブしてる、30cmの物差しぐらいの長さの…？

いや、でも…モロに刃物だし。

ていうかあたし、刃物なんてカッターとか包丁以外に持ったことな

いんだけど!!？
銃刀法違反ってなんだっけ…？

「…リオ、君はそんな服装でも女性で、しかも子どもなんだ。俺の仕事を手伝うというなら最低限の装備は身に付けておくんだ。それができないなら、家でおとなしく…」

ムッ！

ちよっと…バカにしていますー!？

『やる、やるってば！引かないよ！だってあたしはマフくんの従者なんだから!』

従者従者って利点に目が行って名乗り上げたんだけど、マフくんの手伝いができるって、なんか楽しいし。
あたしにもできることがあるって、嬉しいことだ。
だから、やるからには…全力でやるよ。

「…分かった。リオ」

『ん?』

「無理はするな」

『む。それ、マフくんに言われたくない!』

あつかんべーしておいた。

だってマフくんでは、倒れるぐらい仕事に夢中なんだもん。

短剣は…手に持ってたら邪魔だから、マフくんみたいに腰にさそうとして、…失敗。

うつむ…走る時に落ちるなあ、これ。
しかたないから、袖口に突っ込んでおいた。

『さてと…行こっか、鳩子』

「くる……」

『眠そうだねー…』

あたしはこれから徹夜だったのにー！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4380h/>

彼を愛したポーンの思惑

2011年7月31日07時18分発行